

914.3-132ウ



1200501969864

742—743

子 草 枕

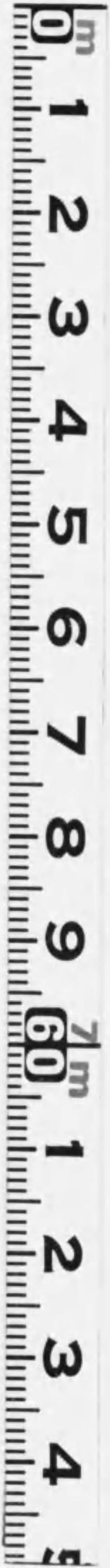
(抄 曙 春)

卷 上

訂 校 鑑 龜 田 池

店 書 波 岩

914.3
I.32



始



9143

I.320

(1)

庫文波岩

742-743

子草枕

(抄曙春)

卷上

訂校鑑龜田池



店書波岩



清少納言枕草子解説

一書名

所謂枕草子は、「清少納言が（又はの）記」とも八雲抄略して「清少納言」とも明月よばれた。
記
「清少納言枕草子」とつづけるのは、寶物集以後、鎌倉時代の物語・和歌等の抄に多く散見するが、
これは、「清少納言が枕草子」と、「が」又は「の」の字を附してよむべきであらう。次に「枕草
子」も、「まぐらのさうし」と、「の」の字を加へてよむのが普通である。「草子」は、「草紙」と
も、「双紙」とも書かれるが、その語義には諸説があつて一定し難い。冊子の同音の轉化であら
うとも、雙び紙の意であらうとも、草稿の意であらうとも云はれる。内容的に云へば、草稿風な
もの、表向きならざるものを輯録したものと見る説が、一般に有力である。

次に所謂清少納言枕草子に、何故「枕草子」といふ名をつけたか、そのつけた人は何人である
か、明かでない。北村季吟は、春曙抄に於て、二説をあげてゐる。その一は、この草子に先づ枕
詞即ち題詞を書き、その下に本文を書き連ねてゐるから、その二は、この草子の跋文にあること
く、枕にこそはし侍らめとて申しうけたる物にかかれた草子であるから、としてゐる。契沖も河
社卷二に於て、「枕草子となづくるよしは、彼草子の奥に、みづから書けるが如し」と、跋文記載

の事情によるといふ説を肯定してゐる。しかし、跋文そのものが果して作者自ら記する所であるか否か確證なき故に、かりに名稱が跋文の記述に關係ありとするも、直ちに作者自ら命名する所なりとは斷言し難いのである。かりに又、跋文が確かに作者の自記にかゝる所なりとするも、これが所謂枕草子の全部に亘るか、又は一部分に限られた跋文であつたか、不明である。されば、現在の資料よりしては、この草子の名稱に關して、これ以上明確なる斷定を下すこと頗る困難としなければならぬ。

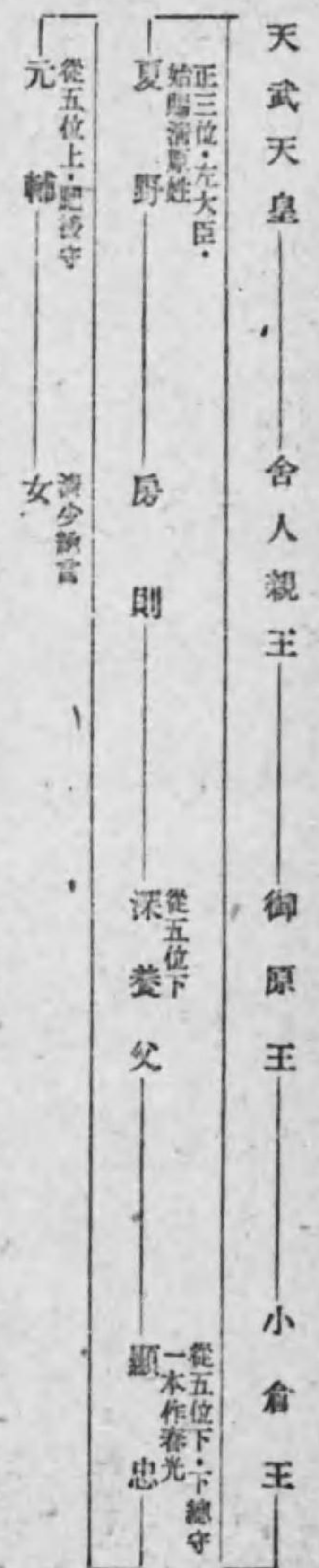
さて、「枕草子」といふ意味は、枕にするばかり身に近くもてあそぶといふ心であらうと、契沖の説があるが、従ふべきであらう。別に「枕箋紙」と稱する本があるが、これは跋文に「置置座右、夜置枕上」とあつて、惠心僧都の作である。一箇の假説にすぎないが、かくの如き例から、枕草子とは、座右に備ふる草子といふ一般的な意味、即ち普通名詞として用ゐられ、固有名詞として用ゐられたものでないと考へることも出来よう。幾種かの枕草子中、特に「清少納言の」と制限を附して、他と區別することも、あり得ることである。しかし、これは一層確實なる證據なきかぎり、單なる臆説にすぎない事は云ふまでもない。

二 作 者

枕草子の作者は、清少納言であるとされてゐる。現存の諸本が、すべて作者自記にかゝるものでなく、後人によりて手を加へられたものなることは疑ふ餘地のない所であるが、しかし原作者

を清少納言にあらざるとして、古來信じられてきた定説を覆すが如き根據も發見されない。

清少納言は、傳記未詳であるが、扶桑拾葉集所載の系圖を抄出すれば、



の如くである。但し、深養父は元輔の父を深養父とするのみならず、その家系も、類從本清原系圖の如く、扶桑拾葉集、大系圖等に比して大りに異なる。清原氏系圖に關しては別に私見もあるが、今は類はしいから略す。しかし、顯忠は春光とす方が正しいであらう。因みに春原抄には春光を養光に作る。

清少納言は、曾祖父清原深養父以來、有名な和歌の家に生れた。深養父は、古今、後撰の作者として著名な歌人であつたが、官途甚だ進まず、延喜中内匠允となり、延長中内藏大允となり、從五位下に叙せられたのみで終つた。その孫元輔は、天曆中河内大掾となり、大中臣能宣等と勅を奉じて後撰集を撰んだ。所謂梨壺の五人の一人である。元輔は源順等と共に萬葉集に訓點を施し、當時の學界に大いなる業績を残したが、位は僅かに五位、官は一國の守を出てすして終つた。しかし、歌人としての元輔の聲望は甚だ高く、清少納言すら、父祖の名を辱しめざらんことを期してゐたらしい。かつて中宮定子が、「元輔が後と云はるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる」と仰せられたるに、「その人の後と云はれぬ身なりせばこよひの歌は先づぞよままし」と啓したる

によつても、その一端がうかがはれるのである。

清少納言の事蹟は、枕草子所載の事實の外には、以て信をおくべき資料がない。伊勢貞丈の撰と稱せらるゝ「枕草子抄」には、少納言の名は諸子ナホコとあるが、信ずべからざるものである。或る説に、女房作者部類六に「清少納言七歳にして手をよく書き、十三歳にして令義解を講じ、廿歳にして歌人の間となれり」とある記事を引いて、その學才の拔群なりし證としてゐるが、これも確かなものではない。その生年に關しては諸説があり、筆者にも私見があるが、今その考證を省く。

子 草 枕
清少納言の宮仕せし事情及び時期は明かでないが、草子中「宮にはじめてまゐりたるころ」の段に、伊周を大納言と云つてゐる記事、「めでたき物は」「圓融院の御果ての年」等の段中の記事、「鳥は」の段に、「十とせばかりさぶらひてききしに」とある記事及び積善寺供養に今参りてあつたといふ記事等により、正暦元年より、全四年までの間に宮に上つたものと考へられる。草子中の記事によれば、宮仕をはじめた頃は、「身のほど年にはあはずかたはらいたし」とも、「わかからん人々はたさもえかくまじきことのさまにや」とも、「いとさだすぎふるふるしき人の」とも述懐される年頃で、若く美しき時代ではなかつたらしい。

中宮定子は、清少納言の才學を愛し給ひ、少納言も亦宮の御徳を慕ひ奉り、まめやかにお仕へしたらしいが、やがて中宮の御父道隆薨じ、伊周・隆家等の變起り、道長の勢力漸く宮廷を掩ひ、その女彰子後宮に寵を専らにするに及んで、中宮の勢力は全く衰へ、浮薄の人心は多く世と共に去つたが、少納言のみは常にこの薄幸の宮にまゐつて誠實をつくした。長保二年、皇后御産あつ

子 草 枕
て後、計らずも御不例の事があつたのに、少納言は節を改めず、いとねむごころに宮の御爲めにつくした。その時の事情は榮華物語鳥邊野の卷に詳しい。かくして宮は、十二月、不遇の沖に世を空しくせられ、少納言は鬱々として里にこもり、深くとざして再び出仕しようとしなかつたらしい。扶桑拾葉集作者系圖に「清少納言初仕皇后定子後爲上東門院侍女云々」とあり、堺本枕草子の奥書に「深養父孫元輔の御娘にて上東門院に候せしとぞ云々」とあり、その他二三の系圖に、上東門院彰子に仕へたやうに出てゐるが誤りであらう。又春曙抄には「榮華物語に三條院の女御淑景舍道隆公女定子妹の御もとに宮仕せしよし見えたり」と云つてゐるが、榮華にはさやうな記事は見えない。鳥邊野の卷に淑景舍の頓死せられたる次第を記したる條に「少納言の乳母などやいかがありけん」とあるのを思ひあやまつたのであらう、なほ伊勢貞丈の著と稱せらるゝ「枕草子抄」に、中關白記・窓中抄・季經抄等によりて引用せる記事は、信を置き難いものである。

子 草 枕
上述の如く、道隆・道長の反目抗争せしことは正史に明記する所であるが、少納言が、道長の室倫子に親交ありしことも、清少納言集中に明證が存するのである。されば、この一事が、中宮方女房の悪言の好材料となり、かつ中宮の御疑念の材料ともなり得たかも知れない。しかし、草子中に、一も彰子の御上にふれざるのみならず、清少納言集・異本清少納言集等のもとより、當時の文獻（管見に入れる範圍に於て）に、動かし難き證據の存するを知らず。従つて、今はその節操を疑ふ根據をもたないのである。

定子崩後の清少納言が動靜は一切不明であるが、古事談に、少納言は落の後、尼となつて、京

の郊外に住めるころ、若い殿上人が車に乗つてその宅の前を渡りしといふ説話が見える。無名草子に「はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、めのとの子なりける者にぐして、はるかなる田舎にまかりて云々」とある。「はるかなる」とは、武藤氏の説の如く、文の修飾で、やはり京近いわたりを意味するであらう。續千載集に「老の後こもりて侍りけるを、人の尋ねまうできたりければ」とあり、新古今集に、「元輔がむかし住みける家のかたはらに、清少納言すみける頃云」とあるのは、やはり中宮崩後の事と解したいから、これ等によつて、晩年出家して都近いわたりに住んでゐたらしいと想像される。四國に旅したといふ説も勿論確かなものではない。

次に清少納言の終れる場所は明かでないが、一説に讃岐象頭山の鐘樓の傍に古墳がある開田とも云はれ、又一説に阿波國撫養郡に五輪の塔がある和漢三才圖會とも云はれる。この外なほ各地に清少納言の遺蹟と稱するものが、存するに相違あるまい。これ等は、美人徘徊傳説とも稱すべき一群の説話型式に属するものにして、果して史實なりや否や、なほ十分考證を要する。恐らく少納言は、京近きあたりにて歿したものと想像されるのである。

次に、少納言は人に嫁したりや否やにつき、明かな記録はないが、枕草子中の記事及び勅撰集中の詞書によつて、婿となれるもの一人、他にわりなく語らへるもの、少くとも二人は推定される。續作者部類庶女の部に「清少納言カ女新拾二一首」とあるは、宮仕中、これ等の人々との間に生れたるか、或は、宮仕前に一度結婚したことがあり、その時に生れたるか不明である。清少納言は、學問藝術の家に生れ、日本國見在書目録所載の支那の書は、恐らく大部分讀破し

てゐたものと想像される。彼はまことに才智の婦人である。今鏡にも「ことになさげある人に侍りし云々」と見え、當時四納言と稱せられたる俊賢・公任・行成・齊信等をはじめとし、文壇の諸大家と交り、縦横の才智を發揮せし由、枕草子に見え、悦目抄・公任集・實方朝臣集・和泉式部集・赤染衛門集等には、これ等の人々との交遊の歌が見える。彼が放膽にして細行を愼まず、多少術學的なる傾向ありしことは、紫式部が、その日記に於て批評せるによつても知られよう。

清少納言の著作としては、枕草子・清少納言集あるのみである。別に異本清少納言集一卷が、宮内省圖書寮に藏せられる。世に「松島記」と稱する紀行があり、清少納言の作とも稱せられるが、偽作であることは已に古人の説く通りである。勅撰集中に見える歌は、作者部類によれば、後拾遺戀二に一、雜二に一、雜五に一、詞花戀下に一、雜上に一、千載雜上に二、釋教に一、續後撰戀三に一、續古今雜中に一、玉葉戀一に一、戀三に一、雜五に一、續千載戀に一、雜中に一、首である。

三 成 立

枕草子の成立年代は、確證なければども、草子中に寛和二年六月の事と思はれる記事が見えるのが最初で、それから十五年後の長保二年八月の事と思はれる記事の見えるのが最後であるから、少くとも長保二年以後に完成したものと見るべきである。清少納言が中宮定子に仕へたるは正暦年中であつたらしく、草子の記事もこの頃から多くなつて、長徳・長保・わけて元年二年の記事

が多い。三卷本枕草子の終に「左中將まだ伊勢の守と聞えし時云々」とて、枕草子の草稿本が、左中將の手で世に出された由の記述がある。この跋文は後人の追記と思はれ、にはかに信用し難きものであるが、もし何等かの根拠があつて書かれたものであるとすれば、左中將即ち源經房が伊勢の守たりし時、即ち長徳元年同二年の頃已に枕草子の一部が脱稿してゐた事になる。

枕草子の成立年代は未詳にして、これを證すべき資料が無い。又この草子が、如何なる事情で執筆されたるか、その執筆は長期に亘りたるか、短月日に脱稿したるか、又作者自筆の本は、果して現存の流布本と同様のものなりしか否か、これ等の疑問を解決すべき確證もない。跋文によれば、執筆の事情がほぼ分るやうであるが、これとて、果して作者の記する所であるか、後人のさかしらなるか不明である。吉野記によれば、この草子は源氏物語に對抗して執筆されたものとなるが、この説も亦穩かとは思はれない。なほこの草子は、支那の李義山の雜纂に摸して作られたとなす説もあるが、その根拠も可なり薄弱である。

今、現存諸本の比較研究より到達したる結論に従へば、枕草子の原本は、今の流布諸本よりも著しく異なるものではなかつたであらうか。この假説は、もとよりあくまでも一箇の假説にすぎざれど、ひとり異本研究の結論より導かるゝのみならず、創作過程の内省、作者の性格、環境等よりも同、様に導かれ得るのである。即ち枕草子の原形は、現存諸本の如く雜然たる編纂物にあらず、整然たる組織を有せしにあらずやと想像されるのである。即ち枕草子は、類纂的部分と日記・紀行・感想の部分との二部があつて、各々成立の事情及び年代を異にするのではないかと

想像される。換言すれば、前者は、當時の分類學の方法に従つて、和歌に關係多き情趣の對象を類別輯録し、これに文學的表現による解説を附したるものにて、論理的・學究的態度のもとに成り、後者は、折りにふれて見聞したる事どもと、何の組織もなく雜然と書き連ねたるものにて、情緒的藝術的態度のもとに成つたてはないかと想像されるのである。

さて上述の如く、枕草子の原形に二つの部分を假定し得るとすれば、この二つの本より如何にして現存流布の本が生れたるか。按ふに二つの部分は、まとめて一部とせられたるが、一度散佚したる後、無責任なる後人の手によりて、再び今の本の如く雜然と纂輯せられたるものではなからうか。しかして、轉寫の際更に誤脱を重ねたるものが、主として現存同系統の諸本の對立を來すに至つたてはなからうかと想はれるのである。

右の假説が、或る程度まで、可能のものとして許され、卷末にある二つの跋文も、亦全然否定し去るにしのび難きものとせば、次の想像が許される筈である。即ち中宮の賜はりたる料紙に、先づ第一に書かれたのが類纂的部分であつて、これは長徳元年の頃に成立し、次いで、日記・紀行・感想等の部分、長保二年以後二三年の間に完成したのではないかと推定されるのである。尤も類纂的部分と目すべき「鳥は」の條下に「十年ばかりさぶらひて云々」とあるが、この記事がもし後人の書加へてもなく、轉寫の誤でもないとするならば、十年ばかり宮仕したる後の事なれば、長保二年以後に書かれたものでなければならぬ。さすれば、一度成立したる類纂の部分も、後に至つて、更に修正補筆せしものと見ねばならぬ。この増補訂正こそ、枕草子に異系統の

異本を生ぜしめた他の一つの重大なる原因となりはしないであらうか。

三條西家藏の古寫本の奥には、一條院一品の宮修子内親王の本が傳はつてゐたと書いてある。もしこの記載が、ある程度まで信じられるものであるとすれば、この本こそ、中宮崩後修子内親王に傳はりしものなるべく、恐らく清少納言の自筆の淨書本か、又は原本を最も忠實に模寫したる本で、しかも類纂の部分であつたと見るのが至當と思はれる。即ち、長保二年十二月、中宮崩御以前に於て、枕草子の一部分、——即ち類纂の部分は成立してゐたと考へられ、これが修子内親王に傳はつたと解しておきたいのである。尤も、後半の部分の完成したる後、更に全體を一旦とめとして修正補筆し、再び清書の功を終へて、一品の宮に獻じたとも考へられるが、とにかく崩御以前に於て、類纂的部分の原形は、必ず成立してゐなければならぬと、種々の理由より斷言し得られると思ふ。

要するに、枕草子の成立年代及び事情に關しては、精密なる異本研究と、詳細なる傳記考證とを基礎として、はじめて、明かにせらるべきである。そして、今の所では、この兩者の研究が、ほとんど物になつてゐないのであるから、成立に關する一切の問題も、従つて不明不確實であるといふより外にないのである。

四 諸 本

枕草子には異本が甚だ多い。岡西惟中の枕草紙旁註に、當時三種の異本が行はれてゐた由を述

べてゐる。三種の異本中、第一種は三卷本、第二種は五卷本、第三種は七卷本である。三卷本は三卷三冊或は四冊に分つ。から成つてゐて、他の諸本よりも比較的正しい本文を傳へてゐるやうに見えるが、後世あまり行はれなかつたらしく、現在ではわづかに數部(宮内省圖書寮・近衛公爵家・故富岡謙藏氏・前田侯爵家・内閣文庫・松井簡治博士・久原文庫・京都帝國大學・鈴鹿三七氏等の所藏本)の古寫本が傳へられてゐるに過ぎない。まだ學界に紹介されてはゐないが、勸修寺伯爵家に、教秀自筆と思はれる古傳本が藏せられてゐる事は、伯爵自身の證言によつて確めることが出來た。又、岩瀬文庫には、教秀自筆の本によつて書寫せし由の奥書を有する寫本が藏せられてゐる。この系統の本には、

本云往時所持之荒本紛失年久、更借出一兩本、令書寫之、依無證本不散不審、但管見之所及勸合編記等、注付時代年月等、是亦謬案歟。

安貞二年三月

誓及愚翁在判

とあり、更に、

文明乙未之仲夏、廣橋亞槐送實相院准后本下之本末兩冊、見示曰余書寫所希也、嚴命弗獲默馳禿毫、彼舊本不及切句、此新寫讀而欲容易、故比較次加朱點畢。

正二位行權大納言 藤原朝臣教秀

とある、この跋文の意味は不可解な所が存するし、廣橋亞槐なる人もはつきりしないが、看聞御記永享四年十一月廿三日の條に、「日野中納言頼朝可申日野之由」とあるから、日野中納言兼頼の子綱

光をさすのかも知れない。又安貞二年の跋文の次に、

古歌本文等雖尋勘、時代久隔、和歌等多以不尋得、繪見事等在別紙。

とあり、この次に

自文安四年冬比、仰面々令書寫之、同五年中夏事終校合再移朱點了。秀隆、兵衛督大徳書之

仕

とある。近衛家本・富岡氏本・圖書寮本・日野柳原氏舊藏本岩瀨文庫藏等が、この系統の本である。

教秀自筆本は、秀隆の手書本又はその轉寫本を書寫したるものなるか、或は秀隆の手を経ざる三卷本を書したるものなるか不明であるが、恐らく後者ではなからうか。岩瀨文庫本は、奥に、

右枕草紙上中下三卷 借請教秀自筆古本、令書寫之、尤可祕藏。

天明二年九月上旬

正二位藤判

子

とあつて、教秀自筆本をもつて書寫せし如く思はれるが、にはかに信じ難き理由が他に存する。三卷本には二種の異本があるが、これは秀隆自書本と、教秀自筆本との二系統から生じたものではないかと想像される。右二つの異本を一つにまとめて奥書を年代順に書き下した人は、誰であるか明かでないが、或は清原枝賢であつたかも知れない。圖書寮本・近衛家本・富岡氏本等に、

右本切句勘文爲證本之由見于奥書矣、家傳之本紛失、仍拭老眼染禿筆令書寫貽後昆者乎。

正三位 清原朝臣枝賢 法名道白

とあり、前記の三種の跋文を悉く集成してゐるからである。枝賢のことは清原氏系圖にも見え、

言繼卿記にもしばしば散見するが、公卿補任天正九年の條に、

、非參議 從三位 清枝賢 六十 四月九日叙正三位。同月十一日出家。法名道白。天正十八年十一月十五日卒。 とあるによつて明かである。

上述の如く三卷本には、二種類の異本が現存して、互に異同があるが、いづれも蘆及愚翁の手入本を寫し傳へたものである。三卷本は奥書を有する傳本中、最も古いもの一つで、惟中が、「少而見者亦少」と云ひ、秀吟が「尾州より一本を得たり。上下二冊、其本紙ふるく手跡中古の筆體なりき云々」と云つた本である。淺野侯爵家には、後光嚴院宸翰と傳へられたる繪卷が藏せられるが、この本文は三卷本である。又架蔵の一本は、宗祇法師の拔書せしといふ本で、同じく三卷本の系統のものである。

次に五卷本は、逍遙院時代のものと信すべき古寫本二冊、現に三條西伯爵家に秘藏せらる。その本の奥書によれば、この系統の本はもと能因法師の所持せしものらしく、これを五冊に分けたのは後世のことであるやうである。三條西家の本は、そのまま細川幽齋によつて寫された。それは細川侯爵家蔵の古寫本二冊の奥に、

枕草紙或有多少或有前後、本々不足、以何爲正、此兩冊者從三條羽林令恩借送書寫、他日集類本可點檢者也。

天正廿年三月日

幽齋文旨 判

とある。この系統の本は、姉小路濟繼によつても書寫されたらしい。又高野辰之博士蔵の一本、筆者蔵の一本は、いづれも室町末期の書寫にて、この系統の本である。幽齋の所持本は、因州藩

土宮本孝庸によつて寫され、更に惟中に傳へられた。幽齋自筆本の系統は、二冊であつたにかゝらず、惟中が何故に五卷の本と云つたか。幽齋は三條西家の本を寫した本以外に、別に五冊の本を所持してゐて、それを孝庸に傳へたのであらうか。幽齋自筆本は旁註本よりも、むしろ慶安の木版刊本に類似するのはどうしたことであらうか。この點は不明であり、筆者にも愚見があるが、今はかりに惟中の説に従つて、旁註本は幽齋自筆本の系統に屬すべき筈であるが、當時流布の他の異本を以て校合したために、かく本文の異同が生じたものとしておかう。

なほ幽齋自筆本の系統としては、十行・十二行・十三行の古活字本がある。右の中、十行本は最も古い活字本で、傳本も少く、管見に入れるものは、ただ内閣文庫に五冊藏せらるゝのみである。次に十二行古活字本は、十行本によつて更に翻刻したもので、年代は少しく新しいものである。岩崎文庫・近衛公爵家・京都帝國大學・神宮文庫等の藏本がこれである。十三行本は、寛永頃のものと思はれ、岩崎文庫(二部)・久原文庫・内閣文庫(二部)・京都帝國大學・帝國圖書館・廣島高等師範學校・澁嘉堂文庫等に藏せられる。以上の古活字本は、五卷となつてゐるが、幽齋自筆本と比校して見ると、多少の相違がある。幽齋の本は、必ずしも古活字本の親本となつたとは云へない。むしろ兩者は姉妹の關係に立つと考へる方が正しいかも知れない。活字本は、旁註本に比校して見ても相當に異同がある。北村季吟の春曙抄・加藤盤齋の枕草紙抄等にも、五卷本の影響はたしかにある。これ等の本文の亂れたるは、諸本による校合の結果であらう。

次に第三の七卷本とは、「清少納言」と題名を有する木版刊本の事である。この本は明らかに卷

數を示さないため、後世或は七冊、或は五冊、或は四冊に分けてあるが、普通七冊になつてゐる。奥に

慶安二曆初夏上旬、二條通 澤田庄左衛門刊板

とある本で、惟中が「七卷之本書林風月堂開板多行于世」と云つた本のことである。この本は細川幽齋自筆本即ち五卷本に最も類似した内容を有し、これと同じ系統に立つ本であるが、或る時代に傳寫の誤差を生じたまま、傳へられて今日に及んだものと思ふ。従つて五卷本と七卷本とは形式的な差異に重きを置いた名稱であつて、内容的に著しく異つたものではない。もとは同一の系統であり、冊の立て方によつて、かく異本の如く考へられたのであらう。そして五卷本も七卷本も、もとは卷を立てず、上下二冊となつてゐたのではないかと、三條西家藏古寫本その他の本の形から推定されるのである。

以上は大同小異の異本であるが、これ等の諸本に對して、全然異つた系統の本と思はれるものに異本枕草子がある。この本は別に後光嚴院宸翰本ともよばれ、その奥に、

這本以、後光嚴院宸翰不違一字書寫功了、右清少納言枕册子原爲一冊、標題無之、半面十一行書之、今分上下加題目 且文章中雖有可疑者、以謂後光嚴院宸翰、不違一字書寫、不敢改之、如假名遣亦備任本畢。

とあり、群書類從にをさめられてゐて、前述の諸本とは全く異つた別の本で、字句はもとより章段の數及び順序も著しく異つてゐる。三卷本・五卷本・七卷本の系統の諸本は、何の順序も組

織もなく雜然と章段が立てられてゐるが、この宸翰本には、一つの組織がある。即ち記事の分類が三部に分れてゐて、第一類は天地自然の現象又は事物に關するもの、第二類は人間の精神生活に關するもの、第三類は四季の情趣に關するものが、ほぼ組織的に纂輯せられてゐるのである。

宸翰本の系統の本で、今一本珍らしい本は堺本である。堺本とは、春曙抄及び群書一覽に「又一本上下二册堺本とて宮内卿清原氏の奥書あり。發端より一紙がほどは、よのつねの本に大かた似て、其次枕詞の次第など大かた異なり云々」と見えてゐる本のことである。この本には奥に

(前略) 泉のさかひに世をそむきたるわざしていとまあるを幸として好事の佳士道巴といふ翁の心の月をすまして身のさとり明かなるが持ちなれたる本をしばし借りもちりて書寫せしむる所なり(下略)

時に元龜元年十一月日

宮内卿清原朝臣

とあるから、しか名づけられたものであらう。この宮内卿清原朝臣と云ふのは、清原朝賢である、と、三卷本にも關係があつて面白さうである。しかし、たしかに、さうであると斷言するには、今少し調査を要しよう。

堺本は、細川幽齋も見たし、北村季吟も加藤盛齋も見てゐるけれど、古來傳本きはめて稀で、今でも、わづかに無窮會文庫・靜嘉堂文庫・高野辰之博士等の藏本を數ふるのみである。別に前田侯爵家に、「四季物語歎之由ノ書」と題する古寫本があり、これが堺本の一部を抄記した本であることは、育徳財團の複製本の解説に詳しい。堺本は宸翰本の系統のもではあるが、宸翰本と

異なる所は、その章段の数の多いことである。即ち宸翰本は、「きよげなるわらはへの云々」の段で終つてゐるが、堺本は更に「七月つごもりがたに云々」の段につづき、四季の情趣を主にして叙し、人事上のあはれなる事どもに對する感想を記し、最後に衛門佐のぶかた一本にのぶがが御嶽に詣つた事をのべて巻を終つてゐる。よつて思ふに、宸翰本は堺本の如き本から抄出したるか、或は脱漏せしものかそのいづれかではなからうか。

上述の諸本に對して、全く異なる本は、前田侯爵家藏の古寫本で、現在四冊であるが、もと五冊あつたものではないかと、色々な理由から想像される。古筆家は、この本の筆者を藤原爲氏とも、民部卿局とも云つてゐるが、少くとも鎌倉中葉を、るものではない。この本は整然たる分類と組織とを有し、三卷本・五卷本・七卷本・堺本等の諸本の要素を公平に含み、最も興味ある本の一である。この本の組織は、第一冊が自然現象又は事物についてのべ、第二冊が人間の情生活活について記し、第三冊が四季の情趣、人事上の感想についてのべ、第四冊が、作者の見聞せし事どもについて記したものである。これ等の分類は、和名抄以後の字書の體裁にならへるものと見るべきで、六條家の清輔・顯昭等の分類、順徳院の御分類等に近いものがあるから、その頃整理されたものではないかとも考へられるけれど、それよりも、清少納言の原作それ自身か、かゝる體系のもとに成つたと考へる方が、より一層適切であらうと思はれる。尤も、前田家本そのものは、原作その儘の形でなく、後人の整理したものに相違はないが、ただ原本に最も近く整理されたと考へたいのである。巻の分量から云つても、前田家本の如き體裁に分けるのが最も至當で

ある。前田家本は、他に類本が一本も発見されないのてあるから、おそらくやんごとなきにあたり、秘本として傳へられ、容易に人の見ることを得なかつた本に相違なからう。又、もし、この本が、諸本を比較校合した上で、綜合整理された集成本であるとすれば、かゝる本文批評の大事業が、鎌倉初期以前に於て、成功してゐたと考へられ、源氏物語河内本の成立と相並んで、國文學研究史上注目すべき事實と云はねばならない。しかし、それは今の所いづれとも斷言する根據のないのが遺憾である。

五 内 容

枕草子は、異本によつて多少内容に増減があるが、しかし、その編述の様式に大異あるほどの異同はない。この書の内容は大體次の通りである。

- (一) 自然の現象に關するもの。例へば、日は、雲は、ふるものは等。
- (二) 地理地文に關するもの。例へば、山は、森は、池は、島嶼等。
- (三) 土木家屋に關するもの。例へば、關は、橋は、みさゝぎは、社は、寺は等。
- (四) 動植物に關するもの。例へば、木は、鳥は、馬は等。
- (五) 神佛に關するもの。例へば、佛は、神は、だらには、修法は等。
- (六) 人に關するもの。例へば、法師は、をんなは、大夫は等。
- (七) 趣味娛樂に關するもの。例へば、ひくものは、歌は、ものかたりは、あそびは等。

- (八) 裝束に關するもの。例へば、そくたいは、狩衣は、夏のうはぎは等。
- (九) 日用品又は調度に關するもの。例へば、ひあふぎは、おりものは、すずりのはこは、たたみは等。

以上は、第一類に屬するもので、主として天然自然の現象又は客觀物に關するものである。次に、

- (一〇) 主觀的な精神内容に關するもの。例へば、めでたきもの、あはれなるもの等にて、第二類に屬す。
- (一一) 四季の情趣に關するもの。例へば、正月一日は、五六月の夕つかた等にて、第三類に屬す。
- (一二) 自然又は人生の感想に關するもの。例へば、男はめおやなくなりて云々、若くてよき男の云々等にて、第四類に屬す。
- (一三) 日記・紀行等に關するもの。例へば、淑景舎東宮にまゐり給ふ云々等にて、第五類に屬す。

枕草子の内容は、上述の如くこれを五類に分けることが出来る。前田侯爵家本は、この分類のままが冊に立ててあつて、これが最も原本の面影に近いものではないかと想像されるのである。

この草子は、古くから李商隱の雜纂に模倣して作られたものとされてゐる。いかにも作者は義山雜纂を一見してゐるには相違ない。しかし、雜纂を模倣せずば、この作は生れないとなすが如

きは、本質に對して盲目である漢學者流の偏見である。枕草子は、雜纂の如き淺薄なる戯作者的態度によつて生れたものではない。この説の不當であることは、石原正明の年々隨筆をはじめ、近世諸家の等しく論じた所である。枕草子は、むしろ和名抄・古今六帖の感化のもとに成つた方が、雜纂に教へらるゝよりも、はるかに必然的である。清少納言は、かつて武藤元信翁が云はれたやうに、和歌をものするやうな氣持、換言すれば熱心なる創作慾に驅られて筆を執つたのである。源順等をはじめ、當時の碩學の間にあつて、直接漢文學の影響を受けた作者が、論理的なる分類意識のもとに、清新鋭敏なる感受性、奔放自由なる聯想を縱横に使驅して成せるもの、即ち枕草子である。そこには類型的な物の見方、或は感じ方が、根本的に打破せられ、個性に徹したる美論が組織立てられた。枕草子によつて、當時の美意識が整理せられると同時に、新しい美の世界が開拓せられた。その意味に於て、我等は、枕草子を通じて、はじめて當時の感情内容の具體的形態を、確實に把握することが出来ることと云へるのである。

この草子の成立した時代は、王朝時代の宮廷女流文藝が、最高潮に達しようとしてゐた時代である。即ち日本文學に於けるロマンチズムの傾向が、爛熟の頂點に達しようとしてゐた時代である。従つて當時の作品は、いづれも多かれ少かれ、幻想的、感傷的傾向を示さないものはない。和泉式部でも、紫式部でも皆同様である。しかるに枕草子は、浪漫的精神を多分に盛りながら、しかも著しく感傷的傾向を見せず、冷靜なる知性と批判的態度をしつかりと保持してゐる。そこに、學者としての清少納言の性格の一面が反映してゐると云へないであらうか。

六 研究史

清少納言枕草子は、源氏物語と並び稱せらるゝ國文學史上の大作であるにかゝはらず、近世に至るまで、この草子自身の研究は大成されてゐない。本朝書籍目録に「清少納言枕草子二卷、同注十卷、季經卿注」とある本は今傳はらないが、この本のことは花園院御記にも引かれて、たしかにあつたにはあつたらしい。季經といふ人の傳記は明かでないが、顯輔の子宮内卿季經ではないかと思はれる。六條家の人々は、その歌書によれば、早くから枕草子にも著目してゐたらしく、分類には、單に古今六帖のみならずこの草子の感化を受けたと想像されるから、彼季經が進んで註を書くことはありさうな事である。鎌倉初期には、鑿及愚翁或は定家と名乗る人が、この草子の本文を校定し、勸物を家本に加へた。源氏研究家として知られた源光行・親行等をはじめ、四辻宮・長慶院も、源氏研究の傍證としてこの草子に着目せられた。足利中葉に至りて、傳能因所持の舊本の寫しが、三條西家や姉小路濟繼に傳はり、細川幽齋は三條羽林實枝の恩借によつて之を書寫し、更に三卷本・堺本等の異本によつて研究し、これを宮木孝庸に授け、その説は更に岡西惟中に傳はり、惟中は傳來の本即ち五卷本に諸本を校合し、師説を祖述して枕草紙旁註十一卷を著はした。幽齋の研究は、他の方面にも感化を及ぼし、松永貞徳の門に出た加藤盤齋と北村季吟との研究を導いた。前者は清少納言枕草紙抄十五卷であり、後者は枕草紙春曙抄十二卷である。枕草子の研究は、以上三書によつて大成されたと云つてもよい。就中、春曙抄は他の二書を壓し

て、枕草子の定本の如く考へられて今日に及んだ。春曙抄以後、この草子の研究は引きつづきなされたが、その中最も代表的なるは、伊勢貞丈の作と稱せらるる枕草子抄一巻である。これは枕草子中から、有職・故實・家具・調度等に關する事項を抄出して、これに考を加へ、中に作者の傳記、草子の名義、成立等に關する考證を附したものである。一々信をおけない蕪雜な説もあるが、とにかく注意すべきものである。次で、加藤千蔭父子は、本文批評を試み、契沖・正明等は、考證を、清水濱臣・山崎美隆等は解釋を、いづれもすぐれた業績を残した。又藤井高尙は枕冊子新釋を、同高雅は枕草子參考を著したと云ふことである。その他、前田夏蔭・黒川春村・齋藤彦麿等も、解釋上に新説を出した。殿村常久の千草の根ざしは、枕草子にあらはれた草木につき、壺井義知の裝束抄は、服飾故實に關し、いづれも指針とすべき研究である。その他伴直方の枕冊子考、岡本保孝の枕草子存疑等は、この草子の種々なる疑問について解説を試みたものである。明治以後の研究としては、先づ鈴木弘恭氏の訂正増補枕草紙春曙抄があり、春曙抄の誤れるを正し、足らざるを補つた。又松平靜氏の枕草紙評釋は、黒川眞頼翁の講義をもととして、諸説を集成した。その他に佐佐木弘綱・萩野由之諸氏の研究もあるが、就中武藤元信翁が、畢生の努力を傾けた枕草紙通釋と、東洋學藝雜誌々上に發表せられた論文とは、枕草紙研究史上區劃的な大研究である。

七 枕草紙春曙抄について

本書は、卷十二の終に「延寶二年甲寅七月十七日、北村季吟書」とあるから、この時に成つたものであらう。「寛政六甲寅七月購版、江戸淺草茅町二丁目 須原屋伊八」とある本もあるが、初版のものではない。初版の刊行年月は明かでない。後刷の本も板式は初版と同一であるが、所々文字を改めた部分があるやうである。明治廿六年、青山堂の發行にかゝる鈴木弘恭氏の訂正増補本がある。その緒言に註釋書あまたある中に、春曙抄をもつてよろしとする由を云ひ、

されど、その抄中なほ校考のいまだしきところ假字の誤りたるものどものあるは、いとあかぬ心せられて、こたび萬歳抄・活字本・清水濱臣校合本・黒川春村校合本・天文五年古鈔本・其の他一二の異本をもて訂正を加へ、ならびに假字の誤をもかきあらため、さて舊註に漏れたる所、或はあやまれるふしのあるは、加藤盤齋・清水濱臣の考、竝に契沖阿闍梨・石原正明・橋千蔭・黒川春村等先達の説をもてこれを増裁す。しかのみならず、わが師黒川眞頼翁の考、および愚考をもよりよりにかづけたり。と、用意のほどをのべてゐる。

春曙抄は、枕草子巻頭に「春は曙」とある所から、題號としたものであらう。出版年月は延寶二年七月よりも後れてゐたと思はれる。しかるに、加藤盤齋の著と思はれる清少納言枕草紙抄は延寶二年五月刊行されたことが確かであるから、春曙抄は、必ず「抄」を見てから後に出たにちがひない。季吟は、盤齋とほぼ同様の異本を見てゐるが、校合に對する態度は、兩者とも決して正しい態度ではない。諸本の本文も何等斷る所なく取捨し、甚しい所になると、私意をもつて、

勝手に古典を改竄してゐる。春曙抄に至つて、枕草子の詞章の意味は甚だ通り易くなつたが、それにもかゝけらず、本文は益々不純になつた。この誤れる校訂の態度が、明治・大正をへて、今日にまで及んでゐるのは、悲しむべき限りである。しかし、春曙抄は、本文校定上缺陷があるとは云へ、「抄」に比して、章段の立て方、註釋ともに穩健で、正鶴を得、後世の註釋書は、ほとんどこれを参考しないものはない。まことに枕草子研究者の必ず見るべき入門書たるに異論はない。今日なほ學者の書齋に缺くべからざる参考書となつて、もてはやされてゐるのは當然と言はねばならぬ。なほ枕草子及び清少納言に關しては、云ふべきことは甚だ少くないが、限られたる紙面であるから、すべて割愛することとする。

凡例

一、本書は、清少納言が枕草子を、なるべく簡易に理會し鑑賞せしむるために、古來註釋書として最も信用せられたる北村季吟が春曙抄を、出來得るかぎり忠實に活字にうつしたるものなり。

一、春曙抄は、枕草子諸本中、必ずしも最良の本文を傳ふるものと斷言すること能はず。しかれども、從來最も多く世に流布し、信用せられたる註釋書にして、枕草子研究者の必ず一讀すべきもの、しかも、近來印行の本甚だ少く、これが入手容易ならざるものあり。今その全文を本文庫に收むるは、この書を古典として取扱ひ、これが普及を希ふがゆゑなり。

一、本書は、大體木版本春曙抄に従へりと雖も、左記の如き場合には便宜訂正修補することとせり。

イ、原本章段を立てざれど、今これを立つ。

ロ、原本の假名遣は之を改め、漢字をあて、誤字は之を正す。但し、漢字をあつる際には振假名を附して、原本の面目を示す。又原本已に振假名の附せられたるは、片假名をもつて、別にこれをあらはす。

ハ、原本の傍註は頭部に記し、原本の頭註は、これを一節の終りにまとめ示す。

二三 人にあなづらるゝもの……………一〇三
 二四 にくきもの……………一〇四
 二五 小一條院をば……………一一一
 二六 文ことばなめき人こそ……………一二四
 二七 心ときめきするもの……………一三〇
 二八 すぎにし方戀しきもの……………一三一
 二九 こゝろゆくもの……………一三三
 三〇 檳榔毛はのどやかに……………一三三
 三一 説教師は顔よき……………一三五
 三二 菩提といふ寺に……………一三〇
 三三 小白河といふ所は……………一三一
 三四 七月ばかり……………一四一

卷三

三五 木の花は……………一四七
 三六 池は……………一五〇
 三七 せちは……………一五二

三八 木は……………一五五
 三九 鳥は……………一六〇
 四〇 あてなるもの……………一六六
 四一 虫は……………一六七
 四二 七月ばかりに……………一六九
 四三 にげなきもの……………一六九
 四四 細殿に……………一七三
 四五 主殿司こそ……………一七四
 四六 職の御曹司の……………一七五
 四七 殿上の名對面こそ……………一八三
 四八 若くてよるしき男……………一八五
 四九 わかき人とちごは……………一八六
 五〇 人の家の前を渡るに……………一八七
 五一 瀧は……………一八九
 五二 川は……………一九〇
 五三 橋は……………一九一
 五四 里は……………一九二

五五 草は……………一九三
 五六 集は……………一九六
 五七 歌の題は……………一九七
 五八 草の花は……………一九七
 五九 おぼづかなきもの……………二〇一
 六〇 たとしへなきもの……………二〇二
 六一 忍びたる處にては……………二〇三
 六二 懸想人にてきたるは……………二〇四

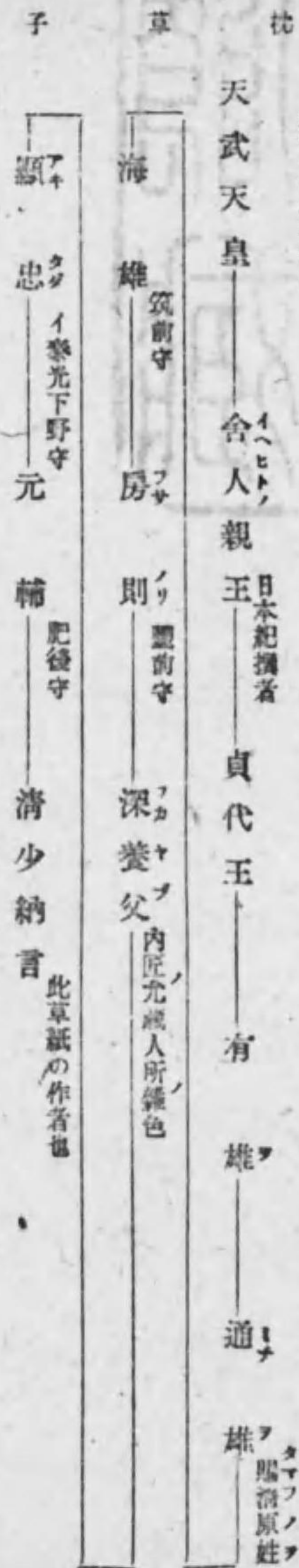
卷四

六三 ありがたきもの……………二〇七
 六四 うちの局は……………二〇八
 六五 職の御曹司に……………二一三
 六六 あぢきなきもの……………二一五
 六七 いとほしげなきもの……………二一五
 六八 こゝちよげなるもの……………二一六
 六九 とりもてるもの……………二一七

七〇 御佛名のあした……………二一八
 七一 頭中將の……………二一九
 七二 かへる年の……………二二八
 七三 里にまかでたるに……………二三五
 七四 物のあはれ知らせ顔なるもの……………二四〇
 七五 さてその左衛門の陣に……………二四〇
 七六 職の御曹司に……………二四二

枕草子春曙抄 卷一

枕草紙は、清少納言の筆作也。少納言は、清原元輔のむすめなれば、其姓を用ひて、清少納言といへり。父の元輔は、後撰集の撰者梨壺の五人のひとり也。天曆五年梨壺にて、能宣、元輔、順、時文、壺城等後撰をえらべり
 清原氏系圖



83
 玄旨法印御説に、清少納言は、一條院の皇后宮の女房と云々。此皇后宮と申し侍るは、中關白道隆公の御むすめ、定子と申し侍りし。此草紙の所々に、宮のお前と侍る是也。然るに、榮花物語に、三條院の女御淑景シヤクケ舍シヤ定子テイシの御もとに、宮づかへせしより見えたり。愚案、此草紙に、淑景舍の御事は所々に出てたれど、此御局に宮づかへせし事は見え侍らず。但、此草紙にあらはせる人々の、官などを勘へ侍れば、一條院の長徳年中、長保元年、二年などの事どもにて、其の方の

事見えざるにや。彼皇后宮は、長保二年十二月十五日にかくれさせ給へり。淑景舎は、三條院の東宮にておはしましけるほどに、まゐり給ひて、四年ばかりや宮づかへし給へりけん。さて長保四年八月廿日にかくれ給へれど、猶皇后宮には、二とせいきのこり給ひければ、かの皇后宮隠れ給ひてのち、はらからの御かたなれば、もし清少納言もまゐりかよひたるにや。然らば、榮花物語に赤染衛門のしるせる所は、此草紙かける後の事にてや侍らん、可尋之。
新古今集云、元輔がむかしすみ侍りける家のかたはらに、清少納言すみける頃、雪いみじうふりて、へだての垣もたふれ侍りければ、申しつかはしける。赤染衛門

跡もなく雪ふる里は荒れにけり

いづれ昔の垣ねなるらん

又玄旨法印百人一首抄云、清少納言老後には、四國の方におちふれたるものと云々。愚案 一條院の御代のはじめに、道隆公關白し給ひ、定子皇后宮に立ち給ひて、御威光もめてたかりしに、清少納言も、かの皇后宮にめしまつはされて、上臈の次にてまじらひ、其才いみじかりければ、内侍になすべき沙汰などの事、此草紙に見えたり。しかるに、關白殿道隆かくれさせ給ひて、御兄弟ながら、御中よからざりし御堂殿、關白し給ひて、上東門院入内ありて、中宮に立たせ給ひなどして、後には、伊周公、陸家卿など遠流の事ありき。皇后宮は、女みこ男みこなどうませ給ひけれど、ほどなくかくれさせ給ひ、御いもうとの淑景舎も、うちつづきてうせ給へれば、彼御かたの人は時をうしなひて、成り出づべきやうもなくなりゆきしに、清少納言も、さるあれた

る所にすみ、四國にもさまよひ給ひしにこそ。此草紙にも、其昔をしたふ思をのべて、此皇后宮の御威勢ありしほどの事を、所々に書きあらはし、我身の世にはめはやされし事ども、數多かれ侍りしにや。或説に、清少納言誓願寺にて出家して、帝の御かへりみをかうぶり、いみじき往生をとげて、彼寺に墓も有り、縁起に見ゆ。時代にあはて、一旦はおちぶれしかども、終焉のさまはいみじかりけん事、才ありし人の、しるしめてたく候ふにや。
題號を枕草紙といへる心は、此草紙に「こと／＼なる物」、「めてたき物」など枕詞をかきて、さてそれ／＼と書きつらねられたれば、枕草紙といへるにや。但し、此草紙の奥に云、「宮のおまへに内のおとどの奉り給へりしを、之に何をかかまし。うへの御前には、史記といふ文をなんかかせ給へる、とのたまはせしを、枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、さはえよ、とて賜はむたりしを、あやしきを、こよ何やと、つきせずおほかるかみのかすを書きつくさんとせしに、いと物おほえぬことぞおほかるや」と云々。枕にこそし侍らめとて、申しうけたる物にかかれたる草紙なれば、まぐらざうしと、申し侍るなるべし。草紙は、双紙ともかけり。草紙は、物の下がきを草案、草稿などいへる、其心にて、いまだ清書をもしあへざる物とのこゝろにや。双紙は、かみをならべてかきつらねし心なるべし。いづれも、昔物がたりなどの惣名をいふ也。
此さうしの文體、やごとなき物にて、我國の至寶といはれし源氏物語に双び稱せられて、源氏・枕草紙と、申しつづり侍るにや。吉田の兼好ほうしかつれ、草にも、此草紙を庶幾せる所々おほし。其筆のあや、詞の優美、心の幽玄、更にいはんも、いまめかしき姿なるべし。

此草紙、異本さまざまあり。或は二冊、或は三冊、或は五冊一決しがたし。古今和歌集、後撰集源氏物語等は、定家卿の證本ありて、世に定まり侍るに、枕草紙には、いまだ此卿の御本を見出だし侍らず。承應二年の春、尾州より一本を得たり上下二冊。其本、紙ふるく、手跡中古の筆體たりき。其文意、あざやかにて、所々に朱點をくはへ、且又、人々の傳、官考などしるされたり。奥に異本兩通かきくはへられ侍りしは、此本、多本を合せて、用捨せられし事しられ侍り。其奥書云、

往年所持之愚本紛失季久更借出二兩之本二令書寫之依無證本不レ散二不審二但管見之所レ及勘三合舊記等二註二付時代季月等二謬案賦

安貞二季三月

卷及愚翁在判

文明乙未之仲夏廣橋亞槐送三實相院准后本二下レ之本末兩冊見レ示曰余書寫所レ希也嚴命弗レ獲レ止馳三禿毫二彼舊本不レ及レ切レ句此新寫讀而欲二容易二故此拉レ之次加二朱點二畢

正二位行權大納言藤原朝臣教秀

此卷及愚翁誰人にや。勸物は此作にて、朱點は教秀卿と見ゆ。此奥書のまま、證本と用ひ侍らんに、とがあるまじくや。又一本上下二冊、堺本とて、宮内卿清原氏の奥書あり。發端より一紙がほどは、よのつねの本に大かた似て、其次枕詞の次第など大きに異也。又、清少納言の歌よみし物語一段も、書きつらねず。此本も、先達の用ひ給へる由の、奥書など見えたれど、只、此卷及愚翁、教秀卿等の奥書の本のおもむきを、古人の用ひ給へる證據おほし。まつ、後拾遺、千載

集、新古今、續古今、玉葉集等にいりし清少納言の歌詞書までも、皆此本のままと見えたり。其外、順徳院の禁秘抄、八雲御抄等に、清少納言か記にあり、とせるさせ給へる事ども、又、基俊の悦目抄に、香爐峯の雪の事あり。兼好法師が徒然草に、かれたる葵の事などかけるも、此草紙の此本をもちひられし事なるべし。又、此本のたくひにも、少々異本ありて、所々かはりめありといへども、多本を見合せて、中によろしきを用ひ侍りし。

此草紙に、中古に季經の抄十冊ありと聞き傳へ侍れど、いまだ見侍らず。只、多年此草紙をよみて、心に會する事あれば、食をも忘れて、がきくはへおき侍りし。禁中の事どもは、延喜式、西宮抄、北山抄、又、此双紙より後の書ながら、其事のたよりあれば、江次第、禁秘抄、雲圖抄、二條大閤御所の年中行事の歌合の註、一條禪閣御所の公事根源などをかながへ、官位事は、官位令、職原抄、百寮訓要抄などを用ひ、家々所々は、順の和名集、拾芥抄に勘へ、名所は、歌枕等ありといへど、此草紙をよく沙汰せさせ給へる故に、八雲御抄をとり分きて用ひ侍り。彼卷及愚翁の勸物にもらせる人々の官考、系圖、傳などは、公卿補任、大系圖、榮花物語、大鏡、作者部類等にておきなへり。引歌は、萬葉集、古今六帖、三代集よりこのかた、代々の撰集、家々の集等に勘へ、神社は、日本紀、三代實錄、延喜式など、卜部の家説等を引きまじへ、佛のうへは、其經々を勘へ、古語は、漢家の諸書にかながへ、古詩は、文選、文集のたくひ、菅家文章、本朝文粹、朗詠集など用ふといへど、猶、我朝の詩文には、疑はしきを闕く事おほし。此國詩集、數多は見侍らねば也。衣服の色々は、飴抄、桃華藥草など、河海抄、花鳥餘情などの類、やまと詞

の品々は、源氏、伊勢物語の諸抄を証とし、土佐日記、大和物語、狭衣、宇治拾遺、古今著聞
江談、おちくぼ等の古物語、其外、多年見し所の歌書の中にて、この双紙の便りとすべきを用ひ
註して、偏に門人の歌學のためとし侍り。

一あかくなりたる也
二日の入りかたちかき也
三文體奇妙にや
四鳥さへあるに
まして雁は面白
き也
五炭もちてあり
く也
六似合はしき心
也
七せうさいふも
のになりたる也

春は、曙、やうく白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細く
たなびきたる。夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢飛びちかひたる。雨など
の降るさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山ぎはいと近くなりたるに、
鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁な
どのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと巖
のねなど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのい
と白く、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづき
し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになり
ぬるはわるし。

○春はあけぼのやうく、白くなりゆく——曙アケボノ、物同、まづ時節の景を書
き出でたり。爾雅云。春爲三青陽一萬物發生ス。はるはよろづの物生ずる初めな
れば、發端にかけり。此の發端に、春は曙を賞していへる少納言の心あらはれ
て、枕双紙一部の形容もこもり侍るべし。其の次に夏はよるを賞したる、以下
實に奇妙にや。此ののち堀川百首、六百番、台などにも、春の曙といへる題を

出だされ侍り。其の外歌にあまたよめり。
○むらさきだちたる雲の——曙の雲うす黒きに、日影うつろひて、紫の色めきたる也。

○夏は夜——晝は暑氣の堪へがたければ、夜を賞したるにや。さらでも夏は夜を賞して、朗詠にも夏夜の題あり。

○月のころはさらなり——月の夜頃は、いふも今更也。勿論の事と也。

○秋は夕ぐれ——朗詠にも秋晩の題あり、「秋は猶夕ま暮こそただならね萩のうは風萩の下露」などもよめり。

○からすのねどころに——綺語抄云、「夕まぐれねにゆく烏うちむれていづれの山のみねにとぶらむ。」

○冬は雪のふりたるはいふべきにもあらず——いはむかたなく面白き心也。

○又さらでもいとさむき——霜雪の降る頃ならでも、冬は寒きをもてはやすべしと也

○ぬるくゆるびもてゆけば——別に冬の寒きを愛したる心をさとむる詞也。冬も晝は寒さも、ぬるくぬるみゆけば、埋火なども、疎略になつたるはわろしと也。冬の朝の寒きに、燐火もてあそぶこそつきづきしけれと、いはむための詞也。

二

ころは 正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべて折につけつ、一年ながらをかし。

三

正月一日は、まいて空のけしきうらくと、めづらしく霞みこめたるに、世にありとある人は、姿かたち、心ことにつくろひ、君をも我身をも、祝ひなしたるさま、ことにをかし。

○正月一日はまいてそらのけしきうらくと——前に正月三月など云ひ出で、ひととせながらをかしと書きしをうけて、元日まして面白き事をいふ也。こゝはむつきついたちとよむべき也。うらくはうらくと同じ。春の長閑なる空の氣色をいふ也。堀河百首に、「から衣春たちきぬとききしより日のうらく」となりけるかな。

七日は、雪間の若菜青やかに摘み出でつゝ、例はさしもさる物、目近からぬ所にもて騒ぎ、白馬見むとて、里人は車清げにしたてて見にゆく。中の御門のとしきみひき入るゝ程、かしらども一所にまろびあひて、刺櫛も落ち、用意せねば折れなと

一 さやらの物也
二 白馬を見にの
く草也
三 棚(トジキミ)
藤同、門のしき
み也

四用意覺悟もな
く、ふさまろび
て捕のをれたる
也
五イ母もより
て馬ごもより
六わづかにそご
見入れたる也
七立部

八九重、禁中を
いふ也、禁中に
あり馴る、人を
うらやむ心也
九類の地はた也
一〇白粉也、職人
齋歌合に、しろ
い物うりさあり
二馬のをごりあ
がるさま也
三車の内へひき
いる心也

して、笑ふも亦をか。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなどして、舎人の馬どもをとりて、驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、立部などの見ゆるに、主殿司女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をか立ちならすらむなど、思ひやらるゝに、内にも、見るはいと狭き程にて、舎人の顔のきぬもあらはれ、白き物のゆきつかぬ所は、まことに黒き庭に雪のむら消えたる心地して、いと見ぐるし。馬のあがり騒ぎたるも、おそろしく覺ゆれば、引き入られて、よくも見やられず。

○七日は雪間のわかたあをやかに——七日の若菜のあつ物は、もろこしより用ふる事也。事文類聚云、人日探ニ七種菜一作羹。歳時記、河海抄云、七種は薺、蕪、芹、菁、御形、酒を代、佛座。世語問答云、正月は少陽の月也。又七日は少陽の數也。仍つて朝廷をはじめとして、私の家にいたるまで、宴會を催す也。それにあつものを食すれば、萬病又邪氣を除く術也といふ本文あり。○例はさしもさる物、めぢかからぬ所に——めぢかからぬ所とは、目にちかく見なれぬ也。若菜の羹などいふ物を、見なれぬ宮殿わたりにも、飯ぶ心也。○白馬見むとて——あをむまとよむべし。年中行事歌合註ニ條太閤御注云、正月七日青馬のせちるといふ事は、馬は陽のけだ物也。青きは春の色也。これによりて、正月七日青馬をみれば、年中の邪氣をさり、年災を除くといふ本文侍と

かや。愚案、是十節錄、并皇世記等のおもむき也。猶延喜式、江次第等に委し。河海抄云、光仁天皇寶龜六年正月七日、天皇御ニ楊梅院安殿ニ設ニ宴於五位以上ニ已而内既宴進ニ青御馬ニ兵部省進ニ五位已上裝馬ニ是青馬始也云々。○中の御門のとじきみ——待賢門を中の御門と號す。拾芥にあり。中の御門は大内裏の東の御門にて、白馬の陣へちかきゆゑに、此の門より車にのりて見に
いるさま也。白馬の陣は建禮門をいへり。左馬陣は春華門也。江次第二に、左馬陣右白馬陣など、白馬のせちの所にあり。○かしらどもひとところにもまらびあひ——青馬見る車に、女房あまたあひのりてゆくに、門のしきみ引きいるゝ所にて、車ゆるぎて、皆ころびあひたるさま也。○さしぐしもおち、よういせねばをれ——延喜彈正式云、凡内命婦三位以上聽レ用ニ象牙櫛。梁塵愚抄云、一條禮門御説、刺櫛は女のひたひにさすくし也。○左衛門の陣——建春門をいへり。およそ衛門府は、宮城の諸門を守る官也。其の中に西の諸門は右衛門守りて、宜秋門、これ右衛門の陣也。東の諸門は左衛門守りて、建春門、左衛門の陣也。陣とは其の官人の居る所をいふなり。○殿上人——逍遙院御説云、四位、五位、六位までも、昇殿を聽たる人を殿上人と申す也。

○とねりの馬どもとりおどろかし——白馬のせちの、馬ぞひの舎人也。イ本とねりの弓どもとりて。馬どもとり驚かしてとは、近衛の隨身などの弓にて、馬をうち驚かしたる也。

○とのもりづかさ——伊勢物語に、つとめてとのもりづかさのみるに、とある是也。玄旨法師云、とのもりづかさは、御殿をつかさどるもの也、其の身堂上せざる故に、其の寮より、女孺と云ふ女をたてて、御殿の事を役する也。殿上人などに、つかはれなどしてある者也。後官職員令曰、殿司、尙殿一人、掌供二奉、輿、繖、膏沐、燈油、火燭、薪炭之事、典殿二人、掌同尙殿、女孺交。

○女官——にようくわんとよむべし。にようくわんとよむときは、女御更衣以下おしなべていへり。にようくわんとは、名目抄云、女公人の總名也、藏人命婦などより下つかたの官女也。禁秘抄云、女官、寮所女官、御装束物沙汰、不可レ口入供御、但近日兼二刀自云々。そのほか御湯殿の女官などあり。江次第に、主殿女官、御手洗女官、掌縫女官などいへる是也。

○見るはいとせばきほどにて——禁庭といへど、只今見る所はひろからねば、舎人がかほもよく見ゆる也。

○とねりがかほのきぬもあらはれ白き物の——馬車の舎人の化粧の、ところまだらなる様也。

八日、人々よろこびして、走り騒ぎ、車の音も、常よりはことに聞えてぞかし。

○八日人々よろこびいはいはひ——八日には女敘位、給女王祿一ことなどあり。其のよろこびしたる心にや。女叙位は、女の位階を敘せらるゝ事にて侍る也と、年中行事の註にあり。其の次第圖など、雲圖抄に見えたり。給女王祿一とは女王に祿を給ふ事の由、公事根源にあり。猶西宮抄江次第に委し。イ本はいはひしてとは、荆楚歳時記云、七日爲人、八日爲殺、其日晴則所生之物育、陰則災云々。正月八日の晴天を祝ひて、五穀成就を祈る心にや。

十五日は、もち粥の節供まるる。粥の木ひきかくして、家の御達、女房などのうかがふを、打たれじと用意して、常にうしろを、心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、うちあてたるは、いみじう興ありと、うち笑ひたるも、いとほやし。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年より、あたらしう通ふ婿の君などの、内へ参る程を、心もなく、所につけて、我はと思ひたる女房ののぞき、奥の方にたゞずまふを、前に居たる人は、心得て笑ふを、ななかま／＼と招きかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむなど云ひ寄り、走り打ちて逃ぐれば、ある限笑ふ。男君もにくからず、愛敬づきて笑みたる、ことに驚かず、顔すこし赤みて居たるもをかし。又かたみに打ちて、男などをさへぞ打つめる。いかなる心にかあらむ、泣き腹たち、打ちつる人をのろひ、まが

一イ本はいはひして
一 小豆のかゆに
餅を和して、ま
いらする事也
二イニ家の子の
君たち、わかき
女房
三かゆの木にて
うたむねらふ
也
四用心するさま
也
五うしろよりう
たれじとする也
六にぎはしき也
七うたれたる人
のさま也
八其の家のはぢ
につけて我は
所えたる女房也
九婿君をうたむ
さうかがへるさ
ま也

二〇 髻君うたむ
 二一 するさ知りた
 二二 二うたむとする
 二三 女の笑ふを、制
 二四 するさま也
 二五 三髻君のさま也
 二六 三おはやうに、
 二七 おたやかなるさ
 二八 ま也
 二九 一回打ちによるこ
 三〇 て、たはかりに
 三一 いふ詞也
 三二 五むごきみうた
 三三 れておたやかな
 三四 るさま也
 三五 六愛敬めきたる
 三六 也
 三七 七是も髻君也
 三八 八禁中の事也
 三九 一五けたかく、う
 四〇 るはしき心也

まがしくいふもをかし。内わたりなど、やむごとなきも、今日はみな亂れてかしこ
 まりなし。

十五日もちがゆのせくまゐる——餅粥節供進モチガユノセクマキル、延喜式、主水
 式云、正月十五日供御七種粥料亦同米一斗五升、粟、黍子、稗子、萱子、胡麻
 子、小豆各五升、鹽四升云々。又中宮職式にも見えた。事文類聚六曰、王燭
 寶典曰、正月十五日、作「清粥」以祠「門戶」。なほ「荆楚歲時記」委し。公事根源に
 もあり。

○かゆの木ひきかくし——正月に此の木にて、腰をうてば子をうむまじなひと
 て、今も童のする事也。さ衣にかゆづゑとあるも同物也。狭衣第四卷云、十五
 日には若き人々こゝかしこにむれるつゝ、をかしげなるかゆ杖ひきかくしつゝ
 かたみにうかがひ、又うたれじとよういしたるすまゐ、おもはくどもし、おの
 おのをかしう見ゆるを、大將殿は見給ひて、丸をあつまりて打て、さらばぞた
 れも子はまうけむ。まことにしるしある事ならば、いとふともねんじてあらむ
 などの給へば、みな打ちわらひたるに、下略。
 ○家のごだち女房などの——御達、これも女房達をいふ也。
 ○うちへまゐるほどを心もとなく——髻君の参内せらるゝを、いかでうたむと
 心もとなく思ふ也。

○あなかま——あゝかしまし也。

○いかなる心にかあらむなきはらだち——祝儀にて、たはぶれに打つ事を腹立
 つを、いかなる心ならむと也。

○まがしくいふもをかし——のろひ事の、おそろしき事をいふさま也。
 ○かしこまりなし——畏の字也。禮儀正しき心也。禁中のうるはしき所も、
 けふは此の粥の木の事にうち亂れて、禮儀も疎かなると也。

除目の程など、内わたりはいとをかし。雪降りこほりなどしたるに、申文もてあ
 りく四位五位、若やかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白き
 などが、人にとかくあんないひ、女房の局によりて、おのが身のかしこき由など
 心をやりて説き聞かするを、若き人々は、眞似をし笑へど、いかでか知らむ。よき
 に奏し給へ、啓し給へなど云ひても、得たるはよし、得ず成りぬるこそ、いとあ
 はれなれ。

○除目のほど——縣召の除目也。江次第には、外官除目、九日始議之由、
 見「清涼記」、北山抄等云々。一禪御説には、正月十一日より、十三日まで三
 ケ日也云々。年中行事註云、縣召の除目と申す事は、外官をむねと任せらるゝ
 也。外官とは諸國の司也。田舎をあがたと申す也。外官の人々を召して、任官
 をさづけらるれば、かやうに名づけ侍るにや。猶次第は江次第に委し。其の圖

一 鎌をたのみて
 二 官を望む體也
 三 禁中、中宮な
 四 どの御かたの、
 五 女房達のつほね
 六 にたのみよる也
 七 三老人の笑はる
 八 るをもえしらし
 九 也
 一〇 天子へ申すを
 一一 奏といひ、后へ
 一二 申すを啓するとい
 一三 ふ也

一句
二句をきるべし
三句かくいはひ
もこそあたらし
き心也

は雲圖抄にあり。
○まをしぶみ——諸國の守にても、介、椽、目などにても、望み申す訴狀也。公
事根源に、名替、國替、名國替、秩滿、更任、任府、返上などいふ申文の、色
色數を知らず云々。江次第に委し。

○四位、五位、わかやかに心ちよげなるは——其の身すでに四位、五位に至り
若き人などは任國を望むものもしげ也と也。次に老人を云はむとて也。職原
抄云、凡國司者、相當五位已下也、然而、雖四位已上、或隨其望一應、其撰、
古今之例也。

○おのが身のかしこきよしを——我身の才あり、勞あるよしをいひて、此の度
の除目にもれぬやうにと、たのむさま也。それををかしがりて、若き女房たち
などの、其の老人のまねをして笑ふ也。

三月三日、うらくとどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、い
とをかしきこそ更なれ。それもまだ、まゆに籠りたるこそをかしけれ。ひろごりた
るは惜し。花も散りたる後は、うたてぞ見ゆる。

○三月三日うらくとどかに——杜子美詩、三月三日天氣新、長安水邊多二
麗人。
○もゝのはなの今咲きはじむる——朗詠云、桃、夜雨餘濕、會波之眼、新橋

曉風緩吹、不言之口先、咲。紀納言、事文類聚云、桃花生二王洲、柳葉暗二金海、
梁塵屑音。

○まゆにこもりたる——柳のやうくめぐめる也。絲に比して、かいこのまゆ
に籠りしになぞらへていふ也。兼輔集云、青柳の眉にこもれる糸なれば春のく
るにぞ色まさりける。此のうた新千載集にいれり。

「おもしろく咲きたる櫻を、長く折りて、大きな花瓶にさしたるこそをかしけ
れ。櫻の直衣に、出仕して、まらうどもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこ
近くみて、物などうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつき、
いとうつくしうて飛びありく、いとをかし。

○花がめにさしたる——後撰、「久しかれあだにちるなと櫻花かめにさせれど
うつろひにけり 貫之。」

○櫻のなほし——一禪御説、櫻直衣、面白裏赤花云々。直衣は、つねにはな
うしといへり。大かた白きしじらのあやを用ゆ。或は平絹云々、裏は平絹也。
染立等、桃花葉葉に委し。

○いだしうちぎして——桃花葉葉云一禪御説、出仕有禪之時略之、但衣單
籠着也云々。これ直衣のときなるべし。袷は衣のうへに着すと、弄花抄にあ
り。

一花瓶也
二客人也
三中宮などの御
兄なるべし
四花瓶のもこに
近く居て也

一こ、はまた祭のまへつかたなるべし
 二四月を清和の天のいへり
 三面白き也
 四しのびねになく心也
 五酒也
 六き、そこなひか也
 七それかあらぬごおもふ心也
 八きぬのそめ色也
 九様子ばかり也
 一〇末濃
 一一村濃むらくに染し也
 一二祭装
 一三形也、童女のありさま也
 一四
 一五きる物のしぞけなきさこ也

○とりむしのひたひつき——花のあたりなれば、鳥蝶などの、顔つきやさしく飛かふさま也。

「祭の頃は、いみじうをかしき。木々のこの葉、まだ繁うはなうて、若やかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、何となくそぞろにをかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、忍びたる時鳥の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たどたどしきを聞きつけたらむ、何心地かはせむ。祭近くなりて、青朽葉、二藍などの物ともおしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもてありくこそ、をかしけれ。末濃、村濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。童の頭ばかり洗ひつくりて、なりは皆なえ縮び、うち亂れかゝりたるもあるが、けいし、履などの緒すげさせ、裏をさせなど、もて隠ぎ、いつしか其の目にならむと、急ぎ走りありくもをかし。あやしう跳りてありく者どもの、さうぞきたてつれば、いみじくちやうざといふ法師などのやりに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほどくにつけて、親、をばの女、姉などの、供してつくりありくもをかし。

○まつりのころ——賀茂の御形の事也。四月中の酉の日也。勅使の事、路次の次第など、江次第に委し。延喜式、天政官式云、凡賀茂二社 四月中酉祭、齋

一六
 一七音の裏を指す也
 一八祭を待ちかねる心也
 一九かのわらはの日頃はくるひありきし事也
 二〇イニいかに心もさなからむ

内親王向社、史一人、左右史生各一人、官掌一人向祭所、檢校諸事、山城國司、預、餘、祭日、中、官、差、勅使、令、奉、幣、并有、走馬、下略

○何ごこちかはせむ——面白きにたへで心せむかたなき心也。

○あをくちばふたあふ——一禪御説云、青朽葉は、表、青丹裏青、二藍は、赤花と青花にて染むるなり。

○ほそびつのふたに雨——河海抄云、細櫃也。源氏野分卷に、ほそびつめく物にわ ひきかけて、といへるは、ぬりをけ也。

○かみななどに、けしきばかりつゝみ——染絹のぬはざるを、紙にかいつゝめる也。祭の用意に取りよせもてあつかふさま也。

○すそご——末濃、かみを白くして、すそを紫にも紺にもこくそめたる也。

○けいしくつなどの——此の草紙の裏にも、高きけいしをさへはきたればと有り、杓の類也。和名集品々の杓の類あれども、此の名けなし。

○さうぞきたてつれば——装束、したてたるさま也。祭の日のさまなるべし。

○ちやうざといふほうし——長者にや、東寺の長者などあり。彼の童女の装束、して、物々しく練ありくさま也。

○ねりさまよふこそをかしけれ——江次第、賀茂祭の路頭の次第に、女車六兩童女在、此中、云々。かやうの童女などに出づるさまにや。イ本いかに心もとな

からむとあり。祭の日、もし失禮もやと、心もとなきと也。
○ともしてつくるひ——彼の童女の祭に出づる供してかしづくさまなるべし。

四

ことことなるもの、法師の詞、男女の詞、げすの詞には、必ず文字あまりしたり。

○ことことなる物——異事、其の事のかはりたる物也。

○法師の詞——俗人の詞とは、よろづかはるくし。僧は俗に對しては、必ず無常の法理を演説するを禮儀とすべしと、稱名院殿もの給へり。

○をとこ女の詞——歌よむにも、女の歌はよの常の男のよむにはかはるべし云云。

○げすのことばは必ずしもあまり——是も上臈の詞と、こと事なるべし。徒然草に、古は車もたげよ、火かよげよとこそいひしを、もてあげよ、かきあげよといふ、口をしと侍るも、いやしきさま似たるにや。

五

「思はむ子を、法師になしたらむこそは、いと心苦しけれ。さるは、いと頼もしき葉を、ただ木の端などのやうに思ひたらむこそ、いといとほしけれ。さうじ物のあ

一精進物也

二句

三若き法師は也
四忌也、きらへる心也

五法師も女はきらふまじけれは、のぞきも憚む心の心也
六験者也、新念の靈驗ある人なり

七御嶽
八熊野
九いたらぬ山なく也

一〇新念の験也
一一靈氣の新念する事也

一二調伏也
一三困也、くるしめる事也

一四さころせはき也
一五句
一六當世やうの事也

しきを食ひ、いぬるをも。若きは物もゆかしからむ。女などのある所をも、などか思みたるやうに、さしのぞかずもあらむ。それをも安からずいふ。まして験者などのかたは、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なくありく程に、おそろしき目も見、しるしある聞え出てきぬれば、こゝかしこに呼ばれ、時めくにつけて、安げもなし。いたく頼ふ人にかゝりて、物のけてうづるも、いと苦しければ、こうしてうちねふれば、ねふりなどのみしてと、咎むるも、いと所せく、いかに思はむと。これは昔のことなり。今やはう安げなり。

○おもはむ子をほうしに——是より異事なる物といふに付けて、ふと思へる事を書き出でたる也。思ふ子を法師になすは、異様の事なれば也。但かやうの事を段々書き交へられし事、更に其の枕詞に合せたる事のみならず。只思ひうるに任せたる筆ざさびと見るべきにや。

○さる、いとたのもしきわざを——一子出家すれば、九族天に生ずといへり。誠に菩提に入るは頼もしきわざを、俗人の破戒無慙の心からは、木の端のやうにと思ふと也。

○いぬるをも——寝るをも安からずそしり云ふと也。次の詞に、それをも安からずいふといへるにかけて見るべし。

○みたけ——河海抄云、御嵩は金峯山也。宣化天皇の三年に、金峯山に蔵王權現あらはれ給ふ也云々。吉野のかねのみたけなり。子日精進してまゐる所也。

○くまの——新宮、本宮、那智を熊野三所と申す也。いづれも難所の山道也。一説に速玉之男、事解之男、伊弉册尊を熊野三所と云々。又云、熊野權現證誠殿の本地、あみだ也。兩所權現は藥師觀音也。若一王子は施無畏大士也。號して日本第一大靈驗熊野三處權現といへり。飛瀧大ぼさつは本地千手觀音と也。

○かゝらぬ山なく——いたらぬ山なく也。源氏浮舟巻、「いづくにか身をばよせむとしら雲のかゝらぬ山もなく、ぞゆく。」

○おそろしき目も見——法顯三藏の渡天の時、山中にて黑獅子によるあたし類。猶雪山童子の、千尺夜叉にあひ給へるたぐひをおもふべし。

○いとところせく、いかにおもはむと——俗人の事よりは法師の上は、世人にもてさわがれて、所せばく人のおもはくも、さまさまに心づかひせられて、くるしげなるとふくめたる詞也。

○これはむかしの事なり。いまやうは——法師のかたち恥ぢて、おこなひをつゝしみしも上古の事なり。當世やうは、なべて法師の作法みだりなれば、一向に安げ也と、末世濁惡のさまをいふ也。

六

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より、女房の車ども、陣屋のゐねば、入りなむやと思ひて、頭つきわろき人も、いたくもつくるはず、寄せておるべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道敷きおるるに、いとにくく腹だたしけれど、いかかはせむ。殿上人、地下なるも、陣にたちそひ見るもねたし。御前に参りて、有つるやう啓すれば、「こゝにも人は見るまじくやは。なとかは、さしもうち解けつる」と笑はせ給ふ。「されど、それは皆めなれて侍れば、よくしたてて侍らむにしこそ、驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に車入らぬ門やはあらむ。見えは笑はむ」など云ふ程にしも、「これまゐらせむ」とて、御視などさし入る。「いとわろくこそおはしけれ。などてか、其の門せばく造りて、住み給ひけるぞ」と云へば、笑ひて、「家の程、身の程に合せて侍るなり」といらふ。「されど、門のかぎりを、高く造りける人も聞ゆるは」と云へば、あなこそろしと驚きて、「それは于定國がことにこそ侍るなれ。古き進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たま〜此の道にまかり入りければ、

一 四足の門也
 二 中宮の御輿也
 三 乗車ながらいらむとて、女房の髪をもつくるはざりし也
 四 宮中なごこそ、乗車ながらはいらね、大進が家はあなづりたる也
 五 筵道、みちにむしろをしきてさほるをいふ也
 六 車ながらえいらぬ事を腹立也
 七 昇殿せぬ人也
 八 女房の筵道をあゆみゆくを見る也
 九 中宮の御前へ也
 一〇 中宮定子の御詞
 一一、にても人の見るべきにとの心也

三清少の詞也
 三大進がきたら
 は、門のちいさ
 きをわらはむこ
 也
 三四大進生昌が詞
 也
 三清少詞也、い
 では發語の詞
 也、大進の門の
 せほきをあげけ
 る詞也
 三六進がさま也
 三七大進が詞也
 三八身に相應し
 て、門もせほき
 ぞこ也
 三九こたへたる也
 三〇清少詞
 三一大進がさま也、
 清少の漢書をい
 へるに驚きし也
 三二大進詞也
 三三イニうこうか
 三四進士
 三五大進も大學の
 道に入りて、文

かうだに辨へられ侍る」と云ふ。「この御道もかしこからざめり。筵敷きたれば、皆おち入りて騒ぎつるは」と云へば、「雨の降り侍れば、げにさも侍らむ。よし、又仰せかくべき事もぞ侍る。まかり立ち侍りなむ」とていぬ。何事ぞ、生昌がいみじうおちつるは」と問はせ給ふ。「あらず。車の入らざりつることいひ侍る」と申しておりぬ。

○大進生昌が家に——これより又一段別の事也。大進生昌、老及愚翁の勘物云、長保元年八月九日、自三職曹司一行啓、平生昌子レ時中宮前大進云々、前但馬守、後、正四位下播磨守、經三文章生、贈三位彌村二男中納言惟仲弟。中宮大夫、中宮亮、大進、少進など、きさきの御かたの事をおこなふ官也。
 ○みやの出でさせ給ふ——皇后宮定子の御事也。中關白道隆公の御むすめ、一條院の后宮、敦康親王、一品宮、女二宮などの御母、清少納言の主君也。生昌が家へ行啓の由勘物に有り。
 ○ぢんやのいねばいりなむや——禁中などのやうに陣屋の宿直人も居ねば、只入りなむと思ひてと也。やは助字也。
 ○びらうげの車——桃華葵葉云、檳榔毛、赤色簾、錦線、蘇芳末濃下簾、雲綱端帖、或時被レ用三青簾、草綠青末濃下簾、金銅金物之榻云々。西宮記云、檳榔毛太上皇以下、四位以上通用云々。これ姫宮の御車などにて、清少納言も乗り

章生をへたる者
 なれは也
 三六清少の詞也、
 校の道に鑑通し
 きて、女房の便
 あしかりし事
 を、大學の道に
 かけたはぶれし
 詞也
 三七大進詞
 三八大進あしかりつ
 らむ也
 三九又何たる種
 儀をか、いひか
 けられむ也
 四〇中宮の清少
 下、とばせ給ふ
 詞也
 四一あなおそろし
 き、おごろきし
 事也
 四二清少の詞也
 四三別の事も侍ら
 ず也
 四四下也、御前を
 立ちし也

添ひたるべし。

○ありつるやうけいすれば——車ながら入れて、人にも見えじと思ひしに、件
 のさまにて殿上人などにも見られし事を中宮へ清少の申し上ぐる也。
 ○されどそれはみなめなれて——いづくにてもうちとくまじき事にて侍れど、
 殿上人等は、かやらの御供の女房などは、常に見馴れ給へば、さのみ立ちそひ
 見給ふべきにも侍らじ、よくつづるひたらむにこそ、かへりて、目驚かし見ら
 るるやうもこそ侍らめと、清少のことわり申す詞也。
 ○御硯などさしいる——硯のふたに御菓子などまゐらすさま也。一説、御車
 に有りし御硯を、大進が取りて参らす也。
 ○門のかぎり高く——子公といふ人、其のすむ里の門やぶれたれば、里人これ
 をつくる時に、子公がいはく、門を高く大にたてよ。われ民を治むるに陰徳あ
 れば、我子孫に必ず諸侯ありて、四馬高蓋の車をいれむといへり。其の詞たが
 はで、其子子定國以下世にさかえし事、前漢書に有りて蒙求にも出でたる也。
 源氏乙女の巻に、此の門ひろげさせ給へ、といへるも此の古事也。
 ○ふるき進士などに——進士の字は、禮記の玉制に出でたり。國々にて學問よ
 くせし者をすぐり出でて、天子へあぐれば、及第しこゝろみて、灯燭料を賜
 はりて、都にめし置くを進士といふ也。士を逆むるといふ儀也。さて年久しく

一若き女房も、清少も同宿してなたる也
 二只今清少の寝たる所のさまをいふ也
 三生昌也、清少に忍びよらむとせし也
 四生昌がこゑのふれたるやうな事也
 五生昌が詞也、これへまいらむはいかがあらむとせし也
 六清少のてい也
 七几帳也
 八生昌さすがにいらわびたるさま也
 九清少の心也
 一〇生昌が事をいふ也
 一一好色めきたる事也
 一二イのめく

螢雪をつみたるを、ふるき進士といふべし。かやうに學すべたる物ならでは、漢書を承りしらじと也。古は日本にも進士あり、源氏乙女巻に、夕霧の君進士に成り給へり。

おなじ局に住む若き人々などして、よろづの事も知らず、ねぶたければ皆寝ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、懸金もなかりけるを、それも尋ねず。家ぬしなれば、あんないをよく知りてあけてけり。怪しう覗ればみたるものの障にて、「さぶらはむはいかが」と、數多たび云ふ障に、おどろきて見れば、几帳のうしろに立てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。さらにかやうのすきずきしきわざ、ゆめにせぬ者の、家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふも、いとをかし。我傍なる人を起して「かれ見給へ。かゝる見えぬ者あめるを」と云へば、頭をもたげて見やりて、いみじう笑ふ。「あれは誰ぞ。けそうに」と云へば、「あらず。家あるじ、局あるじと定め申すべき事の侍るなり」と云へば、「門の事をこそ申しつれ、障子あけ給へ」とやはいふ。「なほ其のこと申し侍らむ。そこにさぶらはむは、いかにく」と云へば「いと見苦しき事、さらにえおはせじ」とて、笑ふめれば、「若き人々おはしけり」とて、引きたてていぬる後に、笑ふ事いみじ。あけぬとならば、只まづ入りぬかし、消息をするに、よかなりとは、誰かはいはむと、げにかしきに、つとめて、御前

一無下也、一面に遠慮なきにやと也
 二爾彼の同宿の女房をおこす也
 三あれ見給へと、清少の詞也
 四同宿の女房也
 五彼の女房の、生昌をたはぶれとがむる詞也
 六生昌が詞也
 七生昌みづからいふ也
 八清少をいふ也
 九清少の詞也
 一〇生昌が詞也
 一一清少の詞也
 一二生昌が詞也、清少はかりかき、思ひつればこの心也
 一三障子を也
 一四ヨカンナリとよむべし
 一五前に笑ふとあるをうけて、ゆに云ふ也

に参りて啓すれば、「さる事も聞えざりつるを、よべの事にめぐて、入りたりけるなめり。あはれ、あれをはしたなくいひけむこそ、いとほしけれ」と笑はせ給ふ。

○ひがしのたいのにしひさしかけて——東の對にて、北面の障子の、西のかたのひさしかけて、たてまはしたるとの心也。其の障子に懸金のなかりしなるべし。
 ○それもたづねず——大進が家ながり、猶旅寝なれば、懸金の有りなし尋ね、氣をつくべき事なるに、ねぶたげれば、それも尋ねしらで也。
 ○家におはしましたりとて——中宮の我家に行啓の折なれば、我家内とおもふに、くつろぎてかやうのわざするかと也。
 ○かゝる見えぬものあめるを——かく見なれぬもの來れると、わざとにいへる詞也。
 ○けそらに——顯證に也、あらはなる心也、あまりにじらじらしきとの心也。
 ○あらず。いへあるじ、つばねあるじに——別の儀にあらず、我ら清少にいふべき事ありて來しと也。
 ○門のことをこそ申しつれ——前に子公高門の事をいひし事也。門のせばかりし事をこそいひつれ、此の障子あけ給へとはいはせざりし物をと也。

六中宮の御詞也
且頃は清少に心
ありとも聞かざ
りしにさ也
元子公高門の事
也
三生昌をさして
の給ふ也

一 中宮の御せ付
け給ふ也
二 生昌が詞也
三 前にたびく
笑はる、故に也
四 是も生昌が詞
也
五 御膳の具の事
也
六 ちいさき折敷
也

○そこにさぶらはむは、いかにく——前にさぶらはむにはいかにと、いひし
首尾也。
○あけぬとならば、ただまづ——障子あくるからは、まづくはひいれかしと
也。

○せうそこをするに、よかなりとはたれかはいはむ——せうそこは消息也、こ
こにては案内する事也。案内いひて忍びいらむとするを、誰かは忍びいれ、よか
るべしとは、いはむと也。是清少實に忍びいれかしと、思ひていふにはあらず、
生昌がうるくしげなるを、わらひたはぶれていふ詞也。

○つとめて、御前にまゐりてけいすれば——其の翌朝、中宮の御まへにて、昨
夜の生昌かふるまひを、清少の申し上ぐる也。

姫宮の御方のわらはべの装束せさすべき由、仰せらるゝに、「わらはの柏のうはお
そひは何色に仕うまつるべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮の御前の
ものは、例のやうにては、にくげにさぶらはむ。ちうせい折敷、ちうせい高坏にてこ
そ、よくさぶらはめ」と申すを、「さてこそは、うはおそひ着たるわらははべも、
りよからめ」と云ふを、「なほ例の人のやうに、かくないひ笑ひそ。いときすくな
るものを、いとほしげに」と、制し給ふもをかし。

○ひめみやの——これもおなじ生昌が事ながら別の事也。姫宮とは一品女一宮、

一 小高土器也、
曇子のたぐひ也
二 清少の詞也
三 陪膳な仕り
よからめさの心
也
四 中宮の御詞也
五 二つにこ
れなわらひそ
三 三イきんかう
三 三やうにはあ
ざけり笑ひそ
制し給ふ也

一 中間、中ぞら
につきなき時節
にさ也
二 中宮のききつ
たへ給ふ也
三 中宮の清少に
の給ふ也

一條院皇女、御母中宮定子、のちに修子内親王と申す。

○わらはのあこめのうはおそひ——柏は童女の汗衫の下にきる物なれば、かさ
みをあこめのうはおそひといひしなるべし。汗衫は童女のうへにきる物也、水
干のかみのやうなる物也、と弄花抄にあり。こゝにかさみといふべきを、柏の
上おそひと云ひて笑ふ事也。

○ちうせいをしき、ちうせいたかつき——姫宮をさなくおはしませば、ちひさ
き折敷、高土器可然といふ事をかたこと也。

○さてこそうはおそひ——さやうにちひさきをしきなどにてこそ、彼の童女ど
もも、陪膳仕りよからめとの心也。是もちうせい折敷といへるどあざけりて、
うはおそひきたるわらははべ、もと大進が詞を其のまゝいひてこたへたる也。ま
ゐるとは仕る心也。源氏に、みかうしまゐる、御足まゐるなどある詞とおなじ。

○いときすくなるものを——生昌は建固に、正直なる者と、いたはりて宮の
の給ふ也。イニきんかうなるは勤考也。まめやかなる心也。

中間なる折に、大進もの聞えむとありと、人の告ぐるを聞き召して、「又なでふに
といひて、笑はれむとならむ」と、仰せらるゝも、いとをかし。「行きて聞け」と、
の給はすれば、わざと出てたれば、「ひと夜の門のことを、申納言に語り侍りしかば
いみじう感じ申されて、「いかでさるべからむ折に對面して、申し承はらむ」となむ

一 生昌が詞也
 二 于公高門の事也
 三 生昌が兄、惟仲申納言なるべし
 四 清少に對談せむ、惟仲の申されし也
 五 別の用事もなし也
 六 清少の心也
 七 生昌が詞なり、今やがて清少の心にて閑談せん也
 八 辭退して也
 九 清少の中宮の御前へまゐりし也
 一〇 中宮御詞
 一一 又清少の申す詞也
 一二 中宮の御詞也

申されつる」とて、又ことも無し。ひと夜の事やいはむと、心ときめきしつれど、
 「今しづかに御局にさぶらむ」と、辭していぬれば、歸り参りたるに、「さて何事ぞ」と、の給けすれば、申しつる事を、きなむとまねび啓して、「わざと消息し、呼び出づべきことにもあらぬを、おのづから靜に、局などにあらむにもいへかし」とて、笑へば、「おのが心地に賢しと、思ふ人の譽めたるを、嬉しと思ふとて、告げ知らするならむ」と、の給はする御けしきも、いとをかし。

○大進物きこえむとありと——清少に物いはむと、生昌の申さると、人のいひつぐ也。

○ひと夜の事やいはむと——生昌の忍びよりし事を、猶いはむとにやと、思へばと也。是も清少の心有りていふにはあらず、何の事もなき事をいはむとて也。○じしていぬれば——辭の字也、辭退の心也、物いはまほしけれど、いひかねて只かくばかりいひて、生昌が歸りたる也。

○申しつることをさなむと——生昌がいひし惟中のほめし事を、さやうになむ語り申せしと、中宮へ清少の申し上ぐる也。

○おのづからしづかに——いつにても、清少の局におりみたらむ折にもきていへかし。御前にあるを、ことごとしくよび出でて、いふべきほどの事かはと也。○おのが心ちにかしこしと——生昌が賢き人と思ふ申納言のほめし事を、清少

にかたりきかさば、よろこびやせむとて、生昌かたりきかするにやと也。
 ○御けしきもいとをかし——生昌清少に懸想して追従すると、推量の御色なりしなるべし。

七

「うへにさぶらふ御猫は、かうぶり賜はりて、命婦のおとどとて、いとをかまけれはかしづかせ給ふが、はしに出でたるを、乳母の馬の命婦、「あなまさなや。いり給へ」と呼ぶに、きかで、日のさしあたりたるに、うちねふりて居たるを、おどすとて、「翁丸いづく。命婦のおとどくへ」と云ふに、まことかとて、しれ者走りかゝりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間に、うへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御ふところにいれさせ給ひて、をのことも召せば、藏人忠隆参りたるに、「此の翁丸うまつてうして、犬嶋につかはせ。只今」と、仰せらるれば、集りて狩り騒ぐ。馬の命婦もさいなみて、「乳母かへてむ。いとらしろべたし」と、仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかけしつ。

○うへにさぶらふ御ねこは——是より又別の事也。うへとは六十六代一條院なり。此の帝猫を御寵愛と也。花鳥餘情云、小右記云、長保元年九月十九日、内

一 イおもも
 二 寵の字
 三 端つかたに猫のありし也
 四 ねこのめのミ也
 五 ねこをばづかしむる詞也、罪(マサナシ)よからぬ事也
 六 威の事也
 七 犬の名也、翁丸カ
 八 いづくにあるぞ也
 九 猫をおどしていひしに、犬は誠と思ふ也
 一〇 腹(シレモノ)犬をさしていふ也

二猫のさま也
 三猫を犬のおひしを御覽じて也
 三忠陸、動物あり
 四打調也、悉也
 五備前にある鳩の名也、犬を遠馳せしむる心なるべし
 六罪の字也
 七心もさなくうしろぐらき心也
 八畏也、馬命婦其のおそれによりて、籠居せし也
 一九狩也
 二瀧口
 三犬鳴にさあ。若尾也。

狸御猫産レテ、女院、左大臣、右大臣有ニ産養事、有ニ衝重権飯納レ宮之衣等、猫乳母馬命婦、時人咲レ之、奇怪事也。
 ○かうぶり賜はりて——彼爵せし也、五位に叙せらるる事也。猫を寵愛のあまりなるべし。衛懿公鶴を愛して、大夫の車にのせし事、左傳にありたくひにや。

○命婦のおとどが——彼の敘爵せし猫の名也。女房の五位に叙したるを命婦といふ也。おとどは殿の字也。かづきたる名也。源氏に、おばおとどといへる類也。命婦のおもと侍者と書く、民部のおもとと空蟬巻云々。

○あさがれひのまに——年中行事歌合註曰、あさがれひと申すは、天子の朝の御膳の名、御膳を供する所にて侍り。かれひとばかれたる飯にて侍るにや云々。朝餼間、清涼殿の南にあり。猶禁秘抄に委し。

○藏人ただたか——勅物云、源忠陸、長保二年正月廿七日藏人、陸奥守從四位下滿忠男。

○あつまりてかりさわぐ——内裏の犬を狩るには、藏人瀧口などあつまりる云云、禁秘抄云、犬狩藏人承レ仰下知、所奉、瀧口參、瀧口帶三弓箭一備二所々一射レ犬、所衆入ニ椽下ニ狩出下略。
 ○たきぐちなどして——藏人の下たけるもの也。禁秘抄云、着ニ布衣一旦暮候、砌、

一是より清少なごの、犬をおはれお詞也
 二犬を愛して、せられたはばれなるべし
 三御膳也、天子の御膳の折は犬の御前に有りしと也
 四家々(サウサウシ)さびしき事也
 五翁丸おひはなたれしが、歸りたるさて、うたる、ゆゑなり
 六句
 七御兩人が詞也、あらかはゆなごいふ心也
 八たまたかごさねふさ也
 九死の字也
 一〇前にも打ちてうじてさあり
 一一清少の心也

遺所勅使等公役、隨レ仰奉仕云々。職原抄云、堪三武勇一之輩可レ補之云々。員廿人云々。

あはれ、いみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に、頭辨、柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさせ、櫻、腰にさせなどして、ありかせ給ひし折、かゝる目見むとは、思ひかけむやと、あはれがる。「おももの折は、必ず向ひさぶらふに、さうさうしくこそあれ」などいひて、三四日になりぬ。晝つ方、犬のいみじく啼く聲のすれば、何ぞの犬の、かく久しく啼くにかあらむと、聞くに、よろづの犬ども走り騒ぎ、とぶらひに行き、みかはやうとなるもの走りきて、「あないみじ。犬を藏人二人して打ち給ひ、死ぬべし。流させ給ひけるが、歸り参りたるとして、うじ給ふ」と云ふ。心愛の事や、翁丸なり。「忠陸、實房なむ打つ」と云へば、しに遣る程に、辛うじて啼き止みぬ。「死にければ、門のほかにひき棄てつ」と云へば、あはれがりなどする夕つ方、いみじげに腫れ、あさましげなる犬の、おびしげなるが、わななきありければ、「あはれ丸か。かゝる犬やはこの頃は見ゆる」などいふに、「翁丸」と呼べど、耳にも聞き入れず。「それぞ」と云ひ、「あらず」と云ひ、口々申せば、「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて、下なるを、まづ頼の事とて召せば、参りたり。「これは翁丸か」と、見せさせ給ふに、「似て侍れども、これはゆゑしげにこそ侍るめれ。又『翁丸』と呼べば、喜びてまうで来るものを、呼べど

二誰とも不知
 三さはなうらそ
 さいひやる也
 一四願也、これ翁
 丸也
 二五ふるひくあ
 びく也
 一六歌也
 一七翁丸也といひ、さはあらずともいふ也
 一八中宮の御詞也
 一九願の字也、急の御用にて右近を召す也
 二〇右近詞也、翁丸に似たれども也
 二一いましけにはれよる也
 二二中宮の御さま也
 一其のゆふぐれの事なるべし
 二其の空朝の事也

寄りこず。あらぬなめり。『それは打ち殺して、棄て侍りぬ』とこそ申しつれ。さる者どもの、二人して打たむには、生きなむや」と申せば、心愛からせ給ふ。
 ○頭辨——誰とも知らず、但奥に行成卿をいへる所有り。
 ○なにその犬の——翁丸とはしらすで、何の犬ぞと、清少などの思へるさま也。
 ○よろづの、本ども——友の犬もかなしむさま也。
 ○みかはやうと——いやしきもの也、やうとのとの字すます、にござきこゆるやうによむべしと也細説。源氏すまの巻にある詞也。禁秘抄、御聞人と云々
 ○からうじて——辛の字なり、やう／＼としてなどいふ心也。
 ○あはれまろが——翁丸といふを略して、よびつけたる詞をすぐにいふ也、翁丸かとうたがひたる詞也。
 ○かゝるいぬやは——かの翁丸が外に、かやうの犬は、この頃見えずと也。
 ○右近ぞ見しりたる——あとに右近内侍とある、同人なるべし。榮花物語第五浦々の別の巻に、此の中宮、修子内親王を生み給ふ時、御湯殿には、内よりのおほせ事にて、右近内侍ぞまゐりたるとあり。同巻敦康親王生まれ給へる所にも御ゆどのには、右近内侍例の参るとあり。心よせことなる人と見え侍り。
 ○又おきな丸とよべば——日頃はよべまゐる物の、まゐらぬは、翁丸にはあらじと右近が申す也。

三中宮に御手水
 まゐらせたる也
 四清少の陪侍し
 たる也
 五かの犬につき
 て、翁丸を思ひ
 出でていふなり
 六彼の翁丸がう
 たれしききの心
 を思ひやる也
 七柱のもまに
 たる犬也
 八さてはこれは
 也
 九前にかがみも
 たせて御らんず
 るとありし首尾
 也
 一〇犬のさま也
 一一中宮をさして
 いふ也
 一二前に註す
 一三一條院なるべ
 し
 一四榮中の女房達
 也
 一五詞

暗うなりて、物食はせられたれど、食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる、つとめて、御梳櫛にまゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽すれば、さぶらふに、犬の柱のもとに居たるを、「あはれ昨日、翁丸をいしう打ちしかな。死にけむこそ悲しけれ。何の身にか此のたびはなりぬらむ。いかほわびしき心地しけむ」とうち云ふ程に、此のねたる犬、ふるひわなきて、涙をただ落しに落す。いとあさまし。さはこれ、翁丸にこそありけれ。よべは隠れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきこと限なし。御鏡をも、うちおきて、「さは翁丸」と云ふに、ひれ伏してみじく啼く。御前にも、うち笑はせ給ふ。人々参り集まりて、右近内侍召して、「かなくなど、仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしませて、「あさましう、犬なども、かゝる心あるものなりけり」と、笑はせ給ふ。うへの女房達なども、聞きに参り集りて、呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顔など腫れためり。「もの調せさせばや」と云へば、「つひにいひあらはしつる」など、笑はせ給ふに、忠隆聞きて、豪盤所のかたより、「まことにや侍らむ。かれ見侍らむ」と、云ひたれば、「あなゆゝし。さる者なし」と、云はすれば、「さりととも、つひに見つくる折も侍らむ。さのみもえかくさせ給はじ」と云ふなり。さて後、かしこまりかうじ赦されて、もとのやうになりなき。なほあはれがられて、ふるひ啼き出たりし程こそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。人々にもいはれて、啼きなどす。

○中宮御詞
 三翁丸をいひあらはしたる也
 六彼の藏人也
 一五忠隆詞
 三翁丸をいたはりて清少のかく才詞也
 三忠隆が詞、いかにかくし給ふともさ也
 三是より草紙の地也
 三勸事、勸當也
 三翁丸が事也
 三世に又なくとも

○物くはせられたれど、くはねば——日頃はなつきて、かくはなかりし犬の、今はおそれ物もくばねば、翁丸にはあらぬと治定せし也。
 ○御けづりぐしにまゐり——梳櫛、御ぐしをけづる事なり。中宮の御ぐしを清少のけづり侍也。源氏紅葉賀卷にある詞也。
 ○御かがみもたせて——清少に御鏡をもたせて、中宮の御覽する也。
 ○何の身にか此のたびは——此のたびは、何にか生をかへつらむと也。
 ○よべはかくれしゆびて——宵よべ、昨夜の事也、よんべとよむべし。きのふ翁丸とよびしには、ききもいれず、物もくはざりしは、先づ一旦懼りて、かくれ忍びしよと、あはれがる也。
 ○犬などにも、かゝる心ある物なりけり——はじめはおそれ、今はかなしむさまを感じさせ給ふなり。
 ○今ぞたちうごく——始はよべども聞きいれず、次にひれふしてなきしが、今ぞ立ち動くとも。
 ○ものてうぜさせばや——藥物調合せさせむと也。犬の腫れたるにつけむとの心なるべし。
 ○臺盤所——臺盤所は女房のさぶらひ也。女房達の禁中のとのみ侍ふ所也。禁秘抄云、臺盤所三間、北間、朝方、敷、黄端、坐、東、椅子、其南女房簡人、辛櫃

赤塗色下略。このかたより、彼の忠隆がかくいふと也。

○まことにや侍らむ——翁丸がまゐりたるといふは、まことにやと也

○かしこまりかうじゆるされ——畏、勸事也、猫をくらはむとせしおそれと、勸當とをゆるされたる也。

○人々にもいはれてなきなどす——彼の清少の犬を哀がりいたはりし事を、人々にもいひ出でられては、又其の事を思ひてなきなどすると也。

八

「正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は、曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕かたは晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより雨すこし降りて、菊の露も、こちたくそぼち、おほひたる綿なども、いたく濡れ、うつしの香も、もてはやされたる。つとめては止みにたれど、猶曇りて、やゝもすれば、ふり落ちぬべく見えたるもをかし。

○正月一日、三月三日——是より別の事也。前にも元日上巳の事はいひしかど、こゝは又、五節供のありさまをつかねていふ也。

○五月五日はくもりくらし——黄梅の時節ながら、さすがに降らざるを愛したる歎。

一盡くもりて晴れたらば、一人に星めづらしかるべし
 二イニがすも
 三こごごしく也
 四ぬれたる事也
 五雨のしめりに、綿にうつりし菊の香面白き心也
 六早天也

○雨少しふりて、菊の——三體詩云、菊爲三重陽、同雨開。事文類聚云、重陽日陰雨凄々、戲馬臺泥拍肚、龍山倉上水平睛。
 ○おほひたるわたなども——菊のきせ綿也。源氏幻卷云、九日綿おほひたる菊を御らんじて。弄花云、此古事可勘。世説問答云、一條冬良公御説、菊に綿を着する事、いつの頃より始るとも見え侍らず。只菊をもてあそぶのあまり、寒霜をふせがむとのこゝろざしと、おほえ侍る。

九

「喜び奏することをかしけれ。うしろをまかせて、笏とりて、御前の方に向ひてたてるを、拜し舞踏しさわぐよ。」
 ○よろこびそうする——是より又別段也。奏慶とて、昇進などの後、拜賀の事なりと、年中行事歌合註にあり。
 ○うしろをまかせて——裾をひく事なるべし。日本紀神功皇后紀に、引の字をまかせてと訓じたり。裾は下襲の尻也。むかしはつづけたるを、着する時煩ひあるによりて、切りはなして着云々。

○しやくとりて——笏なるべし。延喜式四十一云、凡五位以上通用牙笏、白木笏、前訓後直、六位以下官人用、木、前訓後方、名目鈔云、慶賀笏、奏慶時用之、笏コツノ聲アリ、日本子細アリテシヤクトイヒ習フ也云々。釋名云、笏、忽也、君有教命及所啓、則書其上、備不忘也。
 ○御前のかたにむかひてたてるを——愚案、此のをの字衍文歟。御前にて拜賀の人を、又拜舞するといふやうにきこゆる、おぼつかなし。但諸家にての拜賀に、答の拜する心にや、可尋之。
 ○はいしぶたうし——拜舞踏、よろこび申す時拜舞する事也。拾芥抄云、再拜置、立左右左、居左右左、取、笏小拜、立再拜云々。堀川百首慶賀の歌「かしはぎを椎のさえだに折りかけて左右左までやふしまるぶらむ 後頼」宗祇註云、兵衛の官の人の、四位によるこび申す歌也云々。
 ○さわぐよ——例の書きすてたる文體也。

一是より又別段也
 二楯
 三葎也、八尺をいふ也
 四楯の根よりきりて也

今内裏のひんがしをば、北の陣とぞいふ。楯の木のはるかに、高きが立てるを、常に見て、「幾尋かあらむ」など云ふに、權中將の、「もとよりうち切りて、定證僧都の枝扇にせさせばや」と、の給ひしを、山科寺の別當になりて、よろこび申すの日、近衛つかさにて、此の君のいて給へるに、高き楯をさへはきたれば、ゆゑし高く。出てぬる後こそ、「など其の枝扇はもたせ給はぬ」と云へば、「ものわすれ

十

五定證はせい高
きゆふにの給ふ
なるべし
六成信をいふ也
七定證の香をい
ふ也
八定證退出して
也
九清少より成信
へいひやるたは
ぶれ也
一〇福覺えつよき
也、申將のたは
ぶれの詞也

せす」と、笑ひ給ふ。

○いま内裏の——勘物云、今内裏、一條院長保元年六月十四日内裏焼亡、十六日行幸女院御所也。同二年十月十一日行幸新造内裡。この新造をいまたいりといふなり。

○北のちん——縫殿陣をいへり。朔平門北面と拾芥にあり。

○權中將——勘物云、權中將成信、四品兵部卿致平親王同、從四位上左近中將法名眞舞。

○定證僧都——勘物云、長保二年三月十七日、以定證補眞福寺別當。

○山しなでら——興福寺をいふ也、藤原不比等の建立也。元享釋書に委し。

○よろこび申——定證興福寺の別當に補せられて、拜賀の事也。

○近衛づかきにて——成信朝臣、左近衛中將なれば也、百寮訓要抄（二條良基公説）云、近衛府は、君を近くまもり奉る武勇の職也。左右衛門左右兵衛をば、外衛といふ、是は宮門の外を警固する職也。近衛は門内を警固する也。

○など其のえだあふきは——前日成信の、の給ひしたはぶれの詞をうけて、此の度定證に、其の枝扇はもたせ給はぬかといふ也。

十一

一 小倉、山城燒
噴也
二 大和、春日に
あり
三 八雲抄にも、
國不知
四 鹿背山、山城
也
五 未勘
六 イニいかなる
らむをかしけ
れ
七 近江也
八 近江也
九 伊吹、近江也
一〇 イニこを見る
がをかしき
一一 山城の石田、
小野、同所にや
一二 大比禮山、津
の西也
一三 大和
一四 大和
一五 攝津也
一六 大和
一七 陸奥也、只末
の教と斗もあり

山は、小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。いりたち山。鹿背山。ひはの山。かたさり山こそ、誰に所をきけるにかとをかしけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。比良の山。鳥籠の山は、わが名もらすなと、みかどの詠ませ給ひけむ、いとをかし。伊吹山、朝倉山、よそに見るらむいとをかしき。いはた山。大比禮山もをかし。臨時の祭の使など、思ひ出でたるべし。手向山。三輪の山、いとをかし。音羽山。待ちかね山。玉さか山。耳無山。末の松山。葛城山。美濃のお山。梓山。位山。吉備の中山。嵐山。更級山。姨捨山。小鹽山。淺間山。かたゝめ山。かへる山。妹背山。

○このくれ山——萬葉集、古能久禮山、家持卿の歌によめり。但其の國はしれず。八雲御抄云、木の晴山。清輔抄、清少納言云々、是は陸奥也。是にや。

○わすれ山——未勘、但八雲御抄に、わすれ山、陸奥とあり。これにや。

○かたさり山——八雲にもありて國未レ知。誰に所をきけるにかとは、方去といふ名に付けて、人に所をさり退きたるやうなれば、たはぶれいへる詞也。

○いつはた山——五幡山、越前也。

○のちせの山——若狭なる後瀬のやまと、うたによめり。

○とこの山——鳥籠山、近江也。

○わが名もらすなと、みかどの——古今集盛衰歌、あめの幣あふみのうねめに

- 一 大葛城、大和也
- 二 美濃、御山、
- 三 越州也
- 四 吉野山、山城也
- 五 八雲にあり
- 六 三更鼓、信濃
- 七 三越捨、信濃
- 八 三山城
- 九 兩邊間、信濃
- 十 三末勸
- 十一 三歸山、越前也

給へるうた、「犬上のとこの山なる名と河いさとこたへて我名もらすな、」あめの帝とは、天智天皇と古今目録にあり、清輔袋草紙には、聖武天皇可然云云。

- あさくら山——筑前に朝倉山あり、攝津に朝暗山あり。
- りんじのまつりのつかひ——石清水の臨時祭、三月中旬日也。江次第六曰、臨時祭起天慶四年四月廿七日、平將門亂逆報賽也。又曰、舞人自レ上退到三竹臺東、次右袒進舞、求子、舞人自レ下退、大比禮後、使舞人退出略記。此のまつりの試樂等にも、當日にも、舞人またをはりて、大比禮といふ物を、うたひ侍る事あるによりて、おほひれ山といふに、りんじのまつりの使ひなど、思ひ出づるといふなるべし。
- 音羽山——山城、山科にも、清水の上にもあり。ひえのやまにもあり。
- くらゐ山——位山、飛騨也。
- きびのなかやま——吉備中山、備中也。
- あらし山——山城也。
- いもせ山——妹背山、八雲御抄に、紀伊國とあり。

十二

峯は、ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。

- ゆづるはのみね——津の國なり。樺の嶺といふにおなじ。
- あみだのみね——山城、今の豊國の上にもあり。公任卿歌、「今よりはあみだの峯の月かげを千世の坂までたのむべき哉。」
- いやたかのみね——案金葉集に、大嘗會主基方備中國彌高山あり。又玉葉集に、寛平四年大嘗會悠紀方近江國彌高山あり。これらの山の峯をいへるにや。

十三

原は、たか原。みかの原。あしたの原。その原。萩原。栗津の原。なし原。うなるごが原。安部の原。篠原。

- そのはら——曾原、信濃也。
- なしはら——大和に奈志原あり。又梨原驛もあり。兩所同國。
- うなるごがはら——未勘、六帖、山上憶良歌、「名にしおへばいづれもかなし朝なく／＼なでておふし／＼うなるごがはら。」

十四

市は、辰の市。藤市は、大和にあまたある中に、長谷寺に詣づる人の、必ずそこに

- 一 竹原、大和
- 二 瓶原、山城也
- 三 朝原、大和焉
- 四 下部
- 五 萩原、八雲に
- 六 紀伊云々
- 七 栗津原、近江
- 八 安部原、津の國也
- 九 七篠原、八雲加
- 十 賀云々近江ニモ

一辰市、大和也
二棹市也
三縁也
四勝摩、播磨也

とどまりければ、**観音の御縁**あるにやと、心ことなるなり。おふさの市。**勝摩の市**、**飛鳥の市**。

○つばいち——棹市、長谷に近きは、今たばいちといふ所とぞ。其の外の所々可尋之。源氏玉かつらの君、長谷にまうで給ふにも、棹市といふ所に、四日といふ巴の時ばかりに、いける心ちもせで、いきつき給へりとあり。長谷の近所にて、観音の灯明の事など、沙汰する所と見え侍り。花鳥餘情云、小右記云、正暦元年九月八日、参長谷寺、午時至、棹市、令交、易御明灯心器等、云々。

○長谷寺に——河海抄云、長谷十一面観音之利生道場也、十一面二丈六尺、文武天皇御宇德道上人造立之、法道仙人是也、神龜四年、聖武天皇、公家被建立堂一字、云々。

○おふさのいち——未勘、大和物語に、おふさのむまやあり。同所にや。追而可勘。

○あすかの市——飛鳥市、八雲御抄に、大和云々。

十五

一八雲にも國見え
二さやうの也
三淵にないりそと教へしやうなれは也

淵は、かしこ淵、いかなる底の心を見せて、さる名をつきけむと、いとをかし。な
いりその淵、誰にいかなる人の教へしならむ。青色の淵こそ、またをかしけれ、**蔵**

一かみイ
二例の書拾てし文法也
三八雲にもしれ
四八夫勘

人などの身にしつべくて。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

○いかなるその心を——いかに深き心を見せて、賢きといふ名はつきけむと也。

○ないりその淵——未勘、八雲にも出でて國は見えず。爲尹千首、「つれなくば身をしづめむとかこつよのそなたの月よないりそのふち。」

○あをいろの淵——未勘、八雲同前。

○藏人などの身にしつべく——六位藏人青色の袍きる心にや。青色とは麴塵の袍也、是天子の御衣のおろしを、藏人は着すると也、職原抄云、六位職事又聽禁色、至二極麴者着二麴塵袍一申二下御服一之儀也、晴時雖二下着二着レ之云々。職事とは藏人の事也。

○いなふち——稻淵、大和。

十六

海は、水うみ。與謝の海。かはぐちの海。伊勢の海。

○水うみ——近江の湖水。余吾のうみ、越中の布施のうみ等あり。

十七

一與謝海、丹後也
二未勘、但馬津の川口にや
三伊勢也

渡は、しかすがの渡。みづはしの渡。こりずまの渡。

○しかすがの渡——志賀須香渡、三河也。
○こりずまのわたり——未劫、八雲御抄にも國見えす。

十八

みさゝぎは、うぐひすの陵。柏原の陵。あめの陵。

○みさゝぎ——安樂云、帝王所葬曰山陵。帝の御墓也。
○うぐひすのみさゝぎ——延喜式廿一諸陵寮に、遠陵近陵さまさま侍れど此の名見えす。八雲にもしるさせ給はず。桓仁徳天皇を。百舌鳥野の陵に葬れり。此の百舌鳥にうぐひすの訓もあればにや。

○かしはばらぬ——延喜式治部式云、柏原陵。平安宮御宇桓武天皇、在二山城國紀伊郡一下略。

○あめのみさゝぎ——是も延喜式に見えず。若しあめのみかどの御陵にや。しからば天智天皇の山科の御廟にや。

十九

家は、近衛御門。二條、一條もよし。築殿の宮。せかある。菅原の院。冷泉院。朱雀

院。

とる。小野宮。紅梅。あがたの井戸。東三條。小六條。小一條。

○近衛御門——陽明門をいふと拾芥に見えたり。神樂の早歌にこのゑのみかどに巾子おといつとあるも。梁塵愚案抄に、陽明門と云々。

○二條、一條もよし——二條院は二條の北堀川の東、天曆の母后の御領と拾芥にあり。一條院は、一條の南大宮の東二丁、謙徳公の家、又法住寺大臣爲光の家云々。

○そめどののみや——正親町の北、忠仁公の家と拾芥にあり。又築殿の后もおはすゆゑに、そめどののみやといふにや。

○せかある——清和院なり、正親町の南、京極の西、清和の母后の御在所と拾芥にあり。

○すがはらのゑん——拾、勘解由小路の南、烏丸の西一丁、道眞公の御所、或は參議是善の家也。當時歡喜光寺と號す。北野祭の日、神氏此處に来て、枇杷を取りて神に供す云々。

○れいぜんゑん——本は冷然院なりしを、火災によりて、然の字を改めて冷泉院といへり。拾芥に、大炊御門の南、堀川の西、嵯峨の帝の御宇に、此の院累代の後院、弘仁亭云々。

○朱雀院——源氏にては、すざくゑんとよめり。拾、三條の北、朱雀の西四丁、

四條の北、西坊城の東云々、
 ○とうろん——洞院にや。
 ○小野宮——大炊御門の南、烏丸の西、惟高親王の家、定頼これを傳領す。清
 慎公も傳領之云々。
 ○こうばい——紅梅殿なり、拾、五條坊門の北、町の西、北野御子の御所、或
 は天神の御所云々。
 ○あがたのゐど——縣井戸、拾、一條の北、東洞院の西の角、井戸殿ともいへ
 り云々、後撰集に、橘公平のむすめ、こゝにすみてよめる歌、「都人きてもをら
 なむ蛙なくあがたのゐどの山吹の花。
 ○とう三條——とうさうでうともよむ、拾芥云、東三條四條院誕生の所、或は
 重明親王の家云々。二條の南、町の西、南北二町、忠仁公の家、貞信公、大入
 道殿傳領云々。
 ○こ六條——楊梅の北、烏丸の西、又北院ともいへり。小六條院の御領云々拾芥。
 ○こ一條——近衛の南、洞院の西、師尹公の家、又は山吹殿ともいへり。清和
 天皇の誕生の所、貞信公家とこれも拾芥抄にあり。

二十

一 清少中宮の御
 かたに、さぶら
 ふほどの事なる
 べし。
 二 手長、足長を
 也。
 三 高欄、らんか
 ん也。
 四 青磁などの花
 類なるべし。
 五 櫻直衣前注
 六 着なれたる心
 にや。
 七 澁茶指貫
 八 澁さくれなる
 の綾の事也。
 九 出しぎぬのさ
 ま也。
 一〇 上一條院の中
 宮の御かたにお
 はします也。
 二 大納言殿のさ
 ま也。
 三 三條の板敷也
 四 三奏、大納言殿
 の物申し上げら
 るる也。

清涼殿のうしとらの欄の北の隔なる御さうじには、荒海のかた、生たる物ども
 おそろしげなる、手長、足長をぞかかれたる。うへの御局の戸押しあけたれば、常
 に見ゆるを、にくみなどして笑ふ程に、勾欄のもとに、青き瓶の大きなるすゑ
 て、櫻のいみじく面白き枝の、五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄のも
 とまで、こぼれ咲きたるに、ひるつかた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなる
 に、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いと鮮なるを出して参り
 給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口の前なるほそき板敷に居給ひて、もの
 など奏し給ふ。御簾のうちに、女房、櫻の唐衣ども、くつろかに脱ぎ垂れつゝ、藤
 山吹など、いろ／＼にこのもしく、あまた、小半菰の御簾より、おし出でたる程、
 日の御座のかたに、おものまるる足音たかし。けはひなど、「おし／＼」といふ聲
 聞ゆ。うら／＼とのかなる日のけしき、いとをかしきに、はての御簾もたる藏人
 参りて、おもの奏すれば、中の戸よりわたらせ給ふ。御ともに大納言殿参らせ給う
 て、ありつる花のもとに歸り居給へり。宮の御前の御几帳おしやりて、長押のもと
 に出でさせ給へるなど、ただ何事もなく、よろづにめでたきを、さぶらふ人も、思
 ふ事なき心地するに、「月も日もかはり行けどもひさにふる三室の山の」といふ古
 言を、ゆるらかにうち詠み出して居給へる。いとをかしとおぼゆる。計にぞ、千歳
 もあらまほしげなる御有様なるや。

西ゆるやかなる心也
 五小字節
 天蓋御座也、常にはひのござこいへり、清涼殿の内にあり
 毛隠の藏人などゆきかふなるべし
 八果ノ御飯にや一を持ちたる也
 三主上の御さま也
 三主上の御供を勤めて、又中宮の御前へまゐり給へり
 三定子也
 三大納言殿おはしたれは中宮も出で給ふさま也
 中宮をほめ申す詞也
 三藏中宮の御さまをめで奉る事也
 三主上、中宮な

○清涼殿のうしとらの——是より例の筆すさび也。
 ○北のへだてなる御さうじ——荒海の障子といふ是也。禁秘抄に、清涼殿の事委くしるさせ給へるに、北に荒海の障子あり。南の方に手長、足長、北面の障子は宇治の網代、墨繪也。二間と上の御局との間に、昆明池の障子を立つ下時。古今著聞にも、萩の戸の前なる布障子を、荒海の障子と名付けて、手長、足長など書きたり云々。
 ○うへの御つぼね——后、女御などのまうのぼり給ふ時、かりそめの休息の所也。禁秘抄に藤壺の上御局、弘徽殿の上御局などあり。三光院御説云、中宮のまうのぼらせ給ふ折は、清涼殿の御座のかたはらの一間を上御局に賜ふ、定まれる事也。
 ○大納言殿——伊周公なるべし、中關白道隆公の御子、中宮定子の御兄、後同三司これ也。
 ○さくらからぎぬ——裸唐衣、おもて白く、裏紫也と、一條禪閣の御説也。
 ○くつろかにぬぎたれつ——くつろぎがましき心也。肩のかゝり優なる様體なり。
 ○ふぢやまぶき——みな春の裝飾也。藤はおもて紫、うら薄紫也。山吹の衣はおもて朽葉、うら黄なり。かさねにもありと一禪御説也。

の御事をいはへる大納言の詠吟也
 三言の詠吟の久にふるさいふに付けて、清少のおもへる心也
 云助字也

○こはじとみのみすより、おし出でたる——女房連の袖口あまた、小半節あるみすの下よりおし出でし也。胡曹抄云、押出事、薄綿衣等袖不出、是定例也、是宮女房御所也。又云、勢時押出、不出、襦袢裳、要月五節之時、押出、禁中出、襦袢裳、要月許也。
 ○おもものまゐる——御膳進也。禁秘抄云、凡御膳大床子御膳、朝夕、近代一度供之、朝餉御膳朝夕夜侍ル、皆一度供之、此御膳等近代主上不着下略、又日大床子御膳、時々必可有、着御、其作法、藏人奏、御膳之時、御直衣自三帳後、着大床子、懸、膳着之、向、陪膳人警候。此の草紙のさまは、只日の御座の方へ、御膳進る音するてい也。主上はいまだ着御し給はぬほどなるべし。
 ○けはひなど、おしくといふこゑ——形勢、物のけしき也。おしくは、足音の高きをいましむる聲也。源氏宿木卷の註に、聽雪御説云、うつぼ物がたりに、おしといへる詞あり、それは物などまゐらするに、人の足音の高きをおそれよといへる心也云々。禁秘抄に、陪膳人警候とある心にや。
 ○おもものそうすれば——藏人の申し上ぐる心也。禁秘抄に、藏人奏、御膳之時、御直衣自三帳後、着大床子、と侍る所のさまなるべし。
 ○月も日もかはりゆけども——新勅撰賀歌、月も日もかはりゆけどもひさにふるみむろの山のとこ宮所、ひさにふるは久しく廻る也。とこ宮所は、とこし

一主上の清少に
仰せらるゝ也
二白色紙
三主上の御詞也
四清少などの女
房に、物かけを
仰せらるゝ也
五外に居給ふ大
納言へ、清少の
これいかに侍
らむといふ也
六大納言の答也
七我は何ぞ助言
すべきやうなし
と也
八主上の御前の
親を大納言のこ
りおろしてすゝ
め給ふ也
九イニまはさで
二清少をはじめ
女房達也
二時節春なり、
花類などある所
なれば也
三懸せしこは、い
ふ／＼も也
四清少の書きた

なへにかはらぬ心の祝の詞也。

陪膳つかうまつる人の、をのこどもなど召す程もなく、渡らせ給ひぬ。「御視の墨
すれ」と、仰せらるるに、目はそらにのみにて、ただおはしますをのみ見奉れば、
程遠き目もはなちつべし。白き色紙おし疊みて、「これに、只今覺えむふる言、一
つづつ書け」と仰せらるゝ。とに居給へるに、「これはいかに」と申せば、「とく書
きて参らせ給へ。をのこは言加へ候ふべきにもあらず」とて、御視取りおろして、
「とく／＼、ただ思ひめぐらさで、難波津もなにも、ふと覺えむこと」とを、責め
させ給ふに、などさは臆せしにか。すべて面さへ赤みてぞ、思ひみだるゝや。春の
歌、花の心など、さいふ／＼も、上臈二つ三つ書きて、「是に」とあるに、
年経れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし
といふことを、「君をし見れば」と、書きなしたるを御覽して、「只此の心ばへども
のゆかしかりつるぞ」と、仰せらるゝついでに、「圓融院の御時、御前にて、『草子
に歌一つ書け』と、殿上人に仰せられるを、いみじう書きにくくすまひ申す人々
ありける。『更に手の悪しき善さ、歌の新にあはざらむをも知らじ』と、仰せられ
ければ、わびて皆書きける中に、只今の關白殿の、三位の中將と聞えける時、
潮の満ついづもの浦のいづも／＼君をば深くおもふにやわが
といふ歌の末を、『頼むはやわが』と、書き給へりけるをなむ、いみじくめてさせ

る古歌也
一主上の御らむ
じて也
二清少の作意を
御威の御詞也
三是より御物語
也
四六十四代の帝
也
五辭退するま
也
六圓融院の御詞
也
七清少かまひある
まじき也
八イ比
九三位中將の書
き給ひし古歌也
一圓融院の御威
と中宮の御物が
り也
二清少のいみじ
くも恥かしくも
思ふ心なり
三汗流るる也
四よはひは老い
ぬと清少の年

給ひける」と、仰せらるゝも、すするに汗あゆる心地ぞしける。若からむ人は、さ
も得書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例いとよく書く人も、あいなく皆つゝま
れて、書き汚しなどしたるもあり。

○はいぜんつかうまつる人の、をのこどもなどめす——御膳の事すみて、陪膳
の女房など、すべりし御膳を、藏人などにわたさむとてめしよする也。

○ほどもなくわたらせ給ひぬ——主上の御膳すみて、又中宮の御かたへ渡御と
也。禁秘抄に、立著之後經三本路一還三本所とあるさま也。

○めはそらにのみにて、ただ——清少の墨するには心もなくて、只目をあげて
君體を見奉るさま也。

○ほどとほきめもはなちつべし——君體を見ては、前に千とせもあらまほしと
まもり奉りし中宮にも、目をはなつべしと也。千とせもといへる事を、程遠き
とはいふにや。

○おもひめぐらさで——思案なくて也。

○なにはづも何も——「難波津にさくや此の花冬ごもり今は春べと咲くや此の
はな」此の歌を、古今序に、手習ふ人の始めにもしけるとあれば、童もしれる
歌なれば、さやらの事にても、何にてもかゝれよと、大納言殿のせめ給ふ也。
○上らう二つ三つ——中に上臈の女房達の先づ書きて、清少にも是にかけと催

よりたればこそ
書きたれどなり
冠書汚、かき滑
すさ也

せばと也。

○としふればよはひは——此の歌古今の詞書に、「染殿の後の御前に、花がめに
櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる」とあり。忠仁公の歌也。御むすめの後の
御さかりを悦びてよみ給へる也。今清少と花瓶の櫻の、中宮の御まへにあるに
付けて、思ひよせたるうへに、主上の仰せにてかく書くなれば、君をしと書き
かへたる、誠に面白く侍るにや。前の詞に、中宮の御ありさまに候ふ人々も、
思ふ事なき心ちするといひ、主上の御事を、目はそらにのみにて、只おはしま
すをのみ、見奉ればなどありしも心をつくべし。

○手のあしきよき、歌の折にあはざらむをも——殿上人どもの、遠慮するさま
を、御覽じて、手跡の善悪、歌の折にあはぬをも、御かまひなしとなり。

○只いまの關白殿の三位中將——中宮の御父、中關白道隆の御事なるべし。圓
融院の永観二年正月七日、敍從三位右中將如元、と公卿補任にあり。一條院の正
暦元年に關白し給へば、只いまの關白殿と、中宮の御詞也。

○しほのみつづいづものうらの——萬葉の歌也。いづものうらのとは、いつもい
つもといはむ序也。是は戀の歌なるを、たのむはやと書きかへて、天子をとと
しなへに、頼み奉る心をのべ給へる也。はやは者也也。

○わかからむ人は、さもえかく——清少此の時廿歳にも過ぎたるにや、長保三

一古今歌集也
二是は中宮の歌
前に也

三歌の上句也

四下句也源氏早
藤巻にも本末と
有り

五朝夕其の歌を
心にかけるて覺
えしもありしこ
なり

六句

七古今集の中に
て、わづかに十
首などは覺えし
内かはさたり
八氣運なり、け
しきのすけなき
心なり

九榮(ハエ)、光
(ハエ)、よし
なくさの心也
三此の下句はし
らすさおの、
中宮のよみ給
へはまことに覺

四年の頃の事を、榮花物語にかきし所に、中宮の御妹淑景舎の御事をいふとて
「五せちの所々のありさまなど、いひかたるに付けても、清少納言など出合ひ
て、せうくの若き人などにもまさりて、をかしうほこりかななる云々。此の時
分にも若き人にもまさりてとあるは、少し年ねびたる事しられ侍る。

古今の草子を、御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、「これが末はいか
に」と、仰せらるるに、すべて夜壺心に懸りて覺ゆるもあり。げによく覺えず、申
し出でられぬ事は、いかなる事ぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それも覺ゆるかは。ま
て、五つ六つなどは、ただ覺えぬ由をぞ啓すべけれど、「さやはけにくく、仰事を
はえなくもてなすべき」と云ひ、口をしがるもかし。知ると申す人なきをば、や
がて讀みつづけさせ給ふを、「さてこれは皆知りたる事ぞかし。などかくつたなく
けあるぞ」と、云ひ歎く。「中にも、古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬ
べき事ぞかし。村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御むす
めにおはしましたしければ、誰かは知り聞えざらむ。また姫君におはしける時、父おと
どの教へ聞えさせ給ひけるは、「一には御手を習ひ給へ。次にはきんの御琴を、い
かて人に彈きまさむとおぼせ、さて古今の歌二十卷を、皆うかべさせ給ひむを、御
學問にはせさせ給へ」となむ、聞えさせ給ひけると聞しめしおかせ給ひて、御物忌
なりける日、古今を隠して、もて渡らせ給ひて、例ならず、御几帳をひきたてさせ

なりける日、古今を隠して、もて渡らせ給ひて、例ならず、御几帳をひきたてさせ

えし歌なりしと
 三物覺えのよわ
 事也
 三清少等の女房
 也
 中宮の御詞也
 五いた帯にも
 つかうまつり給
 はで也
 云師公の女御
 への教訓也
 七師尹の女御に
 也
 六村上天皇の聞
 し召して也
 元つれづれなる
 折なれば也
 三帝の女御の御
 かたへ也
 三帝せんようで
 んの御かたへ渡
 らせ給ひて也
 三芳子也
 三古今也
 三帝の也
 三古今の詞書な
 らせ給ひて

給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御草子をひろげさせ給ひて、『その年其の月、何の折、その人の詠みたる歌はいかに』と問ひ聞えさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふもをかしきものの、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべき事と、わりなくおぼし亂れぬべし。其のかたおぼめかしからぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して敷を置かせ給はむとて、聞えさせ給ひけむ程、いかにめてたくをかしかりけむ。御前にさぶらひけむ人さへこそ、羨ましけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがて未までなどはあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかで猶少しおぼめかしく、ひが事見付けてをやまむと、ねたきまでおぼしける。十巻にもなりぬ。『更に不用なりけり』とて、御草子にけうさんして、みとのごもりぬるも、いとめてたしかし。いと久しうありて、起きさせ給へるに、この事、さうなくてやまむ、いとわろかるべしとて、下の十巻を、明日にもならば、ことをもぞ見給ひあはするとて、今宵定めむと、おほとなぶら近くまりて、夜ふくるまでたむ讀ませ給ひける。されど、つひに負け聞えさせ給はずなりにけり。うへ渡らせ給ふて後、かゝる事なむど、人々殿に申し奉りければ、いみじうおぼし騒ぎて、御誦經などあまたせさせ給うて、そなたに向ひてなむ、念しくらせ給ひけるも、すきずきしくあはれなる事なり。など、語り出でさせ給ふ。

○宰相の君——中宮の官女の上臈と見えたり。おくに富小路の左大臣の御孫と

きはせ給ふさま
 也
 云女御の御心也
 帯の古今を試み
 給ふま心得給ふ
 也
 三物からとおな
 じ
 元ひが事の覺え
 也
 元古今のうたな
 らせ給ひて也
 女房也
 三碁石
 三しひて也
 三帝の女御に此
 の歌の事をさば
 せ給ふ也
 三女御覺えのた
 がはざりしなり
 三村上帝の御心
 也
 三助字也
 三村上の御詞也
 三不用也、いら
 ざる事也、御
 退屈のさまなり
 三帝の御疑なる

あり。左衛門佐重輔の女也。

○さやはけにくく、おほせ事をはえなく——中宮の仰せらるる事を、さやうにけにくくしらぬなど、何の由もなきやうに、もてなすべき事はといふ也。

○中にも古今あまた——あるが中にも、古今はよくおぼえぬべき事ぞとの義也。

○村上の御時——六十二代天曆の帝の御事也。延喜帝第十四の皇子、御母は皇后宮種子、照宣公の御むすめ也。康保四年五月廿五日にかくれさせ給ひて、六月四日に村上の山陵に葬り奉りしゆゑ、村上の帝と申す也。

○せんようでんの女御——宣耀殿女御芳子、榮花物語に委しくしるせり。

○小一條左大臣——師君公の御事也。貞信公の五男、母は源碩子寛平の御むすめ也。

○きんの御こと——琴は七絃也。河海云、琴神農作也云々、元五絃、宮、商、角、徵、羽是也、加三文武絃合七絃也。琴操云、長三尺六寸六分、象三三百六十六日、前廣後狹、象三尊卑、上圓下方象三天地、五絃象三五行。

○御ものいみなりける日——禁秘抄云、御物忌之時、惣不出御他殿舍中、諸事於三籠中一有之云々。又云、以レ御造簡三分計、指三御冠纒、御放本鳥時、付三左御袖、書紙百紙也云々。物忌とは、迦毘羅衛國の桃林に住む鬼神の名也。此

事也、源氏におはさるごもろこあるにおなじ元村上帝の御心也
 〇異古今々
 〇今夜のほごにこゝろみ定めむ也
 〇かやうの事ありさ也、古今を心み給ふ事也
 〇調御也、御失念なきやうに之の御祈禱也
 〇念也
 〇中宮の御物語有りし也

の鬼神の邊へは悪鬼よらず。其の故に物怪悪夢の時は、此の鬼神の名を書きて柳の枝、忍ぶ草などに付けて、冠にも、簾にもつけてこもりおはすと也。猶河海抄に委し。
 〇ごいししてかずをおかせ——女御の覺えたまはぬ所々もあらは、其の數をとらせむとて、碁石にて數とれと女房達に聞えつけさせ給ふ也。
 〇御前にさぶらびけむ人さへこそ——中宮の御物かたりをきく、清少のおもへる心をかける也。
 〇さかしうやがて末までなどは——女御の體也、賢げに一首をみなく申させ給ふ事はなかりしかどとなり、上臈しきさまをいへり。
 〇いかでなほすこしおぼめかしく、ひが事見付けてをやまむ——此のをの字は助字也。女御のおる覺えなる所を、見付けてなりともおかむと、帝のおぼしめす也。
 〇御さうしにけうさんして——境算也、世にけさんといふ物也。古今の上におかせ給ふ也。
 〇なほ此の事さうなくて——此の古今の事を、上巻ばかりこゝろみて、残りを其のままにてさしおかむはいかがと、御思しめす也。さうなくては、左右なくて也。其のままのこゝろ也。

一 一條院の叙威也
 二 一條の御詞
 三 女房達の詞也
 四 數寄也
 五 中宮の御かたの女房也
 六 帝の御かたの女房達の、中宮の御前へも出づる人々也
 七 前に君をし見れば物思ひもなしと、書きし詞をうけていへり

〇ことをもぞ見給ひ合へる——明日まで、さしのばし給はば、女御の異本をも見合せて内稽古もあらむと、帝のおぼしめして也。
 〇おほとなぶら——切燈臺を近くともして也。
 〇うへわたらせ給うてのち——村上常の女御の御かたへ、古今をこゝろ見に、渡御有りてのちに也。
 〇殿に申したてまつり——帝のかやうに試給ふと、師尹公へ人々申したる也。
 〇すきずきしく——物に深く數寄て、執心なる心也。師尹公の御事を批判の御ことば也。
 〇うへも聞しめしてめでさせ給ひ、「いかでさ多く讀ませ給ひけむ。我は三卷、四卷だにも、得讀みはてじ」と仰せらる。「昔はえせ者も、皆すきをかしうこそありけれ。この頃かやうなる事は聞ゆる」など、御前に候ふ人々、うへの女房の、こなた詩されたるなど参りて、口々いひ出でなどしたる程は、まことに思ふ事なくこそ覺ゆれ。
 〇いかでおほくよませ——村上帝は、何としてさやうに古今をことごとくよませ給ひけむと、御氣根を御感の詞也。
 〇むかしはえせものも——中宮の御物がたりを承りし女房の申す也。むかし

一ゆくさきのたのしみもなき心也、もど清少の双紙の地也
 二夫をもつ事也
 三然るべからざるのこゝろ也
 四禁中にまじらはせよ也
 五苦界を云ふ也
 六禁中の奉公の女房をいふ也
 七かけて申すもおそれある帯の御事也
 八いふはちよはすとの心也
 九其の女房達の里の人ども也
 一〇別人前に註す二宮仕へすればさやうの下人にも、恥ぢかくれず見らるゝ也
 一三宮仕にて侍るはさは、見るにてぞあらむ也

はさやうの女御などにかぎらず、下つかたも物おぼえなどのかたを数寄たりしと也。
 おひ先なく、まめやかに、えせざいはひなど見て居たらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世の中の有様も、見せならはさまほしう、内侍などにも、しばしあらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば、あはしくしうわろき事に思ひ居たる男こそ、いとにくけれ。げにそも又さる事ぞかし。かけまくもかしこき御前を始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人は少くこそはあらめ。女房のずんざども、その里より来る者ども、をさめ、御側人、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢ隠れたりし。殿ばらなどは、いとさしもあらずやあらむ。それもある限はさぞあらむ。うへなどいひて、かしづきすゑたるに、心にくからず覺えむことわりなれど、内侍のすけなどいひて、折々うちへ参り、祭の使などに出てたるも、面正しからずやはある。さて籠り居たる人はいとよし。受領の五節などい出す折、さりともしいたう鄙び、見知らぬ事、人に問ひ聞きなどはせじと、心にくきものなり。

○おひさきなくまめやかに——是より中宮の御前の人々、思ふ事なげなるに付けて、人のむすめのなまじひの縁につかむよりは、宮づかへさせまほしき事を

三北の方さかしづかむには、人に見られし人は、心にくからず思はむもことわり也
 一四覺也
 一五理也
 一六江次第、賀茂の祭路次の次第に、内侍車といふ事もあり
 一七面目らしき心也
 一八一たび典侍などの官女にて後に縁に付き居たる人也
 一九受領は任國に於て、禁中の事疎けれど、北方宮仕人なれば五節の事もよく知りおこなへば心にくき也
 二〇女には宮仕させたき心といふ也

いふ也。
 ○いぶせくあなづらはしく——なまじひの男などもたる人は、むさらしくあなづらはしきと也。宮仕へする心よりいへる詞也。
 ○内侍などにも——掌侍也、令には、掌侍四人、掌同二典侍二相當従五位などあり。禁秘抄には、掌侍六人正四人、權一人、權自上古有之、此内以二一内侍一爲二勾當二隨二補日二爲二一、二一也下略。
 ○げにそもまたさる事ぞかし——實にこれも尤もぞと也。宮仕人は人にも見られて、心にくからぬ事もあれば、こはどはしき事に男の思ふも理ぞと也
 ○上達部——公卿をいふ也。位は三位以上、官は宰相已上をいへり。
 ○女房のずんざ——傍輩の女房のつかふ従者也。
 ○をさめ——長女、八雲抄に下女也。
 ○たびしかはら——稱名院御説に、たびしかはらは百姓也云々。
 ○とのばらなどはさしもあらずやあらむ——殿ばらには若し隠るゝ事も有れば、さしも見ぬこともあらむ、されどそれも宮仕して侍るほどは、大かたみるにてあらむと也。
 ○内侍のすけ——典侍也、相當従四位掌同二伺侍一など令に有り。禁秘抄に、典侍四人也、此職最重、公卿侍臣女也、大臣子無例、大臣孫少々有例など有

リ。
 ○ずりやうの五せちなどいさす——受領は國の守也。十一月中丑日常寧殿にて帝五節の舞姫を御覽あるに、受領よりも五節を出す事あるを云ふ也。河海云、五節は常の年は公卿より二人、受領より二人四所也、代始には公卿二人、受領三人五所也、五節の事、江次第、年中行事歌合註等に委し。

春曙抄一終

枕草子春曙抄 卷二

二十一

すさまじきもの、蠶ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。ちこのなくなりたるうぶ屋、火おこさぬ火桶、炭櫃、牛にくみたる牛飼。博士のうち續き女子うませたる。方違に行きたるに、あるしせぬ所。まして節分はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、されどそれは、ゆかしき事も書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許に、わざと清げに書きたててやりつる文の、返事見む、今は來ぬらむかしと、怪しく遅きと待つ程に、ありつる文の結びたるも、立文も、いと汚げに持ちなしふくだめて、うへに引きたりつる墨さへ消えたるを、「おこせたりけり、おはしまさざりけり」とも、もしは「物いみとて取り入れず」など、もて歸りたる、いとわびしくすさまじ。

- すさまじき物——時過ぎてつきなき物をいふ也。
- ひるほゆる犬——犬は夜のまもりをこそ用ふべければ也。
- 春のあじろ——網代は冬のほど、宇治田上河などに氷魚をとる物也。春はす

一イニ卯月ばかりの
 ニイしにたる
 三博士也、學問の家には男子こそしかるべけれ也
 四方違
 五炭櫃也、振舞也
 六イなき
 七節分の方違に墨せぬは猶すさまじ也
 ハ文の中につみたるしるしなき也
 九京よりの文にも物なくはすさまじかるべけれ

〇京のたより懸しきゆゑ也
 二今世にもてあつかふ事也
 三物なくともくさしからず也
 四返事のおそきさまちかねる也
 五此の方よりやりし文也
 六使者のわろく持ちなしたる也
 七封じ目也

一むかへに車をやる也
 二車の降り入る也

さまじき也

〇三四月の紅梅のきぬ——表紙、うら紫のきぬ也。十一月より十二月まで用ひる由一禪の御説也。三四月は時過ぎし也。

〇火おこさぬ火桶、すびつ——鴨長明無名抄に火おこさぬ夏のすびつの心ちして人もすさめずすさまじの世やとよみしを、冬のすびつならば猶すさまじからむと、童女の難じたる事あるも此の双紙の心歎。

〇はかせのうちつづき女子——花鳥餘情に、博士は博達ハクダツの士といふ心也云々。職員令云、大學寮博士一人掌下教三校經業二課中試學生也。

〇かたがへにゆき——方違とは、いづくにてもゆかむと思ふ方の、金神などにあたり、又は臨時に天一神、大白神などのふたがれば、其の方へはゆかで、先づことかたへ行きて、其の方をたがへて、きてその心ざしたる所へゆく事也。拾芥抄に委し。源氏帚木卷中河の方たがへも、内裏より葵上の御方に天一神ふたがりたれば也。

〇おはしまさざりけり——彼のやりつるかたの、人の留守なりと使のいふ也。

〇物いみとてとりいれず——物忌にこもりつゝしみ給ふとて、文をとりいれぬといふ也。

又、必ず來べき人の許に、車をやりて待つに、入り來る筈すれば、さななりと、人

三彼のむかへにやりし車をこりおく也
 四亭主の湯也
 五むかへのもの答也
 六牛ばかりを也
 七末とゆてかよはぬ也
 八もさへ也、彼の舞をみやづかへ人のもさへやりて也
 九のほし他行せむとて出でゆきし也
 一〇二兒の乳母をたづぬる也
 一一三早く來れぬのこをよびにやりし也
 一二三むかたなき心也
 一三其の人ならぬ也

人出て見るに、車やどりに入りて、轡くわはうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず」、「渡り給はず」とて、牛のかぎり引き出でいぬる。又家ゆすりて取りたる増つみの來ずなりぬる。いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがかりやりて、いつしかと思ふも、いと本意なし。ちこの乳母の、只あからさまとていぬるを、求むれば、とかくあそばし慰めて、「とく來」と云ひやりたるに、「今宵は得參るまじ」とて、返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふる男、ましていかならむ。待つ人ある所に、夜すこし更けて、忍びやかに門を叩けば、胸少し潰れて、人出だして問はするに、あらぬよしなき者の、名乗して來たるこそ、すさまじといふ中にも、かへすがへすすさまじけれ。

〇さななりと——さなむなりとよむべし。それ也といふ心也。むかへにやりし人のきたりしよと、おもひたる心也。

〇うしのかぎりひき出で——車は車舎にいれて、牛ばかり引き出でいぬるがすさまじくきびしき心地。

〇又家ゆすりて——家動りて也、一家うちうごきての心也。

〇こずなりぬる——むかしは、女のもとへ舞のかよひしと也。

〇さるべき人の、宮づかへするがかりやりて——彼の舞の我がたへはかよはで、しかるべき宮仕人などかたらひつきて、いつかは又こなたへはおもひかへらむ

一 驗者
 二 調伏也
 三 イせめごふ
 四 少しも物のけの去るべきけしきもなく也
 五 護法也、調ずるしるしのつかぬ也
 六 一門の男女しるしなきをあやしむ也
 七 驗者のたに上みつかれし也
 八 はじめよりましにもたせたる珠數をまりがへす也
 九 驗者の手もちあしけなるさま也
 一〇 つきなくすさまじき心也

とおもふも本意なくすさまじと也。
 ○かへしおこせたる——乳母の今夜はえかへるまじきとて、迎への使をただにかへしたる也。

○女などむかふるをとて、まして——乳母をよぶにこぬさへあるに、ましておもふ女をよびにやりてこずば、男の心いかならむと也。

○むねすこしつぶれて——まつ人の來たりつるかと思ふに、心ときめきする心也。

げんじやの物のけてうすとて、いみじうしたり顔に、獨鉗や珠數など持たせて、蟬聲にしほり出だし讀み居たれど、いさゝかさりげもなく、護法もつかねば、集めて念じ居たるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはる迄讀み困じて、「更につかす。たちね」とて、珠數取りかへしてあれど、「駭なしや」とうち云ひて、額より上さまに、頭さぐりあげて、欠伸をおのれうちして、より臥しぬる。

○とこやずなどもたせて——獨鉗、珠數などよりましに持たせて也。

○せみごゑにしほり出だし、陀羅尼、神咒など、蟬のこゑのやうに讀むなり。異本にせめごゑにとあり、彼のよりましを責聲に、だらになどよむさま也。

○あつめてねむじむたる——一門など集りて諸共に祈念し居たる也。

○さらにつかずたちねとて——更に驗つかずとて、よりましを立ちのけといふ也。

一 可也、國司にならぬ事也
 二 むかしの事也
 三 三つかひし家人也
 四 受領し給はむこといさみるさま也
 五 任國の吉左右を告げしらす音のせぬ事也
 六 耳さごめての心也
 七 吉左右ききにやりし也
 八 正月餘祭のころ也
 九 吉左右ききに禁中へやりおきし下男也
 一〇 主君の受領し給はぬに氣をうしなへるさま也
 二 彼の外々より下つかさのぞみて來居たる者也

也。

除目につかさ得ぬ人の家。今年ほ必ずと聞きて、はやうありし者どもの、ほかくなりつる、片田舎に住む者どもなど、皆集り來て、出で入る車の轆もひまなく見え、物まうでする供にも、我もくと參りつかうまつり、物食ひ、酒飲みのしりあへるに、はつる、門叩く音もせず。怪しなど耳立てて聞けば、先追ふ聲して、上達部など、皆出で給ふ。物ぎきに、宵より寒かりわなゝき居りつる下衆をのこななど、いと物憂げに歩み來るを、をる者どもは、問ひだにもえ問はず。外より來たる者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」と問ふ。いらへには、「何の前司にこそは」と、必ずいひふる。まことに頼みける者は、いみじうなげかしと思ひたり。つとめてになりて、ひまなく居りつる者も、やうく一人二人づつすべり出でぬ。ふるき者の、さもえゆき歸るまじきは、來年の國々を、手を折りて數へなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしう、すさまじになり。

○ちもくにつかさえぬ人のいへ——つきなくすさまじと也。縣召の除目に望むところの受領せぬ事也。

○ことしはかならずと聞きて——これより彼の受領せぬ人の家のすさまじき事をいふ也。此の正月の除目には必ず任國し給はむと聞き傳へて、其の家人など下づかさを望むものどもの來て、追從するさまなるべし。

二彼の下男の答也
 三イいらる
 四殿の國司になり給はは其下つかさをさ頼みしもの也
 一除目果てての朝也
 二外々より頼み來居たる者のかへるさま也
 一七ろろ／＼退散也
 一六老人也
 一七さやうに見捨ても見かへらぬもの也
 一是もすさまじ、つきなき心也
 二隨書也、おもふ人じやる文也

○物まうでするとともに——彼の任國し給ふべき人の物語にも供して、家人どもの下つかさ望むものつゝしよろしありく也。
 ○はつるあかつきまで——除目の果つる時也。外官の除目は九日より始めて議之と江次第にあり。三日おこなはるる事なるに、其の終のあかつき迄也。
 ○さきおふこゑと云ふ——除目は果て、公卿など退出のさま也。さきおふとは、河海に隱聲サキオフとよめり、隨身の警蹕して、非常をいましむるこゑ也。
 ○をるものどもはとひだにもえとはず——家にあるつかへ人どもは、よからぬ氣色を笑止がりて、いかがと問ひもえせざる也。
 ○なにの前司にこそは——前司とはさきの國司也、もと受領して、其の後他の國をも給はらぬを、前の守といふ其の心也。必ずいふるとは、下部などのたはぶれてかやうに任國をえぬ時は必ずいふなるべし。たとへば令まで紀伊守の任はてて、又除日につかさえたれば、河内守に成り給ふと答ふべきを、司をもえねば紀伊の前司にこそはなり給ひたれといふさま也。
 ○來年のくに／＼を——四ヶ年の任果て、來年あくべき國々をかぞへたつるさま也。今年こそはあれ、來年は得給はむとたのむ心なり。
 よろしう詠みたりと思ふ歌を、人の許に遣りたるに返しせぬ。懸想文はいかがせむ。それだに、折をかしうなどある。返事せぬは心おとりする。又懸かしう時めか

三返するべき雨の夜、雪の朝なり也
 四時めきさかえたる所也
 五古めきたる歌なるべし
 六祭、物見など七大事の晴と思ひて也
 八イニ必ずようしてむさおもふに人
 九イニとらせたるに
 一〇思ひの外によからの繪也
 二くれたる心也
 三接ウブヤシナヒ繪記にあり
 四夜の使者祿をえむさおもひしかひなけれは也
 一五祿の事也
 一六祿あらむとも思はぬ事也

しき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれづれといとまあるまゝに、昔おぼえて、異なる事なき歌詠みしておこせたる。物の折の扇、いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひ付けたるに、其の日に成りて、思はずなる繪などかきて得たる。産馬のはなむけなどの使に、祿など取らせぬ。はかなき薬玉、卯槌などもてありく者などにも、猶必ず取らすべし。思ひかけぬ事に得たるをば、いと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきして來たるに、ただなるは、まことにすさまじきぞかし。
 ○けさう文はいかがせむ——懸書はむかひの人の心なびかずば、返歌せぬもこととはりなれば、すさまじといはむやうもなしと也。いかがせむとは、せむかたなしとの心也。
 ○うちふるめきたる人——時にあはで世にふるされたる人也。
 ○歌よみしておこせたる——時めかしき所へおこせたる也。歌よみしては、しの字たすけ字也。
 ○いひつけたるに——あつらへつけたる也。イニとらせたるは、とりもたせたる心なるべし。
 ○其目になりて——あつらへかへむやうもなき心なり。
 ○うぶやしなひ、むまのはなむけ——産養、産所の三ヶ夜、五ヶ夜などに、

モイニけふはか
ならず
一歳を得べき使
ぞし使者の思ふ
心也
てろくこらせぬ
事也

祝儀のおくり物する事也。源氏物語にあまたあり。馬儀は旅行の人に物送る也。

○くすだま——雲圖抄には、薬圭とかけり。河海抄に、續命縷、靈絲、綵絲、綵索などいへり。みなくすだまの體なりと云々。猶風俗通に委し。今女わらは端午にもてあそぶかざり花也。

○うづち——細流云、卯杖とおなじ事也。年中の悪鬼をおふ也。絲所より内裏には奉る也。江次第二曰、絲所進卯杖藏人取之結三付晝御帳懸三角柱一副立細木爲柱、榎末出五尺許可用三桃木、又四方可割。近代丸也。失歟略記。内裏ばかりにかざらず、諸家にもむかしは相おくれり。源氏浮舟の卷にあり。

増取り、四五年まで、うぶ屋の騒せぬ所。大人なる子どもあまた、ようせずば、むまごなども這ひありきぬべき人の親どちの晝寝したる。傍なる子どもの心地にも、親の晝寝したるは、依り所なくすまじくそありし。寢起てあふる湯は、腹立たしくさへこそ覺ゆれ。しはすの晦日の長雨。「一日ばかりの精進の懈怠」とや云ふべからむ。八月の巨重乳あへず成りぬる乳母也。

○うぶやのこわざせぬ——子の出来ぬ心也。
○ようせずば——不善也、こゝにては若はなどいふ心也。
○かたはらなる子どものこゝちにも——此のもの字、をさなき孫の心もこもるべし。

一孫をもつべき人の心也
二共の字也
三さびしくすまじき也
四乳のたらの事也

○ねおきてあぶるゆ——寝おきには湯あぶる事よからぬ物なれば、すさまじきと也。

○しはすのつごもり長雨——元日までも晴れまじきか、つきなくすまじき也。

○一日ばかりのしやうじんの——續に一日の精進を懈怠はつきなき心也。

○八月のしらがさね——自重は、四月朔日更衣の衣なるに、八月にはつきなきと也。寶治百首に俊成卿歌、「夏ぐれば衣がへして山がつの卯木垣根もしらがさねなり。」

二十二

たゆまるる物 精進の日のおこなひ。日遠きいそぎ。寺に久しく籠りたる。

○たゆまるる物——懈怠せられ退屈せらるる事也。

○さうじの日のおこなひ——精進の日の勤行は、懈怠すまじき事なれば、かへりて物うくたゆまるるなるべし。

○日とほきいそぎ——日數遠くかさねたる用事は、退屈せらるる心也。

二十三

一是も退屈する心也

ニイニこの一句なし
ニイニ此一句なし
三無用心なれば也

人にあなづらるゝ物 家の北面 餘心よきと、人に知られたる人。年老いたるおきな。又あはくしき女。薬土のくづれ。
○家の北おもて——南面を晴の所とするゆゑ、北面はさまでつくるはぬ心也。
○あはくしき女——淡々也、心ふかからぬ者は、あなづりやすかるべし。

二十四

一心やすき人ならは也
二後にさもいはれぬ人の長物がたりのにくき也
三髪すぢ也、紙さも雨説也
四驗者也
五驗者をまち得たる也
六加持、いのりせさする也
七そごろに也、へ何事を心持がほに物いふなるべし、
九是にくしと也

にくきもの 急ぐ事ある折に、長言する客人。あなづらはしき人ならば「後に」なと云ひても、追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りにすられたる。又墨の中に、石こもりて、きし／＼ときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで、外にある尋ねありく程に待遠に、久しきを、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、此の頃ものけに困じにけるにや、居る儘にすなはち、ねぶり聲になりたる、いとにくし。なんてふ事なき人の、すずろにえがちに物いたう云ひたる。火桶、炭櫃などに、手の裏うち返し、皺おし延べなどして、あぶり居る者。いつかは若やかなる人などのさはしたりし。老いばみ、うたてあるものこそ、火桶のはたに、足をさへもたげて物いふ儘に、おしすりなどもするらめ。さやらの者は、人のもとに來て、居むとする所を、先づ弱して、塵拂ひ捨てて、居も定まらずひろめきて、狩衣の前下さまにま

一〇年老いたる事也
一うたてしき心也
二三足を爐にてする也
三局也
四分際也
五此の事清少のまのあたり見し事なるべし
六駿河前司也
七さやうにせしと也
八句
九イニあめき
三醉のうへに又しひもるさま也
三助字也
三さやうにし給ひしと也

くり入れても居るか。かゝる事は、いひ甲斐なき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の、式部太夫、駿河の前司などいひしがさせしなり。又酒飲みてあかき口をさぐり、糝あるものは、それを撫て、盃人に取らす程のけしき、いみじくにくしと見ゆ。「又飲め」など云ふなるべし。身振ひをし、頭振り、口わきをさへ引き垂れて、わらはべの、「こふ殿に参りて」など謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心つきなしと思ふなり。
○にくき物——此の一段清少の筆にまかせたるすさびながら、自他の心づかひになるべき事おほし。心をつけて見侍るべし。
○いそぐ事あるをりに、ながととする——急用ある折に、長物語する客人也。
○のちになどいひても——只今は急用あれば、後に緩々かたらむなどいひはむをと也。
○れいある所にはあらで——常に居る所には驗者のみざる也。
○からうじて——辛の字也。やう／＼としてなど云ふこゝろとおなじ。
○もののけにこうじ——困也、日頃物のけ調伏し、草臥れたるにや坐するとひとしくねむる也。ねぶり聲は陀羅尼などよむ聲のねぶたげなる也。
○なんでも事なき人——無二何條事一也、さしたる學問故實もなき也。いせ物語に、なでうことなきといへるは、難すべき事なき心にて、ほめたる儀と云々。

此の草紙の心とはかはるなるべし。

○いつかはわかやかなる人などの、さはしたりし——若き人などの、さやうのふるまひはせずと也。若き人もすまじきにはあらねど、まづ老人は物に恥しげなく、ふだしなみなるものなればいふ也。

○のみもさだまらずひろめきて——坐するとひとしく居ひろごりたる也。傍若無人のさま也。

○いひがひなきもののきはにやとおもへど——いやしきもののみかやうなるかとおもへどもとの心也。

○式部太夫——式部丞の敍爵したる也。式部丞は相當六位なすが、五位になりたるをいふ也。職原抄の式部丞の所に云、當省並民部丞謂之三省丞、必可レ給レ爵者所レ任也云々。

○あかき口をさぐり——イニあめきとあり。さけのみてわめくことにや。

○くちわきをさへひきたれ——吻クチワキ嚙同、べそ口するさまなるべし。酔ひたる人にある事也。

○わらはべのこうどのに——そのかみの童謡なるべし。こうどのは國府殿にや國司などをいふべし。

○まことによき人の——前に式部大夫駿河前司などいひしがさせしといひしを

うけての詞也。

一此の一章實に人の思ふべき所也

二いたくにくめる心也

三伊豫籬也

四イニはしのうちおかる、

五ならさるゝ也

六障子也

七蚊のぶん、

さなく心也、蚊

の字ぶんのこゑなれ也

ハきしみて輪の音する也

物うらやみし、身のうへ敷き、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば怨じそしり、又、わづかに聞きわたる事をば、我もとより知りたる事のやうに、こと人にも語り調べいふも、いとにくし。物聞かむと思ふ程に泣く乳兒。鳥の集まりて飛びちがひ鳴きたる。忍びて來る人見知りて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に、かくし伏せたる人のいびきしたる。又、みそかに忍びて來る所に、長鳥帽子して、さすがに人に見えじと、惑ひ出づる程に、物に衝き障りて、そよると云はせたる、いみじうにくし。伊豫籬など懸けたるをうちおかる、いとしくと鳴らしたるも、いとにくし。帽額の饞はましてこはき物のうちおかる、いとしくし。それもやをら引きあげて出て入りするは、更に鳴らず。又、遣戸など荒くあくるも、いとにくし、少しもたぐるやうにてあくるは、鳴りやはする。あしうあくれれば、障子などもたほめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身の程にあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。我乗りたるは、その車の主さへにくし。

○いひしらぬをばゑんじ——怨じ也おのがえしらぬ事をそねみうらめる也。
○わづかにききわたる事をば——此の頃すこし聞きふれたる故實古語などを

也。

○しらべいふ——調云にや、其の事を穿鑿する事なるべし。

○からすのあつまりて——是もにくき物の一つ也。

○さるまじうあながちなる所に——さやうの人寝さすまじき所なれども、わりなき程なれば、あながちにかくしてねさせたるに、其の人は何の用意もなきがにくきと也。

○ながるほしして——たてゑぼし着たるにや。

○そよるといはせたる——烏帽子の物にさはる聲也。

○もかうのすは——帽額簾也。木瓜ともかく也。

○こはき物のうちおかる——こはごはしき物の、引きかづきて落つる音する心也。イこはじのは鏝匙歟。

○やをらひきあげて——やうく／＼にうろ／＼と引き掲げて也。帽額の簾こはごはしとて、靜かに上げて出入はならぬ物を、いづれも用意なきをにくしと也。

○たほめかし——たほめかすとよむべし。たは／＼する心也。敷居にとどこほりて、打ちたはみなどすると也。

○こほめく——こと／＼となること也。源氏紅葉賀に、屏風たむむ音をこほこほと有り。

○はかせさへ身のほどに——彼のちひさき身のほどに羽風有りて、顔にあたりてにくきと也。

○我のりたるは——かのきしむ車をかりて、我のりたる心なるべし。

- 一 かりそめさいふ事也
- 二 面白き詠び也
- 三 それに劇れたる心也
- 四 居入也
- 五 私の里亭也
- 六 従者也
- 七 むかしそひたる女の事をいひ出でて也
- 八 くさめ也
- 九 イニてづからずんじいのるひ也
- 一〇 其の家の亭主也
- 一一 二重也
- 一二 三きぬをもてあぐるやうなるもにくしと也
- 一三 敷多長鳴する也

物語などするに、さし出でて、我ひとりさいまくる者、すべてさし出は、わらはも大人も、いとにくし。昔物語などするに、我知りたりけるは、ふと出でて、いひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りあり、いとにくし。あからさまに來たる子供、わらはべをらうたがりて、をかき物など取らするにあらひて、常に來て居入りて、調度やうち散しぬる、にくし。家にて、宮仕所にて、逢はてありなむと思ふ人の來るに、そら寝をしたるを、我許にある者共の、起しによりきては、いぎたなしと思ひ顔に、引さゆるがしたる、いとにくし。今參りのさし越えて、物知り顔に教へやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。我知る人にてある程、はやう見し女の事、譽めいひ出だしたるも、過ぎて程經にけれど、猶に／＼し。まして、さしあたりたらむこそ思ひやられる。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人。大方家の男しうならでは、高くはなひたる者、いとにくし。蚤もいとにくし。衣の下におどりありきて、もたぐるやうにするも。又、犬のもろ聲に、長々と鳴きあげたる、まがまがしくにくし。乳母の男こそあれ。女けされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、只我物にして、立ちそひ領じてうしろ

一此の段イ本奥の宮仕へ所はの奥にあり
 二女子のあたりへおて、のさのみまらぬ心也
 三愛ひ君をうしろみたるさま也
 四少しも参君の御意に背くものを也
 五八歳
 六九奇怪なれども也
 七目得自置のさま也
 八かほもち也

み、いさゝかも此の御事に違ふ者をば識し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれどこれか咎を、心にまかせていふ人もなければ、所得いみじきおももちして、事を行ひなどするに。

○さいまぐる——才托也。人をもどき、理を托げて、我才覺をあらはさむとする心也。

○ふといでていひくたし——云朽す也。其の物語は早開きふるせしなど、いひさますさま也。

○らうたがりて——勞也、いたはりいとほしむ事也。

○てうどやうちちらし——調度、手道具などをいふ也。やの字は調度や何やといふ心なるべし。一説調度屋也、てうどと、ひゝなの屋など也。

○いぎたなし——寝ごき事也。従者のおこすれども、態とそらねしておきぬを、ねごきと従者のおもふさまにて也。

○いままりの——新参のもの、もとより侍ふ者にさしこえて、物教へでなる事云ひ後見などするがにくきと也。

○わがしる人にて——只今相しりかたらふ夫婦の中にて也。

○ましてさしあたり——只今日の前に、二道かくる時の事也。

○さしもあらぬやうも有りかし——さしあたりたる事は、事によりて、さもね

たからぬと也。清少の心ばへ、嫉妬を恥じたる所あり。心をつくべし。

○はなひて誦文する人——異本、はなひててづからずんじいのある人とあり。尤も面白きにや、誦じ祈るも、文をとなへてまじなふ心也。拾芥、慶時、頌云、
 休息万命急々如律令。

○まがしくしく——まことに事がましき心也。

○めのとの男こそあれ——乳母の夫こそ、にくくはあれとの義也。世俗におて

てといふもの也。

○りやうじて——領じ也、偏に我物とするさま也。

○あやしけれど、これがとがを——乳母が夫の振舞奇怪なれども、其のとがを誰いひあらはす人もなければと也。

○事をおこなひなどするに——かやうなるによりて、乳母の夫はにくきものなりとふくめたる詞也。

二十五

小一條院をば、今内裏とぞいふ。おほします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて、渡らせ給ふ。常にまうのぼらせ給ふ。御世は盡なれば、前裁などうゑ、ませゆひて、いとをかし。二月十日の日のうらくと長閑に照

一是例の証する也
 二殿殿を清涼殿にして一修院也

はしませは其の
北に中宮定子の
おはししなるべ
し
三壺也
四帯へ中宮の参
上の御かよひぢ
也
五壺の内也
六笛也
七廿日
八一條院也
九おはすこの心
也
一〇異の字也
一一催馬樂のうた
ひもの也
一二はめ威じたる
心也
一三中宮の御方の
女房清少などあ
つまりて也
一四イニうたてあ
れば
一五イあらはこそ
さ
一六イこそこの

りわたるに、わたどのの西の廂にて、うへの御笛吹かせ給ふ。高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、こと笛ふたつして、高砂を折り返し吹かせ給へば、猶いみじうめて大しといふも、世の常なり。御笛の師にて、其のこともなど申し給ふ、いとめてたし。御簾のもとに集り出て見奉る折などは、我身に芹摘みなど覺ゆる事こそなけれ。すけただは木工の允にて、藏人には成りにたる。いみじうあらくしうあれば、殿上人、女房は、「あらわに」とぞつけたるを、歌に作りて、「さうなしのぬし、をはりうどのたねにぞありける」とうたふは、尾張の兼時がむすめの腹なりけり。これを笛に吹かせ給ふを、添ひさぶらひて、「猶高う吹かせおはしませ。得聞きさぶらはじ」と申せば、「いかでか。さりととも聞き知りなむ」とて、みそかにのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、「この者なかりけり。只今こそ吹かめ」と仰せられて、吹かせ給ふ。いみじうをかし。

〇小一條院をば今内裏とぞ——拾芥云、小一條は、近衛の南洞院の西、師忠公の家、一云山吹殿、清和天皇誕生の所、貞信公家云々。いづくにても大内裏の外に、臨時に天子のおはします所を今内裏といふ也。榮花物語に、堀河殿に圓融院おはせしをも、いま内裏といひし事あり。こゝは一條院の御事也。

〇たかとほの大貳——高遠、小野宮關白實頼公の御孫、參議齊敏卿の男、大宰大貳正三位。禁秘抄云、管絃一條院十一歳、圓融院被傳申一然而大貳高遠爲御

備前

一七イをば
一八イをたに
一九高遠の詞也
二〇すけたたはえ
聞きしり侍るま
じぎ也
二一帯の御詞也
二二ひそかに也
二三中宮御御か
たへ渡御也
二四すけたたが厨
ざればかりなし
との勅言也

〇たかさごををりかへし——催馬樂律高砂、初段たかさごのさいあこの二段をのへにたてる白玉椿玉柳下略。梁塵秘抄に委し。

〇わが身にせりつみしなどおぼゆる事こそなけれ——心に物のかなはぬなどやうの愁へなしとの心也。童蒙抄云、「せりつみし昔の人もわがごとや、心に物のかなはざりけむ」文選の山巨源にあたる絶交の嵇叔夜が書注云、芹をほめて甘しとて、其里の長に奉るに、里の長にがしとて笑ふ、しかもこれをうらみき云云。されば此の歌の心は、我心によしと思ひていふ事を、用ひられぬをうらみてよめるなるべし略記。

〇すけただはもくのぞうにて、藏人にはなりにたる——勘物云、長保頃此名字、藏人不見云々。木工允より六位藏人に成りし者也。

〇あらはにとぞつけたる——あらくしく遠慮なき故、あらはなる心にての異名なるべし。イ本あらはこそはあらはどのなどいふ詞也。こそはかしづく詞也。源氏夕顔に、右近の君こそとあるにおなじ。

〇さうなしのぬし、をはりうどのたね——すけただをうたへるたはれうた也。さうなしのぬしは、無左右二主にや。荒々しく左右をおもふ遠慮なき人といふ心なるべし。をはりうどのたねとは、尾張人の種也。此のすけただ尾張の兼時が

一是より又立ちかへりにくき物をいふ也
 二句
 三畏の字也、尊敬する事也
 四文詞のみならず、對談にも無禮なるはかたはらいたしき也
 五貴人なり
 六さやうになめけにいふはそごがましくにくしき也
 七文字也、詞といふも同心也
 八愛敬也
 九品めき也、しなやかなる事也
 一〇、嘲解、あざける事也

女のはらなれば也。イ本をはりそこは足下にや、其人をさしていふ詞也。
 ○そひさぶらひて——帝に高遠のそひまゐらせて也。イそひに侍ひては侍に也
 そばに候ふ也。

二十六

文ことばなめき人こそ、いとどにくけれ。世をなのために書きなしたる詞のにくきこそ。さるまじき人の許に、あまり畏りたるも、げにわろき事ぞ。されど、我得たらむはことわり、人の許なるさへ、にくくこそあれ。大方さし向ひても、なめきはなどかくいふらむと、かたはらいたし。ましてよき人などを、さ申す者は、さるはをこにて、いとにくし。男しうなどわろくいふ、いとわろし。我使ふ者など、「おはする」、「の給ふ」など云ひたる、いとにくし。こゝもとに、「侍る」と云ふ文字をあらせばやと、聞くことこそ多かれ。あいぎやうなくと、詞しなめきなどいへば、いはるゝ人も、聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり嘲解するなどいはるるまゝである人も、わろきなるべし。

○文ことばなめき人——無禮、輕同、人とかきかはす消息の詞の無禮なるといふ也。
 ○世をなのために書きなしたる——斜ナノメこゝにては、ないがしろなる心なるべし。

○さるまじき人のもとに——さやうに尊敬すまじき人へ、あまり慇懃なる文詞も尤わろけれど、先世をないがしろに書きなしたるこそ、我かたへ得たるに、にくきはことわり、猶人のもとへ、人のやりたる文の詞にても、なめきはにくくこそあれと也。よく心をつけて見るべし。
 ○をとしうなどわろく——從者の主君をそしるをにくむ也。
 ○我つかふものなど——主の從者をしかるとて、おはするの、の給ふのなどいふもにくしと也。
 ○こゝもとに侍るといふもじを、あらせばやと——彼の從者を、の給ふ、おはするなどいふ主の詞の中に、こゝもとには侍るといふ文字を、あらせたきと思ふ事おほきと也。清少のにくみあざけりていふ詞也。
 ○あいぎやうなくと、詞しなめきなどいへば——たとひ愛相もなき事をも、詞こはからずしなやかにいへば、其のいはれし人もさのみ腹たてず、きく人も聞きにくからで、ともにうちわらふと也。
 ○かくおぼゆればにや、あまりてうらうら——彼の詞品めきていへば、いはるゝ人も、きく人も、にくまでよしとおぼゆればにや、あまり物ごとに、しなめかしていふほどに、かへりてなぶりあざけるなど、人にいはるゝまでに、何事も

一 參議也、宰相以上を上達部といふ也
 二 つまね心也
 三 よからぬ心也
 四 さやうにはいはず也
 五 公達、攝家の子息、清華などをいふ也
 六 官也
 七 是も天子の御まへ也
 八 御前より外にて官をいはぬはにくし也

亦わろきなるべしと也。是彼我つかふ者をの給ふ。おはするなどいふ人の、にくきにつけていふなり。
 殿上人、宰相などを、ただ名乗る名を、いささかつましましげならざいふは、いとたはなるを、げによくさいはず、女房の局なる人をさへ、「あのおもと」、「君」など云へば、めづらかに嬉しと思ひて、響むることぞいみじき。殿上人、公達を、御前よりほかにては、つかさをいふ。又御前にて物をいふとも、聞しめさむには、などてかは、「丸が」など云はむ。さいはざらむにくし。かくいはむに、わろかるべき事かは。

○ただなのる名をいささか——殿上人、宰相などを、ただ人の其の名乗とよぶは、はばかり也、それをつましましづいふはよからぬを、さやうにはいはで、稱號、官などをよび、又女房をも、おもと、きみなといへばよろこびほむると也。御許オモト、おつぼねなどかしづきいふ詞也。君は猶かしづく詞也。

○御まへよりほかにては、つかさをいふ——是前に、只名のる名をつましましからざいふは、かたはなるとの詞を尺せる也。殿上人、公達などを、天子の御前ならでは、いづれも其の官をよぶぞと也。御前にては名乗をよぶべき歟。

○きこしめさむには、などてかは、丸がなどはいはむ——帝の聞し召す所にては殿上人、公達の我事を丸がなどは、いはぬ事ぞと也。至尊に憚る故也。是ら

も、皆詞なめきやうならぬ教なるべし。
 ○さいはざらむにくし——帝の御前にてこそ、殿上人、公達も、自他の物いひに憚りあれ、外にては亦名乗はいはで、官をいふべきに、詞なめき人の、さやうにいはぬはにくしと也。

○かくいはむに、わろかるべき事かは——殿上人、公達に官をいひ、女房をも御許君などいふこそよけれと也。是も詞の教なり。
 ことなる事なき男の、ひきいれ辭して、艶だちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする。ただなるだに、いとしも思はしからぬ人の、にくげ事したる。ひとり車に乗りて物見る男、いかなる者にかあらむ。やむことなからずとも、若き男どもの、物ゆかしう思ひたるなど、引き乗せても見よかし。透影に只一人かぐよひて、心ひとつに、まもりゐらむよ。

○ひきいれごゑして——源氏帚木に、いきの下に、引きいれといふに同じ。詞幽に由めきたるさま也。よき男こそあらめ、さしもなき男の、さやうなるはにくきと也。

○いかなる者にかあらむ——彼の一人車にのりて物見る男をさしていふ也。何者はしらねども、さまで我一人高貴めかずともとの心也。
 ○かぐよひて——赫羅也、我のみ榮耀がましく、一人物見ゐるらむよと也。案

一 さしてもなき男也
 二 艶也、みやびやかなる也
 三 墨をすますかたき硯にや
 四 にくげでさいはぬとてさして思はぬ男也
 五 にくげなる事也
 六 誰にてもあひのれかしの心也
 七 車の腰にすきさほりて見ゆるかゆ也

案

一懐紙、今の世のはながみなどなるべし
 二拍き渡る也、其のほごりさぐり尋ねるさま也
 三いづくへゆきけむあやしき事などいふ也
 四いさまごひする事也
 五如し同也、是も曉かへるをここのさまなり
 六是も名残をしひなくてにくし也
 七やがてなごいふ心也
 八イビ
 九思ふかたより歸りたりと見しるものもあらじ也
 一〇かへりうきさま也
 二男のさま也

ずるに、此の獨車にのりてといふより以下、奥の心づきなき物にもあり。
 曉に歸る人の、よべおきし扇、懐紙求むとて、暗ければ、探りあてむくと、叩きもわたし、「あやし」などうち云ひ、求め出でて、そよくと懐にさし入れて、扇引きひろげて、ふた／＼とうち使ひて、まかり申しこる、にくしとは世の常、いとあいぎやうなし。同じごと、夜深く出づる人の、烏帽子の緒強く結ひたる、さしも固めずともありぬべし。やをら、さながらさし入れたりとも、人の咎むべき事かは。いみじうしどけなう、かたくなく、直衣、狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて、笑ひ誇りもせむ。とする人は、猶曉のありさまこそ、をかしくもあるべけれ。わりなくしふしふに起きがたげなるを、しひてそよのかし、「明過ぎぬ。あな見苦し」など云はれて、うち歎けしきも、げに飽かず、物憂きにしもあらむかしと覺ゆ。指貫なども、居ながら着もやらず、先づさしよりて、夜ひと夜、いひつることの残りや、女の耳にいひ入れ、何業すとなけれど、帯などをば結ふやうなりかし。格子あげ、妻戸ある所は、やがて諸共に出て行き、晝の程のおぼつかなからむ事なども、云ひ出でてにすべり出でなむは、見おくられて、名残もをかしかりぬべし。名残も出所あり。いとときはやかに起きて、ひろめきたちて、指貫の腰強くひき結び、直衣、うへの衣、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帯強く結ふにくし。明けて出でぬる所たてぬ人いとにくし。

一男の心を、女のおもひやる心也
 二別れがたくするさま也
 三さざめくさま也
 四何事するさなけれども也
 五いひ／＼そろそろ出でゆくさま也
 六しづかに出づる也
 七戸など其のまゝあけてあるなるべし
 八あくればかへる事したるさま也
 九しとやかならぬさま也
 一〇ふさ／＼がみ、扇などなるべし

○曉に歸る人の——朝の名残はをしまで、ただ歸る用意のみするをにくめる也。
 ○さながらさしいれたりとも——ゑぼしの緒、其のまゝにて着たりとも、さして人のとがむべきにもあらじと也。
 ○かたくなく——頑の字也、いゝがたくななどと書きたるもおなじ心也、愚なる心也。
 ○とする人は——如此する人はとの心也、かの直衣、狩衣しどけなくして、名残をのみをしむ人はと也。
 ○しひてそよのかし——女の明けはてぬさきに、はやくおきいでよとしひるさま也、男のかへりかぬるさまをいはむとてかける詞也。
 ○なにわざすとなければ、おびなどをばゆふやう——名残をしめる間中のさま、おしはかるべし。
 ○やがてもろとも出でゆき——源氏總角に、に宇治の中君に匂宮のきぬぎぬに、「明けゆくほどのそらに、妻戸おしあけて、もろともにいざなひ出でて見たまへば」とあるさまなるべし。
 ○ひるのほどのおぼつかなからむ——是も夕顔に、けさのほど、ひるまのへだてもおぼつかなく、といへるさまなり。

一まへをさばりゆく事也
 二さふ人もあれかしと心うさく心也
 三案内して、さひくるけしきなる也
 四化粧也
 五香たきしめたる也
 六兩脚也

○見おくられて——女の見送る也、かやうに名残をしげなるこそ、女も見おくらるれ、前のまぼしのをかためて名残なきには、女も見送るべくもなし、との心也。
 ○なごりも出どころあり——かの名残なく出でゆく人は、あとも其の出でゆきし所あらはにありと也。
 ○あけていでぬる所たてぬ人——是も彼の名残も出所有りと、いひしに付けていふなるべし。

二十七

心ときめきするもの 雀の子がひ、乳兒遊ばす所の前わたりたる。よく焚物焚きてひとり臥したる。唐の鏡の少しくらき見たる。よき男の車とどめて、物いひあないせさせたる。頭洗ひけさうじて、香にしみたる衣着たる。殊に見る人なき所にては心のうちは猶をかき。待つ人などある夜。兩の脚、風の吹きゆるがすも、ふとぞ驚かるる。

○こゝろときめきする物——心のうごきいさむ心也。又むねさわぐをもいふ也。
 ○ちとあそばさる所の——兒を愛しむる所の、にぎははしきを聞きて過ぐるま

一二葉あかほなさをほなにてそめし也
 二絹のきれ也、後撰集の詞書にもあり
 三双紙也
 四月にむかへは、何さなく往時をおもふ物也、詩歌あまたあり

ま也。
 ○からのががみのすこしくらき——唐鏡也、いみじき鏡を、哀今少し明かなれかしと思ふこゝろなるべし。
 ○ことに見る人なき所にては——かやうにつくろひたてたるを見る人あれば、勿論心ときめくべきに、見る人なくとも也。
 ○ふとぞおどろかるる——兩風のおとにも待人のきたるか、心ときめきおどろかるる也。

二十八

過ぎにし方戀しきもの 枯れたる葵、ひよな遊の調度。二藍、葡萄菜などのさいてのおしへされて、草子のなかにありけるを見つけたる。又折からあはれなりし人の文、雨などの降りてつれづれなる日探し出でたる。去年のかはほり。月のあかき夜。

○かれたるあふひ——賀茂の祭の花々しきさま、物見の優なる事ども、おもひ出づるさまにや。
 ○ひよなあぞびの調度——わらはの時の事思ひ出づべし。
 ○えびぞめ——細流云、紫色のいと淺き也。前に出づ。

一車副の男也
 二清也
 三櫻紙也
 四齒黒也
 五調(タク)重(同)
 六賓(マラウ)客也

○こぞのかはほり——扇(カハ)、扇也。河海云、扇(カハ)を見て扇を作り初めける也。仍つて夏の扇の總名也。

二十九

心ゆくもの、よくかいたる女おんな繪の、詞をかしようつづけて多かる。物見のかへさに、乗りこぼれて、をのこともいと多く、牛よくやる者の、車走らせたる。白く清げなるみちのく紙に、いと細う書くべくはあらぬ筆して、文書きたる。川舟のくだりさま。齒黒のよくつきたる。てうばみて、てう多く打ちたる。うるはしき絲の練りあはせぐりしたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出てて咒咀の祓したる。よる寢起きて飲む水。つれづれなる折に、いとあまり陸まじくはあらず、疎くもあらぬまらうどの来て、世の中の物語。此の頃ある事のかしきも、にくきも、あやしきも、これにかゝり、かれにかゝり、公私、おぼつかならず、聞きよほどに語りたる、いと心ゆく心地す。社寺などに詣てて物申さするに、寺には法師、社にて禰宜などやうの者の、思ふ程よりも過ぎて、とどこほりなく聞きよく申したる。

○こゝろゆく物——世話に氣味よきといふ心也。

○をんなを——女のゑかきたる双紙なるべし。

○のりこぼれて——一車にあまたのりたる也。

○てうばみ——重食、調食、双六のあそび也。

○おんやうじ——陰陽師、おんみやうじ、伊勢物語にも、源氏物がたりにてもよみくせとする也。

○ずそのはらへ——咒咀の袂にや、人に職神おふせられたるのろはれたる事の、災難なきやうにと解除する也。中區袂を咒咀、怨敵、疾病、消除の袂と卜部の家に用ゐる類なるべし。

○これにかゝりかれにかゝり——兩説也。こゝにかゝりありし、かしこにかゝりしなどとかたる也。又此の事に懸り、かの事に懸り也。後の説近からむにや。

○物まうさするに——我ねぎ事を神佛に申さする也。

三十

鬚毛はのどやかに遣りたる。急ぎたるはかろがるしく見ゆ。綱代は走らせたる。人の門より渡りたるを、ふと見る程もなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならむと思ふこそをかしけれ。ゆる／＼と久しく行けば、いとわろし。牛は額いとちひさく、白みだるが、腹のした、足のしも、尾のすそ白き、馬は紫のまだらづきたる。鬚毛、いみじく黒きが、足肩のわたりなどに白き所、薄紅梅の毛にて、鬚尾なども

一藝の時のす車
 なれははしらか
 すがよしと也
 二車のまはる事
 也
 三毛色也
 四句

六句 五更毛
 七是より黒駒を
 いふ也
 八足
 九肩
 一〇毛
 一一髪
 一二尾
 一三牛飼、うしの
 舎人也
 一四赤白髪
 一五膝々、きつぎ
 したる也
 一六イニやせては
 そやかなる
 一七はそやかなる
 をいふ也
 一八イニおほゆ
 三〇髪の手そさは
 やかなる也
 三二こそ所は皆白
 き也

いと白きげにゆふかみともいひつべき。牛飼はおほきに、髪あかしらがにて、顔の赤みてかどくしげなる。雜色隨身はほそやかなる。よきをのこもなほ若き程はさるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからむ人と想はる。小舎人はちひさくて、髪ゆるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、かしこまりて物などいひたるぞりやうくじき。猫はうへのかぎり黒くてことは皆白からむ。

○びらうげはのどやかに——檳榔毛の車は東帯などの時乗用する車なれば、しづかなるがよき也。

○あじろは、はしらせたる——網代車、桃華葉云、衰之時召レ之。網代上白、袖如八簾如常下簾常花鳥餘情云、凡車は唐廂、檳榔毛車等は、みな檳榔を以てぶく。尼眉、半部、網代等は皆あじろをふけり。

○まだらづきたる——斑めきたる也。

○あしげ——蘆毛、白き駒なり。

○かみをなどもいとしろき——鬘、ふりがみ、尾なども白き馬也。身は黒き馬なるべし。

○ゆふがみども——黒駒を云ふ也。射恒集に、馬の毛を讀みたる歌の中に、ゆふがみ、懸すればやせこそすらめものよをゆふがみじかくおもほゆるかな。

○ざふしき——藏人所の雜色にかぎらず。諸家に召し具せらるゝもの也。

○ずるじん——本府の隨身、小隨身とてあり。これは羽林などの召し具せらるる小隨身なるべし。

○ことねり——河海抄云、小舎人は童の總名也。花鳥云、中少將の召し具する童を小舎人といふ也。

○りやうくじき——良々也、よき事を云ふ也。

○うへのかぎりくろくて——猫の背の分はみなくろくも也。

三十一

説經師は顔よき。つとまもらへたるこそ、その説く事の尊さも覺ゆれ。外目しつれば、ふと忘るゝに、にくげなるは罪や得らむと覺ゆ。この詞はとどむべし。少し年などのよろしき程こそ、かやうの罪は得がたの詞書き出でけめ。今は罪いとおそろし。

○説經師——法談などする僧なり。

○外目——よそ目するとおなじ。顔にくげなる僧は顔を見ぬから説く事をもわするゆるゑ、顔にくげなる僧は罪えむと思ふと也。

○としなどのよろしき程こそ——若き程こそ法師の顔よきは、顔守らるゝなどやうの罪、えぬべきかたの詞も書き出でけめ、今年老いて後には、罪おそろ

一顔よきはつと
 まもりぬるゆゑ
 也
 二イひがめ
 三顔を見ずして
 説く事をもさか
 ねは其の罪や得
 む也
 四法師の顔よき
 を好む詞はやめ
 む也
 五若きはをい
 ふ也

説經師は顔よき。つとまもらへたるこそ、その説く事の尊さも覺ゆれ。外目しつれば、ふと忘るゝに、にくげなるは罪や得らむと覺ゆ。この詞はとどむべし。少し年などのよろしき程こそ、かやうの罪は得がたの詞書き出でけめ。今は罪いとおそろし。

一 是より彼の説
 經師の事につけ
 ての蓋すまじ也
 二 最初也
 三 前にもみやう
 らむさいふをう
 けて也
 四 供養(クア)の
 時馬にて前驅
 (ゼンク)する事
 也
 五 藏人にて有り
 し年程は也
 六 藏人ありて後
 も禁中へめしつ
 かふ也
 七 藏人なりし時
 のやうにはなし
 也
 八 説經の所へ最
 初にゆくなるべ
 し
 九 説法聽聞しそ
 めし也
 十 藏人の五位が
 心也

しきと也。

又尊き事、道心おほかりとて、説經すといふ所に、最初に行きぬる人こそ、猶此の罪の心地には、さしもあらで見ゆれ。藏人おりたる人。昔は御前などいふ事もせず、その年ばかり、内わたりには、まして影も見えざりける。今はさしもあらざめる。藏人の五位とて、それをしもぞいそがしう仕へど、猶名残つれづれにて、心一つはいとまある心地ぞすべかめれば、さやうの所に急ぎ行くを、一たび二たび聞きそめつれば、常にまうてまほしくなりて、夏などのいと暑きにも、かたびらいとあざやかに、薄二藍、青にぶの指貫など、踏み散らして居たためり。烏帽子に物忌つけたるはけふさるべき日なれど、功德の方にはさはらずと見えむとにや。急ぎ來て、その事するひじりと物語して、車立つるさへぞ見入れ、ことにつきたるけしきなる。久しくあはざりける人などのまうて會ひたる、珍しがりて、近く居より、物語し、うなづき、をかしき事など、語り出でて、扇ひろうひろげて、口に當てて笑ひ、装束したる珠簾かいまさぐり、手まさぐりにし、此方彼方うち見やりなどして、車のよしあし賞め誇り、何がしにて、其の人のせし入講、經供養などいひくらべ居たる程に、此の説經の事も聞き入れず。何かは、常に聞く事なれば、耳馴れて、珍しう覺えぬにこそはあらめ。さはあらで、講師あてしはしある程に、さき少し追はする車とどめておる人、扇の羽よりも輕げなる直衣、指貫、生絹の單衣など着たるも、狩衣姿

一 藏人の五位が
 さま也
 二 薄二藍
 三 青鈍
 四 居たる也
 五 物性總夢など
 つ、しむべき日
 なれど、佛事功
 徳の事には參り
 たるも、信心の
 さまを見せむこ
 にやま也
 六 けふ説教する
 僧也
 七 玉外より參る人
 の車に目をつく
 る也、さへの字
 にて事ごに目
 をつけたる心あ
 り
 八 是も五位がさ
 ま也
 九 元金銀珠玉のか
 ざりしたる珠簾
 也
 十 イに
 三 彼の聞き入れ

にても、さやうにて若く細やかなる三四人ばかり、さぶらひの者、又さばかりして入れば、もと居たりつる人も、少しうち身じろぎくつろぎて、高座のもと近き、柱の許などにすゑたれば、さすがに、珠數おしもみなどして、伏し拜み居たるを、講師もはええしう思ふなるべし。いかで語り傳ふばかりと説き出でたる、聽聞すなど立ち騒ぎ、ぬかづく程にもなくて、よき程にて立ち出づとて、車どもの方など見おこせて、われどちいふ事も、何事ならむと覺ゆ。見知りたる人をば、をかしと思ひ、見知らぬは、誰ならむ、それにやかれにやと、目をつけて思ひやらるゝこそをかしけれ。

○ たふとき事だらうしんおほかり——此の僧はたつとき事もおほく、道心もおほきとて、道場をかまへ説經するを聞きに行く也。
 ○ さしもあらで見ゆれ——さしもなき事と見ゆると也。我つみふかき心には、さやうに最初にゆかでもあれかしと見ゆるとの心也。此の次の藏人おりたる人の事をいはむとて也。
 ○ 藏人おりたる人——六位藏人、四ヶ年ののち巡爵にあづかりて、地下におりたる人也。六位も藏人は殿上する也。五位に成りても藏人をさりては、地下におるゝ事也。
 ○ 藏人の五位——藏人ならねども、藏人よりかうぶりえたるを、藏人の五位と

ぬ蔵人五位が事を清少のおしはかる地の詞也
 三法師の禮堂、倚子などに着きてしはしある事也
 三其の出でたちなるは若き人々にてさ也
 三侍ひじも也
 三説經の座に入り來る也
 三もさより聽聞してあし人も也
 三動也、彼の人人をいれむさて、身をよけたるさま也
 三彼の人々をおく也
 三法師、説經圖をいふ也
 三世にもいひ傳へらる、はじにさ心さめて説法する也

て規模とする也。職原抄云、六位蔵人四人、重代諸大夫中不_ニ放埒_一有_ニ器量_一之輩_ニ補_レ之_一、地下諸大夫多以_レ是爲_ニ先途_一、雖_ニ五位以後_一、以蔵人五位爲_ニ規模_一之故也云々。

○うすふたある——薄二藍、花鳥云、夏の直衣のいろ也

○あをにぶ——青鈍、弄花抄云、花田に青けのまじれる也。

○おぼしに物いみつけ——河海云、昔は忍草に物忌を書きて、みすにも冠にもさしける也。事なし草と云ふにつけて也。又云、柳の枝を三寸ばかりに筒に作りて、御冠の縷に付けらるる云々、是は禁中の事也。此の蔵人の五位は烏帽子に付けし也。

○かいまさぐり手まさぐり——念珠かいつまぐるさま也。

○何がしにて其の人のせし——そんでう其所にて、其の僧のおこなはれし八講あるひは經供養などいひ出でて、たふとさをくらぶるさま也。八講は法華經の要文を問者の問ひかくるを、講師の一々答へ講ずる事也。一日に八座の故八講といふ也。經供養とは、何の經にても書寫して、其のために佛事をなすをいふ也。

○みまなれてめづらしう——前にも、一たび二たび聞き初めつれば、常にまうでまほしくなりてとあり。聽聞に耳馴れて、珍しくも覚えぬかと也。

○さはあらで——此の蔵人五位がさまにはあらでと也。この次に、車のさきおはせてきたる人々の事はむとていへり。

○せみの羽よりもかるげなる——うすく清らなるさま也。又蟬の羽衣と、首夏の歌などにあまたよめり。うらのなきすずしの總名と、桃華蕊葉に有り。

○又さばかりして——それほどといふ詞也。侍をも三四人ばかりめしつれてとの心也。

○さすがにずおしもみなど——此の三四人の人々は説教聽聞ばかりにはあらで物のついでなどに、立ちよりたるさまながら、さすがに道場の禮儀をなしたるさま也。

○はえばえしう——榮々ハエ、歴々と見ゆる人の入り來たれば、かひありて思ふ心也。

○ちやうもんすると立ちさわぎ——説法すみて、聽聞の人々立ちさわぎ、禮拜するに、さやうにあらで、いまだ説法終らぬほどに、此の三四人の退出と也。

○見しりたるをば、をかしと思ひ——是より彼の三四人のありさまにつけて、説經に参りての興をいふ也。参詣の人々の見知り、見しらぬを見やり、思ひやるも逸興と也。

「説經しつゝ八講しけり」など人云ひ傳ふるに、「其の人は有りつや」、「いかかは」

三法師也
 三三四人のさま也、他の車ごもを見おこす也
 三是も三四人のおのがぢち物いふ也
 三同清少なごの心なるべし

三前に註す
 四直衣のうすき
 にすきとほりし
 也
 五若からぬ上達
 部也
 六前に註す
 七わかいいものめ
 きたる心也
 八八調のたふさ
 きのみならずこ
 也
 九長押
 一〇居及び給へる
 さま也
 一一狩衣也
 一二其の八調をさ
 りもち給ふさま
 也

にて、暑き事世に知らぬ程なり。池の蓮を見やるのみぞ、少し涼しき心地する。左
 右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣、指貫、浅黄の帷
 子をぞ透かし給へる。少しおとなび給へるは、青にびの指貫、白き袴も涼しげな
 り。安親の宰相なども若やぎだちて、すべて尊きことの限にもあらず、をかしく物
 見なり。廂の御簾高く巻上げて、長押の上に、上達部奥に向ひて、ながながと居給
 へり。其の下には殿上人、若き君達、狩装束、直衣などもいとをかしくて、居も定
 まらず、こゝかしこに立ちさまよひ遊びたるも、いとをかし。實方の兵衛の佐、な
 があきらの侍従など、家の子にて、今すこし出て入りたり。まだ童なる君達など、
 いとをかしうておはす。

〇小しら川

〇小一條大将——師忠公也、前に小一條左大臣といひしとおなじ人也。

〇露とともに——晴露とともに起き出でて参りたれば、参詣の車、まことに隙
 なく立ち及びしと也。

〇みつばかりまでは——庭にたておきし車の、第一の車、第二、第三の車など
 までは、講のきこゆべしと也。

〇六月十餘日——みなづきとをかあまりとよむべし。是寛和二年の六月なるべ
 し。此の次に義懐の出家の事あり。

〇左右のおととを——此の時の左大臣は源雅公、右大臣は藤原の兼家公などに
 や。

〇やすちかの宰相——藤原安親卿、山陰の中納言の孫、從四位上攝津守仲正の
 三男、永延元年十一月十一日参議に任ずる由公卿補任に見ゆ。長徳二年三月六
 日卒六十七歳。

〇わかやぎだちて——安親卿、寛和二年の頃は五十七歳なれば、老人ながら、
 装束は若やぎてまゐりたまひしと也。

〇さねかたの——藤原實方、小一條左大臣師尹公の孫、侍従貞時の男、母は左
 大臣雅信公の女。

〇ながあきら——未考、是も小一條の家の子と見えたり。

少し日たけたる程に、三位中將とは、關白殿をぞ聞えし、香のうす物、二藍の直衣
 同じ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張りたる白き單衣の、いと鮮やかなるを着給ひて、
 あゆみ入り給へる、さばかり軽び涼しげなる中に、あつかはしげなるべけれど、い
 みじうめてたしとぞ見え給ふ。細塗骨など、骨はかはれど、ただ赤き紙を、同じな
 みにうち使ひ持ち給へるは、瞿麥のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。また
 講師ものぼらぬ程に、懸盤どもして、何にかはあらむ物まるべし。義親の中納言
 の御有様、常よりも勝りて、清げにおはするさまぞ、限なきや。上達部の御名など

ニ懸盤
 三此の後出家し
 給ふ事いはむさ
 て先づかく書く
 也

四句 五始こそ誰とし
 六 始こそ誰とし
 七 始こそ誰とし
 八 始こそ誰とし
 九 始こそ誰とし

書くべきにもあらぬを、誰なりけむと、少し程ふれば、色合花々といみじく、句
 辭かに、いづれともなき中の帷子を、これはまことに、ただ直衣一つを着たるやう
 にて、常に車のかたを見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人な
 りけむを。

○三位中將とは關白殿をぞ——中關白道隆公也、大入道兼家公の男、母は攝津
 守藤原仲政女、圓融院の永觀二年正月七日に従三位 中將源元一條院の永祚二年
 三月八日に關白し給ふ。

○さばかりかるびすずしげなる中に——外の上達部は淺黄の帷子をすかし白き
 袴など涼しげなる中にも、道隆公の出立あつかはしからためたしとなり。
 ○ほそぬりほねなど——細塗骨也、扇のほねはさまざまなれど、地紙はいづれ
 もあかき也。

○よしちかの中納言——藤原義懷卿は一條攝政伊尹公の男、母は代明親王の女、
 惠子女王也、花山院の寛和二年に權中納言從二位公卿補任。

○上達部の御名など、かくべきにもあらぬを——義懷卿の名をあらはせること
 わりをいふ也、いづれも花々とあざやかに、いづれともなければ、誰ともわか
 れぬに、此の人の帷子を着こめて、直衣ばかり着たまへるやうにて、車など見
 やり給ひしさまをしるさむとて、書き出でしとの心也。

一 是も女車也
 二 句
 三 よしちかの見
 給ふ也
 四 よしちかの詞
 也
 五 かの女車に何
 事、いひやらむ
 六 よしちかの近
 邊の人々に談合
 也
 七 先使のさまを
 笑ひ給ふ也
 八 使の男車の跡
 によりていふ也
 九 よしちかの實
 方への給ふ詞也
 一〇 返歌を用意せ
 よ也
 一一 おさなき也
 一二 鞍の女車のか
 たを也
 一三 見もをか
 三見のへるに
 一四 車より使を上
 ぶ也

○見ぬ入なかりけむを——句をきるべし。

後に來たる車の、ひまもなかりければ、池にひき寄せて、立てたるを見給ひて、さ
 ねかたの君に、「人の消息つきづきしくいひつべからむ者ひとり」と召せば、いかな
 る人にかあらむ、えりてゐておはしたるに、いかがいひ遣るべきと、近く居給へる
 ばかりいひ合はせて、やり給はむ事は聞えず。いみじくよそひして車のもとに歩み
 よるを、かつは笑ひ給ふ。あとの方によりていふめり。久しく立てれば、「歌など
 詠むにやあらむ兵衛佐返し思ひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事聞かむと、お
 とな上達部まで、皆そなたさまに見やり給へり。げに顯證の人々まで見やりしも、
 をかしうありしを、返事聞きたるにや、少し歩み來る程に、扇をさし出でて呼び返
 せば、歌などの文字を、いひ誤りてばかりこそ呼び返さめ、久しかりつる程に、あ
 るべき事は、直すべきにもあらじ物をとぞ覺えたる。近く参りつくも心もとな
 く、「いかに」と、誰も問ひ給へどもいはず。權中納言見給へば、そこにより
 て、けしきばみ申す。三位中將、「とくいへ。あまり有心過ぎて、しそこなふな」
 との給ふに、「これもただ同じことになむ侍る」と云ふは聞ゆ。藤大納言は人より
 もけにのぞきて、「いかがいひつる」との給ふめれば三位中將、「いと直き木をなむ
 おし折りためる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何となく、さとわらふ聲聞え
 やすらむ。中納言、「さて呼び返されつる先には、いかがいひつる。これや直した
 る也」

一八講の御座の
講師也
二清純也、説教
無双の大地

恒徳公。
○まほき木をなむ——すなほにいふべき事を曲節マヨヒなしたるをあざけり給ふ詞也。彼のなほき木に、まがれる枝もあるものと、讀ヨミみし詞をかり用ゐていへり。

○さてよびかへされつるさきには、いかがいひつる——彼の使のかへりしを、女車よりよびかへさざりし已前には、何と返事せしぞと問ひ給ふ也。はじめ使の只歸りしを、一度返事聞きてかへりしと、見給ふゆゑにかくの給ふ也。

○ともかくも侍らざりつれば——あまり返事を案アンじ煩ワザワザひて、久しくなりゆゑ使の只かへりしよしを申す也。

○こきひとへがさね——かの女の裝束なり。濃紅なるべし。

○しりにすりたるも——あとにひきたる裳のすそ也。

○かたほならむ事よりは——孟津、綱ツナ流リウ云、かたほは頑ツツなる也。おろかなる也。ほの字すみてよむべし。此の女車の返事のなほき木をまげたるを批判也。なまじひにかたくなしき曲節あらむよりは、只事にてげにときこえたるが、かへりてよしとの心也。

朝座アサの講師コウシ清純セイジュン、高座カウザの上も光り満ミちたる心地ココロして、いみじくぞあるや。暑アツさのわびしさにそへて、しらすまじき事の、今日ケフ過スくすまじきをうちおきて、ただ少し聞

三清少けふ必ず
果すべき用事や
も、うちおきて
まゐりし也
四敷並也、物を
しきならべたる
やうに車のつぎ
ひし也
五清少也
六朝座果てたら
は也
七我車をす、め
よらむ事をよる
こびて也
八後の車を引き
出で清少を出た
也
九上達都なぞ見
給也
一〇かしましきは
清少の出づる
を何かとの給ふ
也
一一老也
一二清少也
一三こたへもせで
也
一四せは、所を引

きて歸カヘりなむとしつるを、しきなみにつどひたる車の輿ウになむ居イれば、出づべきかたもなし。朝の講果コウカなば、いかで出でなむとて、前なる車どもに消息ソウシキすれば、近チカく立たむうれしさにや、はやばやと引き出であけて出すを見給ふ、いとかしがましきまで、人ごといふに、老上達都オウジョウダツトさへ、笑ワラひにくむを、聞きも入れず、いらへもせで、せばかり出づれば、權中納言ゴンチュウノクワン、「や、まかりぬるもよし」とて、うち笑ワラひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑アツきにまどひ出でて、入して、「五千人の中には、入らせ給はぬやうもあらじ」と聞えかけて、歸り出でにき。

○せいはん——勘物カンモノ云、清純セイジュン法ホウ、相宗サウシュウ、播磨國人、號ナリ清永律師セイエイリッシ、長徳四年權律師チヤウトクニシ云々。興福寺の法相宗にて、空晴僧都の法孫寺朝ホウソクジテウ已講イコウの上足、説法無双にて文珠の化身と、東齋隨筆トウサイズイヒツにあり。

○まへなる車どもに——清少出でなむとて、我通り出づべき道の車に、案内いふ也。

○おいかむだちめ——老上達都也、前に、おとなかむだちめといへるにおなじ。

○や、まかりぬるもよし——や、は漸也。まかりぬるもよしは、退りぬるも佳也。此の心は清少の朝座のみ聞きて出づるを、法華經の方便品に、釋迦如來開三顯一の御法を、とき給はむとする時、五千人の曾上ソウジョウ慢マンの輩、法座を起ちて退

き出づるさき也
 一五よしちか也
 一六漸也
 一七法華經を思ひよせ給ふをほむる也
 一八清少のさきもいれず也
 一九清少より使をしてよしちかへいひやり也
 一八清のはじめより也
 二是亦他の女車也
 三雜物いひにより來るも見えぬ也
 四物也。うごかぬ心也
 五清少の間ひしにや
 六爲光公也
 一義懷卿也
 二落花はよのつねにてをしむに

きしに、如來默然として制止給はで、舍利佛に、如是増上慢人退亦佳矣との、給ひしことになぞらへて、よしちかのいへる也。
 ○五千人の中にはいらせ——彼のまかりぬるもよしと、の給へるによりていへる詞也。此のあつさにはよしちかも、退出し給はむぞとの心なり。彼の方便品の法座をたちし千人の事也。
 その始より、やがて果つる日まで、立てる車のありけるが、人寄り來とも見えず。すべてただあさましう、繪などのやうにて過しければ、ありがたくめてたく、心にくく、いかなる人ならむ、いかで知らむと、問ひけるを聞き給ひて、藤大納言、「何かめてたからむ。いとにくし、ゆゑしき者にこそあなれ」との給ひけるこそをかしけれ。
 ○何かめてたからむ。いとにくし——始中終たちきらぬとて何のよき人ならむと也。中納言のまかりぬるもよしと、清少をの給ひし首尾なるべし。
 さて、その廿日あまりに、中納言の、法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも、猶世の常なりや。「老を待つ間の」とだに云ふべくもあらぬ、御ありさまにこそ見え給ひしか。

○其のはつかあまりに、中納言のほうしに——是寛和二年六月廿餘日に、花山院出家せさせ給ひし御供に、義懷卿も法師に成り給ひし事也。袋双紙云、花山

たらず、此の人こそをしけれ也

一ねおきて見るには、有明一しほなるべし
 二是よりある女のさき也、夜をあかしたるさまをいふ也

院御時中納言義懷は、外戚、惟成等は近習の臣にて、各天下の權を執る。しかるに院ひそかに内裏を出でて、花山にみゆきして、出家し給ふ。兩人閉き出でて追ひて參上す。院は已比丘となり給ふ。惟成もどりをきる。又義懷に語りて云、外戚と有りて權を執りておはしけるに、更に外人となりて、世間の衆にまじはる事見苦しかるべし。早く出家し給へ。義懷これを存ずる由を稱して、同じく出家す。人の教訓によりてしたればいかかと、世人思ひけるに、始終尊くて過ぐと云々。飯室に住みてよめる歌也。「見し人もわすれのみする古里に心ながくも來たる春哉」此の事榮花物語、大かがみ等にもあり。
 ○老をまつまのとだに——義懷の出家は、卅歳ばかりにて老に遠ければ也。引歌あらむか。未勘。

三十四

七月ばかり、いみじく暑ければ、よろづの所開けながら、夜もあかすに。月の頃は、寝起きて見いだすも、いとをかし。闇も亦をかし。有明、はたいふもおろかなり。いと艶やかなる板の端近う、鮮やかなる疊ひとひら、かりそめにうち敷きて、三尺の几帳、奥の方に押しやりたるぞ、あぢきなき。端にこそ立つべけれ。奥のうしろめたからむよ。人は出でにけるなるべし。薄色の裏いと濃くて、上は少しかへ

一 一枚也
 二人に逢ふさて
 かりにかまへた
 るさま也
 五イミに
 六句
 七 彼の男は歸り
 しと也
 八 きぬに髪を着
 こめてふしたる
 さま也
 九 香染
 一〇 とき也
 二 腰の紐の長さ
 也
 三 三ふしたるかた
 ばらに也
 四 三かの女の髪
 た、まれわがり
 たる也
 五 四ゆる／＼と長
 きさま也
 六 五彼の男の衣裳
 也
 七 天色のうき心
 也
 八 モイニとはずに

りたるならずば、濃き綾の艶やかなるが、いたくは萎えぬを、かしら籠めて、引
 着てぞ寝ためる。香染の單衣、紅のこまやかなる生絹の袴の腹いと長く、衣の下よ
 り曳かれたるも、まだ解けなからなめり。側の方に、髪のうちたゝなはりて、ゆら
 らかなる程、長さおしはかられたるに、又何處よりにかあらむ、朝ぼらけの、いみ
 じうきり満ちたるに、二藍の指貫、あるかなきかの香染の狩衣、白き生絹、紅のい
 と艶やかなる打衣の、霧にいたく濕りたるを、脱ぎ垂れて、髪は少しふくだみたれ
 ば、烏帽子のおし入れられたるけしきも、しどけなく見ゆ。朝顔の露落ちぬさきに
 文書なむとて、道の程も心もとなく、「をふの下草」など、口ずさびて。我方へ行
 くに、格子のあがりたれば、御簾の側を、いさゝか開けて見るに、起きていぬらむ
 人もをかし。露をあはれと思ふにや。しばし見たれば、枕かみの方に、衾に紫の
 紙はりたる扉、ひるごりながらあり。みちのくに紙の疊紙の、細やかなるが、花か
 紅か、少し匂うつりたるも、几帳のもとに散りほひたる。

○ 七月ばかり——七月のころの残暑也。是より別の筆ずさび也。
 ○ いとつややかなるいたの——板縁の清きをいふ也。
 ○ おくのかたにおしやりたるぞあぢきなき——几帳は女の形かくすためなれば
 はしにたつべき物を、おくにはあぢきなくまさなきわざと也。是忍びたる男を
 傍輩などに見せじのためなるを、あやしむ詞也。

こそあらめつや
 やかなるが露に
 一尺しどけなきさ
 ま也
 二 五彼のうけた
 る也
 三 三師さの道すが
 らも、早く文や
 らまほしくおも
 ふさま也
 四 三男の家路にゆ
 く也
 五 三女の局の格
 子也
 六 三男のみる也
 七 三男の心也後の
 格子の上りたる
 は、たれぞおき
 てゆくにやとお
 もふ也
 八 三イミ人
 九 三是も男のみる
 也
 一〇 三彼女の枕のほ
 そり也
 一一 三イニはぞの木

○ おくのうしろめたからむよ——あやしく奥を氣遣ふ事よ。只事にあらじとふ
 くめたる詞也。
 ○ うすいろの——おもては紫のうす色に、うらははこき紅のすこしうはじらけし
 たる心也。此の出たちか、又こき紅の綾などいへる文章也。此の文法おくにも
 所所あり。
 ○ まだとけながらなめり——彼の忍びたる男の歸りこも、まだ紐などひきしめ
 つくろはぬほどなるべしとなり。うちとけふしたるまゝなるべしと也
 ○ 又いづこよりにかあらむ——又他の男の、外より歸りきたるさま也、殿上人
 などのとのみ所より忍びゆきての、其の歸さなるべし。
 ○ 紅のいとつややかなるうちぎぬの——よくうちてつやある也。イ本紅のとほ
 すにこそあらめとは、白きすずしの下にかさなれる紅のすきとほりたるにや。
 つややかに色の見えたるどの心なるべし。
 ○ あさがほの露おちぬさきに文かかむとて——此の男も忍び所より歸るさまなる
 に、早く後朝の文かかむと、おもふさま也。餘情面白き詞なるべし。
 ○ をふの下草など——新勅撰、「櫻麻のをふの下草露しあらば明してゆかむ親
 はしるとも、」此の歌萬葉には、露しあれば明していゆけ母はしるとも、と下句
 あり。然れども此の草紙にては、あかしてゆかむといへる心よくかなふべきに

元林の木の骨に
紫の地紙也
三三置紙也
三赤はな紅
か、すこし色
かはりし也

一形勢、彼の男
の見るけしき
を、女のあやし
み見たる也
二男のさま也
三女の心也、恥
づかしき人には
あらず知りたる
人なれども也
四隔心なる男な
るべし
五男の詞也
六腕の中也
七男の半身也
八女の答也
九草子の地也、
かやうの事書く
べきにもあらぬ
さへにくからぬ
けしきもなれ
はさ也

や。朝顔の露を見て、思ひよりしくちずさびなるべし。

○露を哀と思ふにや——我が露を憐みて、をふの下草と口ずさびなどせし心よ
り、彼のおきていぬらむ人も、露を哀と思ふにやと、おしはかる也。

○ちりぼひたる——墨紙のおち散りて有りし也。是迄男の見しありさま也。

人のけはひあれば、衣の中より見るに、うち笑みて長押におしかり居たれば、恥
ぢなどする人にはあらねど、うち解くべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬ
かなと思ふ。「こよなき名残の御あさいかな」とて、簾のうちになからばかり入り
たれば、「露より先なる人のもどかしさに」といらふ。をかしき事、取りたてて書
くべきにあらねど、かくいひかはすけしきども、にくからず。枕がみなる扇を、我
持ちたるして、及びてかき寄するが、あまり近う寄り来るにやと、心ときめきせら
れて、今少し引き入らるる。取りて見などして、「疎くおぼしたる事」など、うちか
すめ怨みなどするに、あかうなりて、人の隣々し、目もさし出でぬべし。霧の絶間
見えぬ程にと急ぎつる文も、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる人も、いつ
の程にかと見えて、萩の露ながらあるに付けてあれど、えさし出でず。香のかの、
いみじうしめたる匂いとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でて、我來
つる所もかくやと、思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

○ねたうも見えぬるかな——此の男に見られたるを悔める女の心也。

二句
二及びかかりた
る也
三女のことろ也
三イひきぞくだ
らるゝ
四扇を男のさり
て見る也
五男のうらみた
る詞也
六はのいひたる
也
七夜明けはなれ
しさも也
八いつのまにか
文かきざりつく
ろひしぞさみえ
て也
九文をつけたる
也
三香のか也
三事のほかにあ
かく成りて人め
はしたなき心也
三枝の男の出づ
る也

○こよなきなごりの——無越コヨナキ事の外と也。今夜遙ひ語らひあかし給へる
名残に、朝寝の事の外なると也。ざれたる詞也。

○つゆよりさきなる人の——此の男の忍び所より早くかへるを、とがめたる詞
なり。露よりさきにおき出でし人のもどかしさに、我はかく朝寝久しくするこ
となり。

○我もちたるして、およびて——男の持ちたる扇にて、彼のひろごりたるあふ
ぎを、及びごしにかきよする也。

○あまりちかうよりくるにや——男のおよびかゝりて近づきよるにやと、女の
むねさわぐと也。

○いますこしひきいらるゝ——女のひきいりて用意せらるゝ也。前にうちとく
るべき心ばへにもあらぬと、男をいひし首尾也。イ本ひきぞくだらるゝとは、
引きしりぞかるゝ心なるべし。

○霧のたえま見えぬほどにと——前に、朝がほのつゆおちぬさきに文かゝむと
ありし首尾也。さやうに急ぎし文も、此の女と、かやうにたはぶれてたゆみぬ
るは、げに此の男の心うしろめたしと也。是うちとくべき心ばへにあらぬこゝ
ろなるべし。

○出でぬる人もいつのほどにかと見えて——是は前に、人は出でにけるなるべ

しとありし人の事也。此の女のこよひあひかたらひし男也。そのをとこのもと
 よりも、いつのほどにか、書きおこせつらむと見えて、後朝の文を裁につけて
 あれど、此のをとこのかくてあれば、えさし出でぬと也。
 ○我きつるところもかくやと——此のをとこの、只今出でかへり來たる女のか
 たも、此の所のやうにあらむと、おもひやらるるもおもしろからむと、清少の
 おしはかりたる詞也。

春曙抄二終

枕草子春曙抄 卷三

三十五

木の花は、梅の、濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲
 きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめてたし。卯の花は、品劣り
 て何となけれど、咲く頃のをかしう、郭公の陰に隠るらむと思ふにいとをかし。祭
 のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う
 咲きたるこそをかしけれ。青色の上に、白き單重かづきたる、青朽葉などにかよ
 ひて、いとをかし。四月のつごもり、五月のついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青き
 に、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさま
 にをかし。花の中より、實のこがねの玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたる
 など、朝露に濡れたる櫻にも劣らず。郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更に云ふ
 べきにもあらず。

○梅のこくもろすくも——濃紅梅、薄紅梅也。
 ○葉いろいとこきが——櫻の葉の赤き事也。

一梅櫻藤などには位おどりたる
 二賀茂祭也、奥に車に卯花を折りかざしたる事などあり
 三いやしき晴が屋也
 四うほら也
 五卯花也
 六似かよひたる也
 七葉色の濃青也
 八早朝也
 九イ春のあさほらけの櫻にもさあり
 一〇より所といふ心也、橘に子規のやむる事歌にあまたあり

一もてはのさね
草也

○藤の花しなひながく——伊勢物語に、花のしなひ三尺六寸ばかりといへるたぐひなり。

○郭公のかげにかくるらむ——新古今人丸のうた、「なくこゑをえやは忍ばぬほととぎす初卯花のかげにかくれて。」

○おどろなるかきね——荊蕀などの垣也。

○あをいろのうへにしろきひとへがさね——おどろの垣の青きに、卯花の白きをたとへし也。あを色とは麴塵也。かりやすと、むらさきとあくをさすなど、一條禪閑の御説也。

○あをくちばなどに——

青朽葉、おもて青丹の黒みあり、うらは青しと桃花葉葉にあり。

○橘のこくあをき——葉の濃青也。楚辭橘頌云、綠葉素榮。

○みのこがねの玉かとみえて——橘は花に實をぐしてある物也。朗詠盧橘詩、

枝繁金鈴春雨後、花薰紫麴凱風程。この詩にてかけり。雨のふりたるつとめてなどといへるも、春雨後の心也。

○更にいふべきにもあらず——猶今更ことあたらしく、ほむべきにもあらずと也。

梨の花、世にすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文附けなどだにせ

ニ是も和國の黒
梨をいふにや
三梨花のやうな
るこいふ也
四只白くすけな
き心にや
五愛なく也
六詩也、梨花の
詩あけていひが
たし
七仔細あらむこ
て心とめてみる
也
八しひて也
九すこし赤き事
也
一〇あるかなきか
にうすき心也
一一橋欄にあらざ
れはすますまい
へり
一二橋の事也
一三せんたんの木
の事也
一四いかれ葉に
(不用)

す。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、げに其の色よりして、あ
いなく見ゆるを、もろこしに限なき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやう
あらむとて、せめて見れば、花びらの端に、をかしきこそ、心もとなくつきため
れ。楊貴妃、帝の御使にあひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝春雨を帯びた
り」など云ひたるは、離げならしと思ふに、猶いみじうめてたき事は、たぐひあら
じと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるは、猶をかしきを、葉のひろこり、さまうた
てあれども、又こと木どもと、等しう云ふべきにあらず。もろこしに、ことごとし
き名附きたる鳥の、これにしも酒むらむ、心ことなり。まして琴に作りて、様々な
る音の出でくるなど、をかしとは世の常に云ふべくやはある。いみじうこそはめて
たけれ。木のさまにくげなれど、棟の花いとをかし。かれ花にさまことに咲きて
必 五月五日にあふもをかし。

○なしの花世にすさまじく——梨花は唐には賞すれど、我朝には梅、櫻などや
うにはもてあそばねば、さして詩などにも和國にはつくらねば、文つけなどだ
にせずといへるにや。

○やうきひみかどの御使にあひてなきけるかほ——これは長恨歌にある事をい
へり。楊貴妃すでに馬嵬のちりと成りて、玄宗皇帝歎に堪へ給はで、臨印の道
士を使として、其の魂魄を求め給ふに、蓬萊に至りて、貴妃に尋ねあひて、帝

の消息を傳へしに、貴妃泪をこぼせし事を、玉容寂莫淚欄干、梨花一枝帶春雨、と白樂天のつくりし事也。

○桐の花むらさき——白氏文集二云、答三桐花一詩、花紫葉青々。

○もろこしに、ことごとしき名つきたる鳥——鳳凰也、格物論云、鳳、瑞應鳥、大平之世則見、其形鷄頭蛇頸燕頤龜背魚尾、五彩色、高六尺許、非梧桐不栖、非竹實不食云々。

○まして琴につくりて——毛詩云、梧桐梓漆、爰伐琴瑟、文選十八、嵇叔夜琴賦云、惟梧桐之所生兮託峻嶽之崇岡、至人擄思、制爲雅琴、中略記之。

○かれはなに——花のこまかに開なる心にや。

○五月五日にあふも——拾芥云、證類本草云、五月五日俗人取三桮葉一佩之避二惡氣、今も田舎には端午に、せんだんを軒にかざす事あり。

三十六

池は 勝間田の池。盤余の池。にへ野の池、初瀬に参りしに、水鳥の隙なくたち騒ぎしが、いとをかく見えし也。水なしの池、「あやしうなどて附けるならむ」と云ひしかば、「五月など、すべて雨いたく降らむとする年は、此の池に水といふ物なくなむある。又日のいみじく照る年は、春のはじめに、水なむ多く出づる」と

一一二二呼々也

二日のてる年は水出づる也
三こたへたがりし也
四大和也
五所未勸
六八雲、攝津也
七風俗のうたひ物の調也
八八雲、大和云云

云ひしなり。「むげになく乾きてあらばこそ、さも附けめ、出づる折もあるなるを、一寸ちにつけるかな」といらへまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げけるをきこしめして、行幸などありけむこそ、いみじうめでたけれ。「寝くたれ髪を」と、人丸が詠みけむ程、いふもおろかなり。御まへの池、又何の心につけるならむとをかし。鏡の池、狭山の池、「みくり」といふ歌の、をかくおほゆるにやあらむ。こひぬまの池。はらの池、「玉藻はな刈そ」と云ひけむもをかし。益田の池。

○かつまだの池——勝間田池、或勝股。八雲には下總とあり。範兼卿の説、歌枕等同前、情輔は美作といへり、顯昭法師は大和云々。

○いはれのいけ——盤余池、八雲に、大和云々。

○にへののいけ——八雲に、やまととあり。

○むげになくかはきてあらばこそ——一向に水なくばこそ、水なしの池とも名づくべけれとの心也。

○うねめの身をなげ——拾遺集云、猿澤の池に采女の身なげたるを見て、人丸「わぎもこがねくたれ髪をさる澤の池の玉もと見るぞ悲しき」拾遺抄云、人丸が、ならの帝の猿澤の池に行幸し給ひて、采女の身なげたるを哀みて、人に歌よませ給ふけるに、御供にてよめる也。ねくたれ髪とは、只髪のみだれたるを

一、数ならぬ心也
 二、菖蒲、蓬也
 三、催時にかやう
 の祝儀はなし也
 四、后宮、定子の
 御かたなるべし
 五、御几帳也
 六、身屋(モヤ)延
 喜式
 七、くすたまつけ
 たる柱に也
 八、菊をつけて薬
 玉をすつる也
 九、薬玉にくみさ
 けし糸を也

いふべき歎中略。童蒙抄、此の采女の事大和物語にもあり、帝の寵愛おとろへしを恨み申して身なげたる也。
 ○かがみの池、さやまの池、こひぬまの池——此の三所ハ雲にも、かやうに書きつづけて、國所見え侍らず。
 ○みくりといふうた——古歌可レ勘、みくりとは水草也。おくにしるす。
 ○たまもはなかりそ——河海云、風俗上野歌、「をしたかべ鴨さへきゐる原の池のや玉藻はまねかりそおもすがねやまねかりそや。」

三十七

せちは 五月にしくはなし。菖蒲、蓬などの薫りあひたるも、いみじうをかし。九重の内をはじめて、いひ知らぬ民の住家まで、いかでわが許にしげく葺かむと、葺きわたしたる、猶いと珍しく、いつかこと折はさはしたりし、空のけしきの曇りわたりたるに、きさいの宮などには、縫殿より御薬玉とて、色々の糸を、組みさげて参らせられたれば、御帳たてまつる身屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を、あやと生絹の衣に包みて参らせたる、同じ柱に結びつけて、月頃ある薬玉取り替へてすつめる。又薬玉は、菊の折まてあるべきにやあらむ。されどそれは、皆糸を引きとりて、物結びなどして、しばしもなし。

○せちは——節供なるべし。

一、五日の節供とて御祝儀を違する也
 二、刺柳に菖蒲をかざれる也
 三、女の装束也
 四、菖蒲の根也
 五、作花也、薬玉のかざり也

○五月にしくはなし——花鳥餘情云、五月五日の節、天皇あやめのかづらをかへ給て、武徳殿に行幸あり。内辨、外辨等せち糸のごとし。宮内省菖蒲を獻ず。内侍、女藏人續命護を群臣に賜ふ。三獻をはりて、六府騎射の事あり。延喜式太政官云、凡五月五日天皇親騎射并走馬一辨及史等檢三校諸事一所司各設御座於武徳殿一是日内外群臣皆着菖蒲。雲一
 ○ぬひどのより御くすたま——續命護延喜式、薬玉雲圖、五月五日のくすたまは絲所より奉る事延喜式、御記等に見えたり。絲所はすなはち縫殿の別所なれば、此の双紙にはぬひどのよりまいらすといへるにや、江次第二卷頭云、絲所_ニ采女町北_ニ縫殿別所也。五月五日獻_ニ薬玉_ニ是也。拾芥同。河海曰、御記曰延喜十三年五月五日丙午、絲所供_ニ奉_ニ薬玉_ニ如_レ常、撤_ニ去年_ニ九日_ニ茶_ニ夏_ニ以_ニ薬玉_ニ懸_ニ着_ニ御柱_ニ前_ニ例也_下略。雲圖抄同。
 御節供参り、若き人々は、菖蒲のさし櫛さし、物忌着けなどして、様々、唐衣、汗衫、長き根、をかしき折枝ども、むら濃の組して結び附けなどしたる、珍しういふべき事ならねどいとをかし。さて春ことに咲くとて、櫻をよろしう思ふ人やはある。辻ありく童の、程々につけては、いみじき業したると、常に袂をまもり、人に見くらべ、えもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舎人童などに引きとられ

六村邊の組織也
 七毎年の事なれ
 八イさても可用
 九大かたにの心
 一〇十字(ツジ)和
 名
 二其の分際へ
 にしたがひて也
 三興也
 四されはこりた
 る心也
 五小舎人堂
 一五艶色、みやび
 やかにやさしき
 心也
 一六同志也
 一七子規は我名を
 なく物なればな
 のりさいふ也

て、泣くもをかし。紫の紙に、棟の花、青き紙に菖蒲の葉、細う巻きて引き結び、又白き紙を根にして結ひたるものをかし。いと長き根など、文の中に入れなどしたる人などもなれども、いと艶なる返事書かむと、云ひ合はせかたらふどちは、見せ合はせなどするをかし。人のむすめ、やむごとなき所々に、御文きこえ給ふ人も、今日ハ心ことにぞなまめかしうをかしき。夕暮の程に郭公の名乗したるも、すべてをかしういみじ。

- むすびつけなどしたる——唐衣、汗衫などにつけし也。
- 春ごとにさくとて櫻を——毎年のあやめを、めづらしげにいふことほり也。櫻も毎年みれども、猶めづらしうすると也。
- いみじきわざしたると——薬玉をもちて、よろこびおもふ心也。
- つねにたもとをまもり——我袖のくすだまを爰し見るさま也。
- むらさきのかみにあふち——其の花、其の葉の色に應じたる色のかみにつみて、又白き紙をあやめのねのやうにせし也。
- 文の中にいれなどしたる——人よりの文に、菖蒲の根をいれておこせしに、よろしき返事せむと侍る輩に、談合するさま也。
- 人のむすめやむごとなき所々に——人のむすめのもとへにこも、やごとなき御かたなどにも、文やり給ふ人も、端午にはことになまめかしく見ゆると也。

三十八

一五葉松也
 二イ柳
 三時ならずつき
 なき心也、若葉
 の紅葉を云ふ也
 四覆也
 五いふもこごさ
 らに今めかし
 の心也
 六やどり木とて
 別に木はあらね
 ざこなり
 七おびただしき
 心也
 八千枝也
 九是も深山にあ
 る木なれ也
 一〇本歎可動
 二細々許(サ、
 ヤカ)小々許同
 ちひさき木の事
 也
 二三若芽のあかき
 さま也

木は かつら。五葉、柿、橘、そばの木、はしたなき心地すれども、花の木ども散りはてて、おしなべたる緑になりたる中に、時もわかず、濃きもみぢの艶めきて、思ひがけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。檀、更にも云はず。その物ともなけれど、寄生木といふ名、いとあはれなり。櫛、臨時の祭、御神樂の折など、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物と云ひ始めけむも、取りわきをか。柿の木は、木立多かる所にも、殊にまじらひ立てらず。おどろくしき思ひやりなどとうとましきを、千枝にわかれて、戀する人のためしに云はれたるぞ、誰かは數を知りて、云ひ始めけむと思ふにをかし。檜の木、人近からぬ物なれど、みつばよつばの殿づくりもをかし。五月に雨の聲まねぶらむもをかし。かへての木、さよやかなるにも、崩え出でたる梢の赤みて、同じ方にさしひろりたる葉の様、花もいと物はかなげにて、蟲などのかれたる様にてをかし。

- かつら——楓、榊、本記、桂、山本紀、賀茂の祭にあふひ草に添ふる物也。
- かき——イニ柳とあり。柿、字彙、柿の字柳の字にまがひたるゆへにや、いづれかまことならむ。
- そばの木——曾波木と延喜式大舎人寮に有り。

三楓の花、卯月の頃さく物也
四楓の花のさま

一吉野の金峰山也、子日精進してまゐる也

○はしたなきこもちすれども——曾波木の事をいへり。其の木立は、はしたなき物ながら、若葉の紅葉のめづらしきと也。
○やどり木——宿木、寄生、三光院御説、寄の一字をもやどり木といふ也。こ木に宿りたるを云ふ也。花鳥には木の窠敷といふ物也。桑寄生の類云々。
○さかき——河海云、櫛とは眞賢木、眞坂樹日本紀にかけり。天照大神天の岩戸をとぢ給ひし時、八百萬の神達、天香久山の坂樹を、ねこじ取りて祈り給ひしより、神の縁木とす。櫛は本字にあらず。本朝の作字云々。龍眼木と書之。
○臨時のまつり——賀茂の臨時の祭は十一月、八幡の臨時の祭は二月也。奥に委し。
○御神樂の折など——内侍所の御神樂に、人長柳をとりてかなづる事あり。探物の歌にも勿論さかきあり。
○ちえにわかれて——六帖、「いづみなるしのだの森の楠の木の子枝にわかれて物をこそ思へ。」
○みつばよつばの——古今序、「此の殿はむべもとみけりさき草のみつばよつばに殿づくりせり。」北畠親房抄云、「辛種は櫛の木をいふ也。みつばよつばは、三棟四棟と書く、屋の棟あまたある心なるべし。
あすはひの木、此の世近くも見え聞えず。御誠に詣てて歸る人など、しかもてあり

ニ餘の字也、此の木を家づまににするにや
三あすはさいふにつけて也
四イヤまたちはな、なしの木
五人氣運き心也
六白櫻はさして色もなき櫛なれば也
七素盞鳴尊は天照大神のこのかみ也、古今序にあり
八出雲大社云々
九イさもにて
一〇世に傳ふる事にても、時節の景につけてもと也

くめる。枝さしなどの、いと手離れにくげに、荒々しけれど、何の心ありて、あすはひの木と附けけむ。あぢきなきかねごとなりや、誰にたのめたるにかあらむと思ふに、知らまほしうをかし。ねずもちの木、人なみくなるべき様にもあらねど、葉のいみじう細かに、小さきがをかしきなり。棟の木。山梨の木。椎の木は、常磐木はいづれもあるを、それしも葉かへせぬためしにいはれたるもをかし。白櫻などいふもの、まして深山木の中にも、いととどほくて、三位、二位の上の衣染むる折ばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたき事、をかしき事に取り出づべくもあらねど、いつとなく雪の降りたるに見まがへられて、素盞鳴尊の、出雲の國におはしける御事を思ひて、人丸が詠みたる歌などを見る、いみじうあはれなり。いふ事にて、折につけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も、木も、鳥蟲も、おろかにこそ覺えね。

○あすはひの木——明日檜木にや。世俗にあすならふといふ木なり。櫛の木に似て、材木につかふ物也。
○たれにたのめたるにか——たのめは約束する事也。あすとは誰に頼めしと也。
○ねずもちの木——梗和名。
○やまなしの木——河海、「世の中をうしといひてもいつくにか身をばかくさむ山なしの花」イ本ニ山たちばな、古今、「我こひを忍びかねては足引の山橋

の色に出ぬべし」榮雅抄云、山橋は世俗に簀柑子といふ草也云々。草ならば木の類には如何にや。

○それしも葉がへせぬ——椎の木をしもとの心也。「いつとなく葉が、ぬ山の椎葉に人の心をなほすよしもがな」堀河次郎百首に、仲實の歌也。猶古歌尋ぬべし。

○三位、二位のうへのきぬ——二位、三位の袍は紫色。白樫にて染むるにや。延喜式第十四雜染色式にさまざまあり、可考。但清少納言の頃はさもあるべし。此の頃の袍はふしがねにて染むる、此の絲の由也。但ふしがねは、くさく早く朽つるにより、近ごろ故實の女工ありて、下を蘇芳を煎じて染めて、うへを五倍子の枝、若は葉を煎じて染むるが、色もよくくさからぬといへり。五倍子の木なければ、柘榴の皮にても染むるよし、桃華葉葉に見えたり。

○出雲の國におはしける御事をおもひて、人丸が——イニ御供にて人丸がとあり。此の事不審也。拾遺人丸、「足びきの山路もしらず白樫の枝にも葉にも雪のふれれば」とあり。此の歌の事にや。

ゆづり葉の、いみじうふさやかに艶めきたるは、いと青う清げなるに、思ひかけず似るべくもあらず。茎の赤うきら／＼しう見えたるこそ、卑しけれどもをかしけれ。なべての月頃は、つゆも見えぬ物の、師走の晦日にしも時めきて、亡き人のく

一攝也、弓鉸葉
こもいへり
ニイぬ
三聖也

四句
五イおかし
六附也、兵衛附也

ひ物にも敷くにやとあはれたるに、又、齧延ぶる齒固の具にもして、使ひためるは、いかなるにか。「紅葉せむ世や」と云ひたるもたのもし。かしは木、いとをか葉守の神のますらむも、いとかしこし。兵衛の佐、附などを、いふらむもをか。萎なけれど櫻欄の木、からめきて、わろき家のものとは見えす。

○しはすの晦日にしも、時めきてなき人の——十二月の玉祭に、盆に荷葉をしくやうに、標をくひ物にしくなるべし。報恩經云、十二月晦日午時來、正月一日卯時歸。この外にも精靈の來る日あり。彼の經に委し。

○よはひのぶるはがため——花鳥云、齒固は齒はよはひ也。則ちよはひともよめり。齒固はよはひをかたむる心也。河海云、内膳自青瑣門二供二御齒固具一盛レ瓷、大根一坏、瓜串刺二坏、押鮎一坏、煮鮎一坏、猪突以椎代レ之、鹿突以鴨代レ之、以上七坏之内、精進物供二於第一御齋、魚類供二第二御齋、或説、無二鹿突一有二腹赤二云云。いままも元日の餅かがみに、ゆづり葉をかざり侍り。

○もみぢせむよやと——六帖、「旅人に宿りかすがのゆづりは紅葉せむ世や君を忘れむ。」

○葉もりの神の——後撰、「柏木に葉守の神のましけるをしらでぞをりしたゝりなさるな」此の歌大和物語にもあり。葉守の神は、河海云、樹神也、基俊云葉守の神なべての木を守るにあらず。只柏木をのみ守る也。弘仁式三綱柏の所

に委しく見ゆ云々。雖^レ然古人餘の木に詠^レ之如何。
 ○兵衛の佐^スぞうなど——八雲御抄に、兵衛佐を柏木と云々。大和物語に良少將
 兵衛の佐なりける時、「柏木の森の下草」とよみし事あり。童蒙抄にも、兵衛
 を柏木といふ云々。
 ○すがたなけれどしゆるの木——櫻栢は枝もなく、させる姿もなきもの也。朗
 詠云、栢栢葉^{コト}水風涼云々。西湖の晩景に、孤山寺に望みて、白樂天の作りし
 句也。

三十九

鳥は ことどころの物なれど、鶯^{あふひ}いとあはれなり。人のいふらむことを真似^{まね}ぶら
 むよ。郭公。水鷦^{くわん}。鳴^なみこ鳥^{とり}。ひたき。山鳥^{やまどり}は、友を戀^こひて鳴^なくに、鏡を見
 せたらば慰^{なぐさ}むらむ、いとあはれなり。谷隔^やてたる程など、いと心苦し。鶴はこち
 たき様なれども、鳴^なく聲^{こゑ}雲居^{くもい}まできこゆらむ、いとめでたし。頭赤^{あたま}き雀^{すずめ}。斑鳩^{いばら}の雄
 鳥^{おとこ}。たくみ鳥^{とり}。鶯^{あふひ}は、いと見る目も見苦し。まなこみなどもうたて、よろづに懐^{なつ}し
 からねど、「ゆるぎの森にひとり寝^ねじ」と、争^{あは}ふらむこそをかしけれ。

○こと所の物なれど、あふむ——山海經云、黄山有^レ鳥、其狀如^レ鶯青羽赤喙、
 人舌^{ひと}能^よ言^ふ、名^ナ鶯鷦^{あふひ}也。文選鶯鷦賦云、惟西域之靈鳥、挺^た自然之奇姿、體^た
 金精之妙質、合^あ火德之明暉、性^性辨惠、能^よ言^ふ、分^分下時。此の賦の心は、あふむは西

一鶯記ニ鶯鷦能
 言トモ不^レ離^レ鳥
 飛^ト云々
 二水鷦
 三鶯
 四鶯
 五火鷦
 六巧鳥也、巧婦
 鳥も女匠なご
 も本草にあり

域の鳥にて、かたちうつくしく、ちゑ有りてよく物をもいへば、山や澤べの官
 人に仰せて、此の鳥をとらしめて、籠にこめつれば、聲悲しみ、形もかじけて、
 きく人も泪をおとすことをつくれり。此の賦の心にて、いと哀也といへるに
 や。猶文選を見るべし。

○山鳥は友をこひて——これは、「山鳥のをろのはつをに鏡かけとなふべみこ
 そなにまうりけめ」といふ歌の義を、清少の述べたるにや。昔隣國より、聲面白
 き山鳥を奉りしに、帝飼ひ給へども鳴かざるを、ある女御、此の鳥友をはなれ
 てなかねなめりとおもひ得て、鏡を籠にたてそへたれば、悦^{よろこ}べる氣色にて鳴く
 事を得たり。此の事俊頼の無名抄の説なるを、八雲御抄にしるさせ給へり。是
 に異説あれども、此の義、この草紙にかなひ侍るべし。

○谷へだてたるほどいと心ぐるし——是も彼の、「山鳥のをのしだりをの」と
 いふ歌の義などにつきていへるにや。童蒙抄にも、此の歌の註云、山鳥の尾の
 しだり尾のともいはれたるを、山鳥の雄のしだり尾のといふべきなりと、古人
 申しけるとかや。峯をへだてて夜は雌雄^{メオス}ふす鳥也。さればひとりぬる心にもよ
 めるなるべし云々。

○なくこゑ雲みまで——圓機活法云、相鶴經云、聲聞^{こゑ}天故頭赤^{あたま}、食^く於^お水^{みづ}故^ゆ。

一 鶯
二 鶯がひに也
三 都鳥、伊勢物語にあり
四 あはれなれどふくめたる詞也
五 句
六 詩、和漢の鶯の詩あけていふべからず
七 貴(アテ)けにかき心也
八 内裏に鶯なかにいひし也

吟 長云々。

○いかるがのをどり——斑鳩雄也。和名集云、貌似鶴而白啄者也。
○鶯はいと見るめも見ぐるし——霜衣雪髮青玉鶯など詩に作りて、いさぎよき物なれど、清少の心はかりがたきにや。山谷演雅の詩に、白鶯不禁塵土泥など、心のつたなきためしにへるたぐひにや。

○ゆるぎの森にひとりねじ——萬木森、近江也。格物論云、鶯鷺林棲、朝出捕魚鮮一而食、夜歸宿其處二百千爲群云々。「たかしまやゆるぎの森の鶯すらも獨はねじとあらそふ物を」六帖。

はこ鳥。水鳥は、鶯鷺いとあはれなり。かたみに居がはりて、羽の上の霜を拂ふらむなど、いとをかし。都鳥。川千鳥は友まどはすらむこそ。雁の聲は、遠く聞えたるあはれなり。鴨は羽の霜うち拂ふらむと思ふにをかし。鶯はふみなどにもめてたき物に作り、聲よりはじめて、様かたちも、さばかりあてに美しき程よりは、九重のうちに鳴かぬぞ、いとわろき。人の「さなむある」と云ひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことに更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。まかてて聞けば、あやしき家の、見所もなき梅などには、花やかにぞ鳴く。夜鳴かぬも、いぎたなき心地すれども、今はいかがせむ。夏秋の末まで、老聲に鳴きて、蟲喰など、ようもあらぬ者は

一 清少の中宮にさぶらひしはごにや
二 紅梅也
三 鶯の來かよふたよりもあり也
四 三里亭などに退出しなく也
五 三續ごきといふ事也
六 天性さやうに生まれ付きたればせむかたなし也
七 老聲、鶯のなきふるしたるこ也
八 下賤の者也
九 久しく鳴くゆゑにすまじき心ちする心也
一〇 鶯なり
一一 春はかり鳴くならはせ也
一二 鶯

名を附けかへていふぞ、口惜しくすごき心地する。それも雀など様に、常にある鳥ならば、さも覺ゆまし。春鳴く故こそはあらめ。「年立ち返る」など、をかしきこと、歌にもふみにも作るなるは、猶春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世の覺えあなづらはしうなり初めにたるをば、誇りやはす。鶯、鳥などの上は、見入れ聞き入れなどする人、世になしかし。されば、いみじかるべきものと、なりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり。

○はこどり——しれざる鳥也。或説に、はやこりとなく故、早來鳥と書くといへり。只瀬鳥のたぐひに、定家卿しらすとのたまひし、其の分たるべし。

○はねのうへの霜を——六帖、「はねのうへの霜うちはらふ友まどはせの獨ねするぞわびしき。」

○友まどはすらむこそ——拾遺集、「夕されば佐保の河邊の川霧に友まどはせる千鳥なくなり」友則。

○かもははねの霜うちはらふ——後撰集、「冬の池の鴨のうは毛に置く霜のきえて物思ふ頃にもある哉。」

○こゝのへのうちになかぬぞ——是清少の中宮に侍りし頃など、自然なかざりしなるべし。必ず内裏になかぬにはあらず。朗詠に宮鶯、曉三曉天一といふ題にて、西樓月落花間曲、中殿灯、残竹裏聲、と菅三品の作り給へり。又拾遺集に、醍醐

三鳥
三助字也
三鳥は愛せらるべきものと思ふ故に難するぞこ也
三不審たつ心也

一賀茂の祭也、是より又うぐひすの愛すべき事をいふ也
二祭は四月の半なれば、郭公の忍びあへずなく

關の帝の御前の五葉に鶯のなきけるを、「松のうへに鳴く鶯の聲をこそ初ねの日とはいふべかりけれ」とよみし事もあるをや。
○さるは竹もちかく——禁秘抄云、中殿東庭竹臺二云々、彼中殿灯殘竹裏聲、といへる是也。中殿は清涼殿なり。
○こらばいもいとよく——禁秘抄云、天徳四年十二月十八日裁二紅梅於中殿良角一とあり。其の外仁壽殿梅臺などにも、紅梅うゑられし事侍り。
○春なくゆゑこそあらめ——夏秋までもなく物を、春の鳥と定められたれば、春なくべき故あるやらむと也。
○年たちかへると——拾遺集、「あらたまのとしたちかへるあもたよりまたるものは鶯のこゑ」素性歌也。
○人をも人げなう——鶯の世にもはやさるる鳥なればこそ、久しく鳴く、夜なかななど云ふ難をつけて、そしりもすれと、いはむとてのことばなり。
祭のかへさ見るとて、雲林院、知足院などの前に、車を立てたれば、郭公も忍ばぬにやあらむ鳴くに、いとよう眞似び似せて、木高き木どもの中に、諸藤に鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。郭公は、猶更に云ふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に卯の花、花摘などに宿をして、端隠れたるも、ねたげなる心ばへなり。五月雨の短夜にねぞめをして、いかで人より先に聞かむと待たれて、夜深くう

三鶯の郭公によく似たる事あるをいふ也
四鶯は郭公も也
五鶯をそしりたれどもこの心也
六おのが五月さなく心也
七木隠れに少しかくれたるさま
八是も愛したる心也
九六月の事也
二此の芭蕉に夜鳴する兒の事をいひしに同意也

ち出でたる聲の、らう／＼じう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せむ方なし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。夜なくもの、總ていづれもくめでたし。乳兒どものみぞさしもなき。
○まつりのかへさ見るとて——宇治拾遺に、賀茂祭の供に、下野武正、秦兼行出でける其の歸さを、法性寺殿、紫野にて御覽じける事あり。
○うりんあん——紫野に、今うちるといふ所其の舊跡也。河海云、雲林院は淳和の離宮也。仁明天皇に處分し奉り給ふ。次に常康親王傳領、本堂は彼の親王の室也。其の後御願寺として、天曆に實性僧都別當に補せられなどして、殊に尊敬ありき。御記にも、本尊千手觀音有二靈驗云々。
○知足院——拾芥云、千葉介建立云々。
○らう／＼じう——良々、勞々、ほめたることば也。
○あいぎやうづきたる——愛敬ある心也。愛らしきさま也。
○いみじう心あくがれ——あまりに感にたへでの心也。
○すべていふもおろるか也——鶯の久しくなくを難じたるに對して、一しほほめていふ詞也。
○よるなくもの——前に鶯の夜なかぬを難じたるにつけていふ也。郭公にも眼らず、水鶴、秋蟲などの類すべていふなるべし。

一水品也
ニ敷珠也
三匣盆子(延喜式)

あてなるもの 薄色に白がさねの汗衫。かりのこ。削氷のあまづらに入りて、新しきかなまりに入りたる。水晶の敷珠。藤の花。梅の花に雪の降りたる。いみじううつくしき乳児の蓐食ひたる。

○あてなる物 貴アテ、けだかくきよげなる心也。

○うすいろにしらがさねの 薄色は薄き紅など也。白重汗衫は童女の初夏の衣服也。うすいろにこれをかさねたるが、あてやかなると也。

○かりのこ 河海云、鴨子西宮紀、細流云、かものこ也。

○けづりひのあまづらに 削氷、夏月の暑きに、くひ物損ぜしめぬために、氷をくはへおく事也。江次第廿、新任大臣大饗云、産肴物二暑月削氷、甘瓜等云々。同五列見の首書云、粉熟又加削氷二列見延引及二暑月一時如レ之云々。

あまづら、甘葛、千歳薬汁、今の世の砂糖糖のやうに、食物に和して用ふる物也。順和名云、千歳薬汁、本草云、味甘平、無毒、續筋骨二長二肌肉一一名薬蕪。和名、阿末豆良、本朝式云、甘葛煎也。

○あたらしきかなまり 延喜式主計云、土師鏡形五十口。順和名にも鏡の字をかなまりとよめり。宇治拾遺物語に、水飯を銀のかなまりにもる事あり。

碗の類也。

四十一

一蝶 二産にすむ蟲也
いへり
三蚕 四蚕 五是より清少の例の筆のすまびのたはぶれなるべし
六みのむしのかたちをかたどりいへり
七みの蟲に親のすかしていへる詞也
八「契りけむ親の心もしらずして秋風たのむみの蟲の聲」さ家遺歌也
九このむしのこも也
一〇晩飼
二ねかづく心也

○はたおり、きりぎりす 促織ハタオリ、蚕、蟋蟀同、唐には促織一名、蟋蟀と、古今註にもしるして同物也。こにも其の形に似て、聲はかはれり。蟋蟀はつづりさせとなき、促織は機織音に似たり。更に同物にはあらず。

三體
 三愛敬也
 此の草紙に書
 くべき物にはあ
 らねども也
 五顔
 六にくき心をふ
 くめたり
 七句
 八青蛾也
 九塵、ほそひの
 さよむ也
 三蟻也
 二身の軽き也

○ひをむし——細流、蜂蟬也とあり。爾雅云、蜂蟬渠略也。似二結鯉一身狹而長。有角黄黑色生糞土中。甲下有翅能飛。朝生夕死云々。愚案、ひをむしはかげろふと同物にや。童蒙抄に、かげろふはくるきとらのはらの、ちいさきやうなる物と云々。八雲抄に夕に軒などにみだれとぶ物也。夕ぐれに命かけたるといへり。

○ぬかづき蟲——叩頭蟲、和名、蟲細微者、觸之輒叩頭云々。河海云、額突は稽首也云々。此の蟲かしらをつきて、禮拜するやうなれば名づくる也。

○さる心に道心おこして——かくはかなき蟲の菩提心をおこして、常不輕などつきありくと、例の清少の筆のすさびなり。常不輕をつく事、源氏總角卷、元享釋書勝尾の勝如上人の傳にあり。

○はへこそにくき物——蠅也、詩小雅にも讒人にたとへにくめり。憎着蠅賦などおもふべし。

○よろづの物に居——詩小雅に、止三千焚、止三千棘、止三千榛云々。憎着蠅賦に追氣、尋一番無二處不到。この心にかよふべし。

○かほなどにぬれたる足して——憎着蠅賦に、尋頭、撲面云々。和漢其の心通ずるにや。

○夏むしいとをかく——八雲御抄云、夏蟲は總名也。火に入るをいふ。後撰

に夏蟲の聲より外に、などもよめり。又螢を夏蟲といふ常の事也。童蒙抄云、夏夜火にとびいる蟲を云ふ。本文青蛾拂燭といへり。

四十二

七月ばかりに、風のいたう吹き、雨などの騒がしき日、大かたいと涼しければ、扇もち忘れたるに、汗の香少しかへたる衣の薄き、引きかづきて、寝寝したるこそをかしけれ。

○七月ばかりに——是より例の清少の筆すさびなり。
 ○すこしかへたる——汗の香をうつしとめたる心也。

四十三

にげなきもの、髪悪しき人の白き綾の衣着たる。しじかみたる髪に、葵つけたる。悪しき手を赤き紙に書きたる。下衆の家に雪の降りたる。又、月のさし入りたるも、いと口惜し。月のいとあかき、屋形無き車にあひたる。又、さる車にあめ牛かけたる。老いたる者の、腹高くて喘ぎありく。又、若き男もちたる、いと見苦しきに、こと人のもとに行くとて妬みたる。老いたる男の寝まどひたる。又、さやうに鬚勝ちなる男の、推つみたる。齒も無き女の梅食ひて酸がりたる。下衆の紅の袴着たる。

一イしらがみた
 二髪也
 三賀茂祭の日、葵かづらかくる事也
 四イニあひのりたる
 五老女の懐妊したるさま也

六晴也、いきどほしゆに歩む也
 七老女に不具合也
 八其の男の心老女のねたむ也
 九忍びありきして寝過ぐしたる也
 一〇権の實くひたる也
 一一齒也
 一二イヤから
 一三衛門佐は五位殿上人任ずれど清少中宮の御方人にていやしむる也
 一四前に狩衣姿もいさいやしゆ也と云ふ首尾也
 一五遊覧なり。うたがはしき物をも、あやしめどがむる夜行のさま也

此の頃はそれのみこそあめれ。ゆげひのすけの夜行。狩衣姿も、いといやしげなり。又、人におぢらるる袍うはのぬまはたおどろしく立ちさまよふも、人見つけばあなづらはし。「嫌疑の者やある」と、たはむれにも咎む。六位藏人、うへの判官とうちいひて、世になくきら／＼しき物に覺え、里人、下衆などは、此の世の人とだに思ひたらず、目をだに見あはせて、おぢわな／＼く人の、うちわたりの細殿などに、忍びて入り臥したるこそ、いとつきなけれ。そらだき物したる几帳に、うち懸けたる袴はかまの、重たげにいやしう、きら／＼しからむもと、おし量らるるなどよ。さかしらに上の衣うへ腋わきあけて、鼠の尾の様に、縮ね懸けたらむ程ぞ、似氣なき夜行の人なる。此の司の程は、念じてとどめてよかし。五位の藏人も。

- にげなきもの——似つかはしからぬ事也。
- しじがみたるかみに——源氏行幸巻に、わりなうしじがみとあるを、細流にちぢみたる也云々、イ本、しらがみたるかみとは、白髪亂るにや。しじがみを可用。
- 月のいとあかきに、やかたなき車に——月明なる夜は、心してよき車こそ似合ふべけれとの心也、イあひ乗りたる、可用。
- 又さるくるまに——さやうの屋形もなき車に、よき色なる牛をかけたる也。

一六判官
 一七藏人判官は規模の事にて、なみの人はならぬ事なれは也
 一八隠、細殿也
 一九イニしのびありきするこそいとつきなけれ
 二〇風流なる所のさまたり
 二一夜の檢非違使の袴のあら／＼しきさまなるべし
 二二三句
 二三朝殿の袍の事にや
 二四短く押しあけて見立なきさま也
 二五押し縮ねて帳にかけたる也
 二六夜行の人々也
 二七念也、思慮して忍びありきはやめよかしと也

○げすのくれなるの袴——位ひくき人をいふ也。
 ○此の頃はそれのみこそ——さやうのたぐひおほしとなり。
 ○ゆげひのすけの——左右の衛門佐を云ふ也。花鳥餘情云、靱負と書きて、ゆげひとよめり。靱は矢をいゝしこをいふ。左右衛門は弓箭を帶するつかさなるにより、ゆげひといへり。
 ○やかう、かりぎぬすがた——夜行、狩衣姿也。夜行とは、衛門府は内裏の御門を守る故、夜の巡行をつとむる也。朗詠に、夜行沙厚履聲忙云々。
 ○人におぢらるるうへのきぬ、はたおどろ／＼しく——弓箭を帶して御門を守り非常をいましむるつかさなれば、人に恐れらるる也。衛門佐は相當從五位なれば、其袍赤色にて、目驚く色なれば、おどろ／＼しくといふ也。源氏濔漂卷云、良清もおなじ佐にて、人よりことに物思ひなきけしきにて、おどろ／＼しき赤ぎぬ委いと清げ也。とあるも靱負佐の事なり。
 ○六位藏人、うへの判官——六位藏人とは、靱負の尉などの六位藏人を兼ねたる也。彼の漂標卷に、右近のせうもゆげひになりて、ことごとしき隨身ぐしたる藏人なり。といへる比の類也。
 うへの判官とは、彼の藏人の衛門尉の檢非違使のせうになりたるをいふ也。うへのとは、殿上せし事也。檢非違使のせうの昇殿はまれなる事なれど、これは

藏人なれば、昇殿勿論なるべし。又いづれの官にも長官、次官、判官、主典あれど、只判官といふは、檢非違使のぜうの事也。又、檢非違使の佐、尉、志は必ず衛門なり、職原抄に委し。又、藏人ならで昇殿の判官は、源義經也。

○うちわたりのほそどのなどに——禁中の廊也。源氏に、弘徽殿のほそどのといへるたぐひなるべし。さやうの所に局したる女房のもとへ、彼の人におぢらるゝ判官、ゆげひのすけなどの、しのびり居たるが、にげなき事をいふ也。

○さら／＼しからむもと、おしはからるゝなどよ——たとひきら／＼しき袴にても、藏人の衛門などは、あなづらはしくて薰物したる几帳には、にげなからむに、ましてかくおもたげに、あら／＼しきはいやしきとの心をふくめたる詞也。

○にげなきやかうの人々なる——人におぢらるゝ身の、忍びありきしたるを、にげなきと也。

○五位の藏人も——六位藏人のみならず、五位藏人は可然き殿上人とはいへども、猶かやらの忍びありきは、思慮すべき事ぞと也。職原抄云、五位藏人三人五位殿上人中名家譜第、殊撰ニ其器用一所補也云々。

四十四

細殿に、人とあまた居て、ありく者ども、見やすからず呼び寄せて、ものなどいふに、清げなるをのこ、小舎人童などの、よきつゝみ袋に衣どもつゝみて、指貫の腰など、うち見えたる。袋に入りたる弓、矢、櫛、鉾、たち、などもてありくを、「誰がぞ」と問ふに、「つい居て、「何がし殿の」と云ひて行くは、いとよし。けしきばみやさしがりて、「知らず」とも云ひ、聞きも入れていぬる者は、いみじうぞにくきかし。

○人とあまたゐて——清少ごときの女房達也。

○見やすからずよびよせて——めやすからずと同心也。見にくき事也。彼のほそどのの前行きかふものどもに、女房の物いふは、見よからぬ事なれば、見やすからずよびよせてといふ也。

○ふくろにいりたるゆみ、矢、たて、ほこ——武官の人々の調度、或は舞樂の道具なるべし。

○けしきばみやさしがりて——やさしき氣色にうちゑみなどして、只しらずといひて通るさまなり。

月夜にむな車ありきたる。清げなる男の、にくげなる妻持ちたる。鬚黒にくげなる人の年老いたるが、物がたりする人の兒もてあそびたる。

○むなぐるま——人ものらぬ車也。月夜には乗車にて月見ありくこそ然るべし

一是より別の事也
二妻袋也、あまり大きからぬ袋也
三細殿
四指貫
五櫛
六鉾
七かのつゝみ袋もちたるものも也
八やさめきたる心也
九一向にこりあはぬさま也

一是より又にけなき物をいふ也
二妻持ちたる也
三人の子のわづかに物いふを也

一是より例の筆
 字さび也
 二物にはあれ也
 三下腹の中にさ
 のもづかさほご
 なるはなし也
 四さのもりづか
 さの事をいふ也
 五容貌よき也
 六形ナリよき也
 七さやうにかた
 ちなむよからぬ
 もよきにさ也
 八古例(コレイ)
 など知りて也
 九似つかはしき
 也
 一〇見にくからぬ
 也
 一一袋束也

れむなしき車は似合はずと也。拾遺集物名に、むな車、「鷹飼のまたもこなた
 につなぎ犬のはなれていかむなぐるまつほど。」
 ○もてあそび——うつくしみ愛しむる事也。

四十五

主殿司こそ、猶をかききものはあれ。下女のきはは、さばかり羨ましき物はなし。
 よき人にせさせまほしきわざなり。若くてかたちよく、なりなど、常によくてあら
 むは、ましてよからむかし。年老いて、物の例など知りて、面なき様したるも、い
 とつきつきしうめやすし。主殿司の顔、愛敬づきたらむをもたりて、装束時に隨ひ
 て、唐衣など今めかしうて、ありかせばやとこそ覺ゆれ。男は又隨身こそあめれ。
 いみじく美々しくをかしき君達も、隨身なきは、いとしらじらし。辨などをかし
 く、よき司と思ひたれども、下かさねのしり短くて、隨身なきぞ、いとわろきや。
 ○とのもりづかさ——御殿の掃除、さしあぶらなどの役する女官也、前に註
 す。禁秘抄に云、主殿司美麗姿也、公人内可稱神妙文職云々。玄旨は、女嬀
 をいふと云々。
 ○なりなどつねによくて——形ナリとよむ也。こゝにては様子、衣裳などよき
 心也。

二三男は召し具す
 る隨身がらこそ
 其のさまもよけ
 れ也
 二三笑々也
 四しれれれしく
 よろしからぬ心
 也
 五箱の事也

○おもなきさましたる——おもてづよく、物にうてぬさまする也。若き物はウ
 ろくしげなるに、年老いてさやうならぬ也
 ○もたりて——持ちて也。とのもりづかさのかほよきを、むすめなどにもちて
 との心也。
 ○からぎぬなど——女嬀も小袖に唐衣着る事、禁秘抄に有り。
 ○びびしくをかしき君達——君達とは、攝關の御子息、華族などを申す也。
 ○辨などは——辨官は、をかしきよき官とおもへどもと也。左右大辨、中辨、
 小辨すべて七人あり。百寮訓要云、陣の右筆諸事奉行する器也。執柄三家の人
 などは、近頃いたくならず。但し其の例はおほし。名家の人儒家殊に執する官
 也。

四十六

徹の御曹司の、西面の立部のもとにて、頭辨の、人と物をいと久しく云ひたち給へ
 れば、さし出でて、「それは誰ぞ」と云へば、「辨の内侍なり」との給ふ。「何かは
 さもかたらひ給ふ。大辨見えは、うちすて奉りていなむ物を」と云へば、いみじく
 笑ひて、「誰かかゝる事をさへ云ひ聞かせむ。『それさなせそ』とかたらふなり」
 との給ふ。いみじく見えて、をかしき筋など立てたる事はなく、ただありなるや

本行成卿の答也
 中宮の御方の女
 房也
 大清少の詞也
 七誰さもしらす
 八行成也
 九行成の詞也
 内侍大群忍
 びたる中の事を
 誰か清少に聞か
 せし詞也
 一〇是より草子の
 地也、清少と行
 成卿とさして定
 まりたる夫婦に
 にはあらぬ心の
 心也
 二只よのつね打
 ちあるかたらひ
 のやうなる詞也
 三人々も其の中
 の事を見知りた
 る詞也
 三行成をほめた
 る詞也
 四中宮を申す也
 五中宮にも見知
 らせ給ふ詞也

うなるを、皆人さのみ知りたるに、猶奥深き御心さまを見知りたれば、「おしなべ
 たらず」など、御前にも啓し、又、さしろしめしたるを、常に、「女は、おのれを
 喜ぶ者の爲に、顔づくりす。士はおのれを知れる人の爲に死ぬ」と云ひたる」と云
 ひ合せつゝ申し給ふ。「とほたあふみの濱やなき」など云ひかはしてあるに、若き
 人々は只云ひにくみ、見苦しき事どもなど繕はず云ふに、「此の君こそうたて見
 くけれ。こと人の様に讀經し歌うたひなどもせず。けすさまじ」など譏る。更に
 これかれに物云ひなどもせず。「女は目はたてさまに付き、眉は額におひかり、
 鼻は横さまにありとも、只口つき愛敬づき、おとがひの下、頸などをかしげにて、
 聲にくからざらむ人なむ思はしかるべき。とは云ひながら、猶顔のいとくげなる
 は心憂し」との給へば、まいておとがひ細く、愛敬おくれたらむ人は、あいなるか
 たきにして、御前にさへあしう啓する。
 ○しきの御ざうし——職御曹司、中宮職の事也。禁中にて、中宮定子のおはす
 所也。
 ○頭辨——行成卿は、一條院の長徳元年八月廿九日補藏人頭、同二年四月廿四
 日任權左中辨、職事補任。
 ○大辨見えばうち捨て奉りて——大辨は、辨内侍が忍びたる男なるべし。今清
 少のいふ心は、行成のいかにむつまじく語らひ給ふとも、大辨が見え來らば、

に心ある詞也
 二行成の清少に
 のたまふ詞也
 三七豫讓がいひた
 る詞也
 八和名に遠江を
 止保太阿不三と
 まめり
 一〇行成を若き人
 人のそしる詞也
 一〇イ見えにくけ
 れ
 二請經
 三行成卿の事也
 女にもの給ふ
 事もまれなる詞
 也
 三行成の詞
 四目
 五眞
 六愛相ある事也
 七其の外の人相
 はかまはぬ詞は
 いひながら也
 八あぢきなく也
 九あぢきなく也
 一〇句

内侍は、行成を打ち捨てゆかむものをと、さかしらする也。
 ○それさなせそと、かたらふ也——たとひ大辨見えたりとも、我を見捨てそと
 かたらふと戯れてのたまふ詞也。
 ○いみじく見えて、をかしき筋などたてたる——よそめにも、いみじき中と見
 えて、夫婦としかと見えたる事はなくてとの心也。
 ○猶おくふかき御心さまと——行成の淺はかならぬ心を、清少の見知りたれば
 すべての人ならずと、中宮へも申せしと也。
 ○女はおのれをよろこぶもの——これ豫讓が詞にて史記にあり。智伯といふ
 もの、豫讓をよく見知りてめしつかひに、趙襄子といふ者、智伯をころしけ
 れば、豫讓が云、「士爲知己者死、女爲二説レ己者一容、今智伯知我、我必
 爲二智伯一報レ讎而死」といひて、趙襄子をねらひて、終に死したる事也。此の
 事蒙求にも、豫讓吞炭といふ所に委しくあり。それを清少に我懇志をいはむと
 て、「士はおのれをしれる人のために死ぬ」といふ詞を、後にしての給へるな
 るべし。
 ○いひあはせつゝ申し給ふ——此の古語、男女の事に用ひてよくかなひたれば
 今清少との中の事にいひあはせての給へりと也。
 ○とほたあふみのはまやなき——遠江の濱や無也。奥に遠江介則光といふ

一行成の中宮へ
申し上ぐる事あ
るには、もよ
り申し次ぎそめ
し清少を頼まれ

人を、清少のかたらひし事あり。されば今行成卿の、かくはの給へども、此の
遠江の濱あれば、まさに我にはうけひきがたしとの心にいふ也。濱やなきと
は、はまやはなき、此のはまあればとのころにや、猶尋ぬべし。
○わかき人々は、只いひにくみ——若き女房達など、清少と行成との中を、そ
ねみにくむさま也。
○けすさまじく——氣色すさまじく、近付きにくき心也。是も行成卿をそしる詞也
○ただ口つきあいぎやうづき——是より以下の人相は、すなはち清少の襟巻を
いへるなるべし。
○まいておとがひほそく——只にも行成をそしるに、かやうにの給ふゆゑ、ま
して願細く愛敬なき人は、敵にしてそねむと也。
○御前にさへあしうけいする——中宮へも、行成を譏する事ありと也。前に行
成のことを、おしなべたららずなど、御前にも啓し、又、さしろしめしたると書
きしは、こゝにて人々のいかに悪く申し上げても、中宮は、うけさせ給ふまじ
き事をいはむとて也。
物など啓させむとて、其のはじめいひそめし人を尋ね、下なるをも呼びのぼせ
局にも来ていひ、里なるには、文書きて、みづからもおはして、「遅く参らば、
『さなむ申したる』を申しに参らせよ」などの給ふ。「其の人のさぶらふ」など云

しむ也
二清少の局に侍
る頃は、行成の
來ても申次を頼
まるゝ也
三清少の里亭の
人に、行成の詞
也
四清少の答也。
我ならでも其の
人あれは、それ
して啓し給へし
也
五行成承引なき
也
六清少の詞也
七行成の答也
八外の人に申し
次がせむは、お
もはずとの心也
九清少の詞也
一〇行成の詞也
一一行成の詞也
一二いかで行成に
清少は恥ぢて、
顔をも見せぬ
ぞ、顔をも見せ
よと也

ひ出づれど、さしもうけひかたなどぞおけする。「あるに隨ひ定めず、何事ももて
なしたるをこそ、よき事にはすれ」とうしろみ聞ゆれど、「わがもとの心の本性」
とのみの給ひつゝ、「あらたまらざる物は心なり」との給へば、さて、「ははばかり
なし」とは、いかなる事をいふにか」と怪しがれば、笑ひつゝ、「中よしなど人々
にもいはるゝ。かうかたらふとならば何か恥づる。見えなどもせよかし」との給ふ
を、「いみじくにくげなれば、『さあらむはえ思はじ』とのたまひしによりて、え見え
奉らぬ」といへば、「げに、にくくもぞなる。さらばな見え」とて、おのづから
見つべき折も、顔をも見せぬをふたぎなどして、まことに見給はぬも、真心に虚言し給はざり
げりと思ふに、
○しもなるをもよびのぼせ——清少の中宮の御前にあらねば、よびのぼせて申
次せさせ給ふと也。
○里なるには文かきても、みづからもおはして——清少の里亭にある頃は、行
成の文にても頼み、みづからもおはして、留守居などに申しおかるゝ也。
○おそくまらばさなむ——清少、此の事を啓しに遅くまらば、我さやうに申
す、と早く啓しに清少のまらるやうにせよと、留守居などに行成ののたまふ也。
○あるにしたがひきだめず——萬事あるにしたがひて用ひて、必ずと定めぬこ
そよき事に、古よりし侍れば、我のみならずも申し次がせ給へと也。九條殿遺

二三清少の詞也、
 卑下の詞也
 一四行成の詞也
 一五自然清少を見給ふべき折にも也
 一六行成の目をおほひて見給はぬ也
 一七真心也、眞實なる心也

一是より行成の事也
 二衣冠ばかりにて也
 三早朝也、是より行成に見付けられし物語也
 四申宮の御方の女房なるべし
 五一線院也
 六申宮定子也
 七少式部也

誠云、ツラキユヒヒコト、勿レ求ニ美麗ニ云々。こゝは衣冠馬車の事ならぬと、此の遺誠の心にて、何事ももてなしたるこそよきにはすれといへる也。
 ○さてはばかりなしとは——彼の論語に、フツツイテハバカカトコト、過則、勿レ憚レ改といへるはいかなる事ぞ、かやうの折こそ思ひ出で給はめと也。
 ○さあらむはえ思はじと——前に行成の詞に、顔のいとにくげなるは心うしとのたまひし故也。さやうにくげならむは思はじと、のたまひしゆゑに、見えまゐらせぬと也。
 ○げにくくもぞなる——さやうに見にくくば、にくくならむもあやなければ、我に顔をな見えそと也。

三月つごもり頃、冬の直衣の着にくきにやあらむ、うへの衣がちにて、殿上のととの姿もあり。つとめて月さし出づるまで、式部のおもとと、二廂に寝たるに、奥の遣戸をあけさせ給うて、上の御前、宮の御前出でさせ給へれば、起きもあへずまどふを、いみじく笑はせ給ふ。唐衣を髪の上にうち着て、宿直物も何も、うづもれながらあるうへにおはしまして、陣より出で入る者など御覽す。殿上人の露知らて、寄り来て物いふなどもあるを、「けしきな見せそ」と笑はせ給ふ。さてたたせ給ふに、「二人ながらいざ」と仰せらるれど、「今顔などつくるひてこそ」とて参らず。
 ○冬のなほしの——直衣の色、夏より秋は二ある縹色、冬春は白き櫻の直衣辨

ハ時時儀也
 九髪
 一〇句
 二陣也
 三帝后のおはすをしらで也
 四女房にたはるる也
 一四帝后たちがへらせ給ふ也
 一五清少の詞也
 一六美にてずがほにて、行成に見られし事をいはむさてなり

一几帳の手也
 二行成の袍の色也
 三藏人など心やすき物なるべし
 四行成のさま也
 五それはさいふ詞也
 六清少の見送り

等也。されば春着用し給ふをも、冬の直衣といふ也。
 ○うへのきぬがちにて——よのつねの束帯には、二袍一に下襲あり。是は袍に下がさねを除きて、指貫なるべし。是を衣冠といふ也、今行成も此の装束なるべし。
 ○殿上のととのゐすがた——行成今頭辨なれば、殿上の貫首にて、とのゐし給ふべし。とのゐすがたは直衣着給ふ折もありと也。
 ○とのゐものも何もうづもれ——袞などおさめもやらす押し埋れたるうへに、帝后おはしまして也。
 ○けしきな見せそ——こゝにかく二所おはします氣色を、殿上人にしらすなと女房に仰せらるる也。いふ事をきこしめさむとてなるべし。
 ○ふたりながらいざと——清少も式部も、御供にまわれと仰せらるる也。入らせ給ひて、猶めてたき事どもいひあはせて居たるに、南の遣戸の傍に、几帳の手さし出でたるに障りて、簾の少しあきたるより、黒みたる物の見ゆれば、のりたかが居たるなめりと思ひて、見も入れて、猶事どもをいふに、いとよく笑みたる顔のさし出でたるを、のりたかなめり、そはとて見やりたれば、あらぬ顔なり。あさましと笑ひ騒ぎて、几帳ひき直し隠るれど、頭の辨にてぞおはしけれ。見え奉らじとしつるものと、いと口をし。諸共に居たる人は、こなたに向きて居た

し也
 七のりたかならぬ也
 八清少の心也
 九行成のあらはれ出する也
 一〇のこりなく顔を見し也
 一一清少の詞也
 一二ゆたんにして顔を見えし也
 一三やうに也
 一四行成の詞也
 一五かいま見と同一也
 一六清少の寝おきの顔の、もし見えやすらざる也

れば、顔も見えず。立ち出でて、「いみじく名残なくも見つるかな」との給へば、「のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし。などかは『見し』とのたまひしに、さつくづくとは」と云ふに、「女は寝起きたる顔なむ、いとよき」と云へば、ある人の局に行きてかいはみして、又もし見えやすらとて來りつるなり。まだ上のおはしつる折からあるを、え知らざりけるよ」とて、それより後は、局の簾うちかづきなどし給ふめり。

○なほめでたき事ども——帝后の御ありさまのめでたき事を、清少と式部といひあはせて也。

○なほ事どもをいふに——猶よろづの事どもを式部と語らふ也。又直事也。なほくしき事也。さしたる事もなきざれ事などなるべし。

○もろともにあたる人は——式部が事也。式部はおくさまにむきてゐたれば、行成に顔も見せざりしと也。

○などかは見じとのたまひしに——我かほを見まじきといひながら、いかでさやうにつらく見たまひしぞと也。前にさらばな見えそ、などのたまひし事あれば也。

○またうへのおはしつる折から——さいぜん帝のおはしつる折よりかくれゐて見しを、清少のしらざりしと也。

○つばねのすだれうちかづき——清少の局の内へも、行成の入り給ひしと也。

四十七

殿上の名對面こそ猶をかしけれ。御前に人さぶらふ折は、やがて問ふもをかし。足音どもして、崩れ出づるを、上の御局の東面に、耳をとなへて聞くに、知る人の名乘には、ふと胸つぶるらむかし。又、ありともよく聞かぬ人をも、此の折に聞きつけたらむは、いかに覺ゆらむ。名のりよしあし、聞きにくく定むるもをかし。はてぬたりと聞く程に、瀧口の弓鳴らし、音の音そよめき出づるに、藏人のいと高く踏みこほめかして、うしとらの隅の勾欄に、高ひさまづきとかやいふるすまひに、御前の方に向ひて、後さまに、「誰々か侍る」と、問ふ程こそをかしけれ。細う高う名乗り、又、人々さぶらはねばにや、名對面仕うまつらぬ由奏するも、「いかに」と問へば、障る事ども申すに、さ開きて歸るを、方弘は、聞かずとて、君達の教へければ、いみじう腹だち叱りてかんがへて、瀧口にさへ笑はる。

○殿上のなだいめん——花鳥餘情云、なだいめんは名詞をいふ。殿上の御とのみしたる侍臣等の、名をよばれて名のる事也。此の次に瀧口のとのる申すあり。とのる申すといふも、名詞と同じき也。

一名詞也、或、一刻にある事也
 二やがて問ひてすなはち名對面あり、名詞のために入々まうのほるさまなるべし
 三耳をさへて也
 四忍びてあひしる人の事也
 五名詞に耳をさへてきく時に也
 六よき名懸き名也
 七女ぢちさまざまいひあふわききにく、さいふ

殿上の名對面こそ猶をかしけれ。御前に人さぶらふ折は、やがて問ふもをかし。足音どもして、崩れ出づるを、上の御局の東面に、耳をとなへて聞くに、知る人の名乘には、ふと胸つぶるらむかし。又、ありともよく聞かぬ人をも、此の折に聞きつけたらむは、いかに覺ゆらむ。名のりよしあし、聞きにくく定むるもをかし。はてぬたりと聞く程に、瀧口の弓鳴らし、音の音そよめき出づるに、藏人のいと高く踏みこほめかして、うしとらの隅の勾欄に、高ひさまづきとかやいふるすまひに、御前の方に向ひて、後さまに、「誰々か侍る」と、問ふ程こそをかしけれ。細う高う名乗り、又、人々さぶらはねばにや、名對面仕うまつらぬ由奏するも、「いかに」と問へば、障る事ども申すに、さ開きて歸るを、方弘は、聞かずとて、君達の教へければ、いみじう腹だち叱りてかんがへて、瀧口にさへ笑はる。

也
 八殿上の名調は
 九弓絃をならす
 也
 一〇六位也
 一〇一沓の音也
 一〇二高欄
 一〇三藏人のさま也
 一〇四主上の御かた
 一〇五也
 一〇六藏人の問ひて
 一〇七瀧口のなたいめ
 一〇八事也
 一〇九名乗るこゑ也
 一〇一〇七句
 一〇一一藏人のさふ也
 一〇一二瀧口の答也
 一〇一三其の故障の由
 一〇一四を藏人さきさけ
 一〇一五也
 一〇一六是も藏人なる
 一〇一七べし
 一〇一八案のこましく粗
 一〇一九忽に方弘の腹立
 一〇二〇也
 一〇二〇一解意のつみを
 一〇二〇二勸へる也。子細
 一〇二〇三聞き届けぬ故に

〇うへの御局の東面に——中宮の上の御局に、清少などまゐりて、名対面を聞くなるべし。
 〇又ありともよくきかぬ人——日頃さやうの人有りとも、よくしらざりし人の名のりをも也。
 〇たき口の弓ならし——殿上の名調果て、瀧口のとのみ申あるべきさまなり。源氏夕顔巻に云、かう申すものは瀧口なれば、ゆづるつきくしくうちならしとあり。河海云、亥一刻侍臣名対面、延喜九年よりおこる、同亥一刻侍臣奏之、後瀧口武士名対面事有。
 〇また人々さぶらはねばにや——瀧口ども故障ありて候せねば、名調仕らぬよしを奏する也。
 〇いかにととへばさはる事——いかで候せぬと藏人の問へば、其の故障の子細を瀧口のことばり申すなるべし。
 〇まさひろは——源方弘、左馬権頭時明男、爲三伯父前和泉守致明子、號三源藏、
 伊文藏、
 〇君達のをしへければ——方弘は粗忽の人なれば、それは名調せずと教へば、其の故障の子細をもきかで、必ず腹立つべきと、若君達のかまへてせし也。
 御厨子所のおもの棚といふものに、沓おきて、穢いひのしるを、いとほしがり

日の笑ふ也。君
 達にも笑はるる
 をこめてさへさ
 いふ也
 一是も亦方弘が
 物がたり也
 二イニはらへ三
 字なし
 三方弘をいたは
 りて也
 四漸也
 五人々はいひか
 くすに、方弘み
 づからいひあら
 はす也
 六句
 七其の沓を方弘
 ミりに來ても瀧
 さわがる也
 一是より又にゆ
 なき物をいふ也
 二其の名のなか
 はは、忘れたる
 やうにいふはよ
 し也
 三禁中に奉行の
 人の局に其の下
 女をよるよぶ時

て、「誰が沓にかあらむ。え知らず」と、主殿司、人々の云ひけるを、「や、方弘がきたなき物ぞや。」取りに來ても、いと騒がし。
 〇みづし所のおものだな——御厨子所御膳棚、後涼殿の西の庇にあり。朝餉朝夕の御膳などを供する所也。四位の殿上人別當たり。民部大輔五位を預とすと拾芥に有り。凡河内、射恒延喜の御厨子所の預なるよし家集に見えたり。
 〇沓おきて——方弘が沓を粗忽に御膳棚に置く也。
 〇はらへいひのしる——沓におもの棚がれしとてはき拂ひ、誰わざぞなど別當預などののしる也。
 〇いとほしがりて、たが沓にか——主殿司など方弘をいたはりて、沓の主をいひかくして、しらずといふ也。
 四十八
 若くてよろしき男の、下衆女の名をいひなれて呼びたるこそ、いとくけれ。知りながら、何とかや、かた文字は覚えていふはをかし。宮仕所の局などによりて、夜などぞ、さおほめかむはあしかりぬべけれど、主殿司、さらぬ所にてはさぶらひ藏人所にある者を率て行きて、呼ばせよかし。手づからは穢もしるきに、はした者童などは、されどよし。

也
四將行也、つれ
ゆきて也
五みづからよぶ
は、聲もしられ
てあしきにさ也
六句

○よるなどぞ、さおほめかむはあしかりぬべけれど——夜は鏡によぶべきなれば、片文字は覚えぬやうならむはあしかるべし。然れどもそれもみづからよばずとも、禁中には主殿司、其の外の所にては、侍か藏人所の者をしてよばせよかしと也。攝家などにも藏人所あれば也。
○はしたものの、わらはべなどは——是らは下すながら、名をいひなれてよぶもよしと也。

四十九

一受領也、同司也
二おさなめきた
る也
三是もこえたる
也
四氣のいらちた
る事也
五牛飼童は、車
の前にあるもの
なれば也
六細やかさいふ
におなじ
七しづかに車に
副ひゆく也

若き人と乳兒は肥えたるよし。受領など大人だちたる人は、太きいとよし。あまり瘦せからめきたるは、心いられたらむとおしはからる。よろづよりは、牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。こと者どもは、されどしりに立ちてこそ行け、先につとまもられ行く者、汚げなるは心憂し。車のしりに、ことなる事なきをのこもの連れだちたる、いと見ぐるし。細らかなるをのこ、隨身など見えぬべきが、黒き袴のすそ濃なる、狩衣は何もうちなればみたる、走る車のかたなどに、のどかにうち添ひたるこそ、わが物とは見えぬ。猶大方なりあしくて、人使ふはわるかり、きやれなど時々うちしたれど、なればみて罪なきは、さるかたなりや、使ひ人などはありて、童の汚げなるこそはあるまじく見ゆれ。家に居たる人も、そこにある人として、

八形類也
九衣類也
一〇此の一段も使
ひ童は、清ゆに
て有りたき事を
いふ也
一一はあるまじ
き事さみゆるこ
也
一二其の家に居る
人々も、をかし
き童あるはよし
との心をいふ也

使にても、客人などのいきたるにも、をかしき童のあまた見ゆるは、いとをかし。
○よろづよりは牛飼童の、なりあしくてもたるこそあれ——何よりも、牛飼わらはの悪きを持つこそ、悪くあれと也。
○ことものどもは、されどしりにたちて——牛飼童ならぬものも、悪きはよからねど、それはあとよりゆくゆゑ、苦しからずと也。
○くるきはかまのすそなる——すゝけてくるき袴なるべし。もとは末濃にて黒くすゝけたる也。
○かりぎぬは何もうちなればみ——狩衣のえり袖なども、着馴れてしほたれしを着たるさま也。
○はしる車の方などに——車は走るに供はしづかにゆくが、しかも衣服も古めきたるは、やとひ人のやうにて、我者とは見えぬと也。
○やれなど時々うちしたれど——使人の衣服の破れたる事などは、時々ありとも着馴れてなりあしからず、罪なく見ゆらむは、さもあるべしと也。
○そこにある人として——其の家につかふる人として、使者にて見るにも、客などの來ても、よき童のあまたあるはよしと也。

五十

一引延也
 ニイコ
 三赤也
 四さしあゆもち
 たる也
 五行也
 六香のきこえし
 也、前にあせの
 かへたるも
 あり
 七あたらしき也
 八色よきころ
 也
 九縞なり
 一〇粉を帯には
 める也
 二装束
 三負也

人の家の前をわたるに、さぶらひめきたる男、土にをる物などして、をのこ兒の十ばかりなるが、髪をかしげなる、引きはへても、さばきてたるも、又、五つ六つばかりなるが、髪は頸のもとにかいくみみて、つらいと赤うふくらかなる、あやしき弓、しもとだちたる物などさげたる、いとうつくし。車とどめて、抱き入れまほしくこそあれ。又、さて行くに、薫物の香のいみじくかへたる、いとをかし。よき家の中門あけて、檳榔毛の車の白うきよげなる、はし蘇芳の下簾のしりはさみても、よげにて、榻に立ちたるこそめてたけれ。五位、六位などの下簾のしりはさみても、さくのいと白き、かたにうちおきなどして、とかく行きちがふに、又装束し、壺胡篋ひたる隨身の出で入る、いとつきづきし。くりや女のいと清げなるがさし出て、「なにがし殿の人やさぶらふ」など云ひたるをかし。

- つちにをるものなどして——此の詞心得がたし、字のたがへるにや、多本を勘ふべし
- さばきてたるも——此の詞亦可勘
- しもとだちたる物——楮シモト、杖種同、すは杖杖などをいふ也、しもとめきたる物也
- 車とどめて、いだきいれまほしく——清少の車をとどめて、かの子をいだきいれたきと也。前に人の家の前をわたるとある首尾なり。

一轟くといふ名
 につきてなり

龍は音無の瀧。布留の瀧は、法皇の御覽じにおはしけむこそめてたけれ。那智の瀧は、能野にあるがあらはれなるなり。轟の瀧は、いかにかしがましくおそろしからむ。

五十一

- びらうげの車——前に注す。
- はしすはうの下すだれ——端蘇芳下簾、したすだれのほいつかたを、すはうにそめたる也。
- つばやなぐひ——壺胡篋、平胡篋とてあり。矢をいゝ物也。
- くりや女——厨女、みづしをむなをいふなるべし。
- なにがしどのの人やさぶらふ——それどのの人とよび尋ねるさま也。

- 音無の瀧——山城の北、大原にあり。
- ふるのたき——布留瀧、大和にあり。
- 法皇の御覽じに——宇多法皇か花山法皇にや、可尋之。
- 那智瀧——紀伊國也。
- とどろきの——轟瀧、奥州にあり。

- 一 大井、山城也
- 二 水無瀬、山城也
- 三 耳敏河、山城也、拾芥壺所、部ニ云、朱雀門、前二條の南云々
- 四 み、さき心也
- 五 音無河、紀伊牟婁郡能野邊云々
- 六 思ひもよらぬ名也
- 七 備中、吉備の中山帯にせるこよみし也
- 八 玉屋河、奥州也
- 九 貫川
- 一〇 澤田川、山城也
- 一一 未勸
- 一二 大和也
- 一三 三雲渡(註)、折木(齊隆)

五十二

イ本此の一段奥の、人の家につきづきしき物の次、むまやはといふ前にあり

川は 飛鳥川、瀬瀬定めなく、はかなからむと、いとあはれなり。大井川。泉川。水無瀬川。耳敏川、又なに事を、さしもさかしく聞きけむとをかし。音無川、思はずなる名とをかしきなり。細谷川。玉屋川。貫川、澤田川、催馬樂などのおもひはするなるべし。なりのその川。名取川も、いかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、この下にもあるなり。「七夕つめに宿からむ」と、業平が詠みけむも、ましてをかし。

○飛鳥川——大和也、古今云、「世の中は何か常なる飛鳥河きのふの淵ぞけふはせとなる」此の歌の詞にてかけり。
○いづみ川——泉川、大和也、童蒙抄云、「いづみ川とは、崇神天皇の官軍、更那羅山をさけて、進みて輪轉河に至りて、武城安彦、河を挟みて、いさみて各相挑む、故に時の人、其の川を改めて挑川といふ。今泉川といふは訛也。委日本紀。
○ぬき川——梁塵愚案抄云、美濃の國に、伊豆貫川といふ所あり。伊豆略していへり。

○さいばらなどの——貫川も澤田川も、催馬樂の律のうたひ物なれば也。梁塵愚案抄云、催馬樂は昔諸國より、御調物を大蔵省へ納めし時、民の口ずさびにていへり。

うたひける歌なれば、催馬樂と名付くる也。馬を催すとかけるは、御調物を負へる馬をかり催す心也。

○なとり川——名取河、奥州也。

○このしたにもある也——此下界、河内國交野の南、枚方の北にあり。

○七夕つめにやどからむと——古今羈旅云、惟喬のみこのともに狩にまかりける時に、天の川といふところの河のほとりにおりみて、酒などのみけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、盃はさせといひければよめる。在原業平朝臣、「狩りくらし七夕つめに宿からむあまのかはらに我はきにけり」伊勢物語にもあり。七夕つめとは七夕妻也と、牡丹花の聞書にあり。

五十三

橋は あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の舟橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鶴の橋。ゆきあひの橋。小野の浮橋。山背の橋。名を聞きたるをかし。うたよねの橋。
○あさむつの橋——催馬樂に淺水とあり。愚案抄に、飛驒にも越前にも名所に

- 一 長等橋、津國也
- 二 未勸
- 三 濱名、遠江也
- 四 上野也
- 五 燈籠の歌詠の橋にや、可慈之

八雲に、大和
さあり
ヤ勢多、近江也
八雲
九八雲、津國云
云
一〇八雲には、を
づの浮橋さあり
二八雲に、下野
云々
三八雲、大和云
云

入る云々。
○ひとつばし——津國也、「難波わたりの一橋」とよめり。但非二名所一歟、獨
梁和名ヒトツバシ。
○をがはの橋——小川橋、新撰名所集に、陸奥とあり、八雲御抄には筑紫と云
云。
○かけはし——梯史記、棧道書、漢書棧道今謂之閣道。
○かささぎのはし——八雲抄、天の川也云々。淮南子、烏鵲填河成橋。度二級
女云々。
○ゆきあひのはし——是もかささぎの橋と同じ、孫姬式云、銀漢鵲之會橋云
云。
○やますげの橋、名を聞きたるをかし——イ本山菅の橋、すぢわたしたる欄橋
心せばければ名を聞くにをかしき也云々。

五十四

一八雲、近江云
云
二八雲にも、い
づくもなし

里は逢坂の里。ながめの里。いさめの里。人づまの里。たのめの里。あさ風の
里。夕日の里。とほちの里。伏見の里。ながるの里。つまとりの里。人に取られた
るにやあらむ。我取りたるにやあらむ、いづれもをかし。

三未知
四八雲にもしれ
五橋渡也
六八雲大和云々
七丹後
八八雲にも、其
の國見えす

○とほちの里——大和の十市里にや。一説八雲御抄云、とほちの里は只遺き事
也。狭衣に嵯峨をとほちのさととよめり。
○ふしみのさと——井蛙抄頼阿云、後拾遺、「都人くるればかへる」とよめる
は山城の國也。菅原や伏見里は大和也。
○ながるのさと——八雲云、大和、攝津にもあるか。

五十五

一さやうのかざ
し也
二藪にはへてや
さしき物なれば
也
三蛇床子(延喜
式)
四苦
五イカ草
六酢漿(和名)世
にすひ物草とい
ふもの也
七危草といふな
るべし
八八雲に壁に壁
云々

草は 菖蒲。こも。葵いとをかし。祭の折、神代よりして、さるかざしとなりけ
む、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし。おもだかも、名のをかしきなり、
心あがりしけむとおもふに。みくり。ひるむしろ。答。こだに。雪間をあを草。か
たばみ。あやのもんにても、こと物よりはをかし。あやふ草は、岸の額に生ふらむ
も、げにたのもしげなくあはれなり。いつまで草は生ふる所、いとほかなくあはれ
なり。岸の額よりも、これは崩れやすげなり。まことの石灰などには、え生ひずや
あらむと思ふぞわるき。事なし草は、思ふ事なきにやあらむと思ふもをかし。又あ
しき事を失ふにやと、いづれもをかし。
○さうぶ——菖蒲也。
○こも——蔦藪抄、菖和名。

九疊に生ふるは
岸に根をはなれ
たるよりはあや
ふしき也
三石灰、白疊の
事なるべし
二物忌なごをつ
けて、麗冠につ
くる心にや

○あふひ——葵也、二葉草、もろ葉草ともいふ也。賀茂の神山などに生ひて、御形の日の神事に用ふる也。世に向日葵などいひて、花をもてあそぶ草とは別也。

○おもだか——澤瀉也。

○心あがりしけむとおもふに——面高といふ故、心あがりしけむと思はれて、其の面白きと也。曲禮曰、凡視上於面一則、敖、註、呂氏曰、上於面者、其氣驕、知三其不、能以下人矣。

○みくり——八雲に、實九里云々、和名云三陵草ミクリ。

○こだに——源氏宿木卷に、こだになど引きとらせ云々。河海に、木蠟、葛の類也云々。古今の物名に、「ちりぬればのちはあくたに」とよめるは苦丹とかけを、飛鳥井榮雅の、こだにと同前の由のたまへり。

○あやふ草は、きしのひたひに——朗詠云、觀身岸額、離根草。

○事なし草——河海、忍草の一名の由見ゆ。此の枕双紙には、此の次に別に忍草を出たされれば、又一種あるにや尋ぬべし。

忍草しのがさ、とあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちに生ひ出でたる様、いとをかし。蓬、いとをかし。茅花、いとをかし。濱茅の葉は、ましてをかし。まろ小菅、浮草、淺茅、青つづら、木賊といふ物は、風に吹かれたらむ音

四聊かなる所に
しひて生ひたれ
は云ふ也
五芥(文集)蓬
(同)
六蓬茅
七よのつねの茅
よりはさ也
八別三陵
九蓬
一〇淺茅
一一青蘗草
一二木賊
一三養
一四愛らしき心也
一五助字也
一六八重葎
一七山嵐
一八葎
一九葛

こそ、いかならむと思ひやられてをかしけれ。葉のらうたげにて、のどかに澄める池のおもてに、大きなると小さきと、ひろがり漂ひてありく、いとをかし。取りあげて、物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。八重葎、山菅、やまゐ。日蔭、濱木綿、葎、葛の風に吹きかへされて、裏のいと白く見ゆるをかし。

○しのぶ草——イ童蒙抄云、「獨りのみながめふる屋の妻なれば人を忍ぶの草ぞ生ひける」六帖にあり。忍ぶとは垣衣とかけり。苔の類也。宿の軒垣など、生ふる也。

○つばな——茅花、淺茅の花にや。童蒙抄に、あさちと同所にあり。八雲にはちばなとあり。

○まろこすげ、らき草——イ本、此の次に、こまあられさゝたかせとあり。次の歌の題はといふ所に出づべきを、衍文なるべし。

○ならしげ——檜柴は木也。別になら芝などいふ草あるにや尋ぬべし。

○おほきなると、ちひさきと——杜子美詩點、溪荷葉疊、青錢、といへる風情にや。イ本、蓮は萬の草よりも世にすぐれめでたし。妙法蓮花のたとひにも、花は佛に奉り、みはずにつらぬき、念佛して往生極樂の縁とすればよ。又花なき頃みどりなる池の水に、紅に咲きたるもいとをかし。されば葎扇紅と詩にもつ

くりたるにこそ云々。
 ○やますげ——世に、ぜうがひげといふ草也。童蒙抄云、麥門冬とかけり。萬葉第四、「やますげのみならぬ事を我によりいはれし君は誰とねぬらむ」八雲抄云、山すげは實ならずといへり。又みならずと云ふ。普通の山すげ實あり云々。
 ○ひかげ——花鳥餘情云、日蔭草をば、さがりごけともいふ。和名云、蘿ヒカゲ、女蘿也云々。
 ○はまゆふ——童蒙抄云、濱木綿とは、芭蕉に似たる草の三熊野の濱に生ふる也。莖の皮のうすくて、おほくかさなると也。人丸も、一浦のはまゆふも、へたる」とよめり。

五十六

集は 古萬葉集。古今。後撰。

○古萬葉集——萬葉集の事也。清輔袋及紙云、此集本代之人稱古萬葉集。源順集にも古萬葉の中にと云ふ事あり。是有新撰萬葉集若菅家萬葉集等之故歟。新撰萬葉集は、延喜御時抄二出之云々、五卷也。又云、萬葉撰者或稱二橋大臣唐兄一或稱二家持一云々。
 ○古今——むかしは本々さだまらざるを、定家朝貞應、嘉祿の真書の兩本を註

- 一 證
- 二 雀
- 三 壺
- 四 蔭
- 五 高瀬
- 六 鷺
- 七 芝
- 八 梨
- 九 桑

本に定めさせ給へり。中にも貞應本を二條家には用ひらる。延喜の御時貫之以下四人の撰勿論也。

○後撰——天曆五年十月梨壺五人選之。此の本も朱雀院の塗籠の本、純水の青表紙の本などありしかど、定家卿の貞應二年の本、天福二年の本等を證本と用ゆ。袋双紙云、嶋守遠高云、古今、後撰、拾遺を號三三三集、以往相二加萬葉集、號三三三集、而拾遺出來之後、棄二萬葉集、用二拾遺云々略記。

五十七

歌の題は 都。葛。みくり。駒。霞。篋。童。日蔭。こも。たかせ。鶯。淺茅。しほ。青つづら。梨。寶。朝顔。
 ○歌の題は——よのつねの題のみならず、隱題によむべき物どもと見ゆ。
 ○くず——葛也。
 ○こま——駒也。
 ○あをつづら——青轡草。

五十八

草の花は なたしこ、唐のは更なり、やまとのも、いとめてたし。女郎花。桔梗。